

# 藤沢市文化財調査報告書

## 第 61 集

2026 年 3 月

藤沢市

## 刊行にあたって

藤沢市文化財調査報告書第1集が昭和39年に刊行されてから、61年が経過しました。この間に本市の歴史・民俗・天然記念物など多岐にわたる分野の調査成果がまとめられ、冊子となり皆様に提供されてきました。

今回は、文化財保護委員の伊藤一美氏の現代語訳『親玄僧正日記』連載の第九回目、同じく文化財保護委員の鈴木良明氏の江島御師旧蔵の版木等資料について、上本進二氏の遺跡調査で見つかった自然災害の痕跡についての玉稿をいただきました。加えて、郷土歴史課職員による「玉縄城と藤沢市の城館遺構」についての論考を掲載いたしました。また、郷土歴史課主催で開催したシンポジウム、藤沢市が会場となった「第47回相模ささら踊り大会」、藤澤浮世絵館で開催した企画展の開催報告を掲載しています。この他に藤沢市指定重要文化財の現状変更（修理）の報告を付しました。

これまでと同様に皆様が藤沢市の歴史や地域文化の研究に際して、この報告書を役立てていただければ幸いに存じます。

文末とはなりますが、執筆者の皆様はじめ、調査にご協力いただいた皆様、そして文化財の所有管理者の皆様感謝するとともに、本書の刊行にあたりご尽力いただいた関係各位に厚く御礼申し上げます。

2026年 藤沢市

## 目 次

1. 現代語訳『親玄僧正日記』（9）（永仁元年12月～永仁2年1月）… 1
2. 藤沢市の遺跡から見つかった自然災害の痕跡 …… 17
3. 玉縄城と藤沢市の城館遺構 …… 27
4. 【開催報告】シンポジウム『下土棚諏訪ノ棚遺跡と氷期の藤沢』… 37
5. 【開催報告】第47回相模ささら踊り大会（藤沢大会）… 71
6. 【開催報告】「黒船来航―幕末・明治の浮世絵―」… 73
7. 藤沢市指定重要文化財の現状変更等（修理）… 80
8. 江島御師善長坊（秋岡家）旧蔵版本等資料について …… (1)

現代語訳『親玄僧正日記』（9）  
（永仁元年 12 月～永仁 2 年 1 月）

伊藤 一美

## 現代語訳『親玄僧正日記』（9）

（永仁元年 12 月～永仁 2 年 1 月）

藤沢市文化財保護委員  
伊藤一美

「親玄僧正日記」は、醍醐寺三宝院に所蔵される日記で、記者は同寺覚洞院（地蔵院）親玄僧正（父は久我道忠）である。正応 5（1292）年 2 月から永仁 2（1294）年 12 月まで 3 年間の鎌倉滞在中の記録である。詳細は本誌第 53 集を参照されたい。

（前号より続く）

永仁元年 12 月（1293 年 12 月）

（読み下し）

1 日 天晴れ。別当坊へ移住しおはんぬ。その後、御身固のため御所へ参りおはんぬ。

（現代語訳）

1 日、天気は晴れ。（親玄は）別当坊へ移り住んだ。そののち、（将軍の）御身固のために、御所へ出向いていった。

（詳解）

・別当坊とは、鶴岡八幡宮別当の滞在する坊のこと。当時の別当は、北条経時の子頼助大僧正である（鶴岡叢書第 2 輯『鶴岡社務記録』鶴岡八幡宮社務所 1998）。当時 49 歳である（『同』）。  
・御身固とは、「身体を健全にするために、まじないなどをする事」（『小学館国語大辞典』1982）。ここでは「御所」にいる将軍久明親王の御身固を行う頼助大僧正の補助を行うために親玄僧正が八幡宮別当坊へ移住したのである。

（読み下し）

2 日 天晴れ。出仕しおはんぬ。

（現代語訳）

2 日、天気は晴れ。（親玄は御所に）出仕した。

（詳解）

・出仕とは、「公方なり、ある屋形なりの御殿へ行くこと」である（土井忠生・森田武・長南実編訳『邦訳日葡辞書』岩波書店 1980）。1 日に親玄が別当坊に一時移住し、そこから頼助大僧正とともに将軍御所に出て護摩などの事業を支えていたのである。

（読み下し）

3 日 大雪下る。成誉僧都、一瓶隨身し入り来りおはんぬ。幸松、温泉より帰りおはんぬ。今日、出仕せず。頼有僧都、手替りたり。

（現代語訳）

3 日、大雪が下った。成誉僧都が（酒の）一瓶を携えてやって来た。幸松が温泉から帰ってきた。今日は、（親玄は）出仕しなかった。頼有僧都が代理として（御所へ）出仕した。

（詳解）

・成誉僧都とは、寺門派出身の僧。弘安 8（1285）年 4 月、観助が仁和寺法務法印権大僧都により鶴岡別当坊にて灌頂をうける際に「持金剛衆十四口」の一人として「駿川 成誉」とみえる（『特別展 仁和寺御流の聖經』95p 金沢文庫 1996）。なお、本日記では正応 5 年 2 月 17 日

条が初見である。

・幸松とは、鶴岡八幡宮寺の舞童である（今江広道編『前田本玉燭宝典紙背文書』1-24号続群書類従完成会2002）。また弘安8年4月の「(仮題)観助受灌頂記」には、「持幡童二人 鈍色重装束 左 春王 右 幸松」とある（『特別展 仁和寺御流の聖經』95p 金沢文庫1996）。本日記の11月13日条に幸松が温泉に出向いたことが見えている。

・頼有僧都とは、小野流の系譜を引く僧。播磨とも号する。文永5(1268)年9月13日、経円から佐々目住坊で伝法灌頂を承ける（「血脈類集記」『真言宗全書』第39巻、真言宗全書刊行会1934）。弘安4(1281)年4月20日、明王院北斗堂において、権律師として異国降伏如法尊勝法の供僧となる（「異国降伏祈祷記」(『神奈川県史資料編古代中世②』921号。伊藤一美「弘安4年4月『異国降伏祈祷記』の歴史的意義」『鎌倉』91号2001)。弘安8年4月、権律師大納言観助が八幡宮別当坊で灌頂を承ける際に「持金剛衆十四口」のひとりとして「播磨 頼有 神供」役を務めている（『特別展 仁和寺御流の聖經』95p 金沢文庫1996）。本日記の永仁元(1293)年10月18日条では、親玄が大阿闍梨として若宮別当坊において將軍家の天変御祈如法尊勝法に際して供僧（権大僧都）となっている。

本日記永仁2年4月22日条では、北条貞時の御願不断尊勝陀羅尼の供僧を務めている。同6(1298)年10月13日、佐々目遺身院において上乘院宮益助法親王が長助（名越宗長の子）に伝法灌頂を行った際に、「持金剛衆十四口」の一人として職衆「権大僧都 頼有」と見える（金沢文庫保管「伝法灌頂記 劔阿手扱本」、『特別展 仁和寺御流の聖經』101p 金沢文庫1996。永井晋編『鎌倉僧歴事典』八木書店2020）。

・手替りとは、武家社会で頭（かしら）立った人の代理をする者、手代（『岩波古語辞典』、『小学館国語大辞典』）。

（読み下し）

4日 天晴れおはんぬ。（本文記載なし）

（現代語訳）

4日、天気は晴れになった。（本文記載なし）

（読み下し）

5日 同じ。（本文記載なし）

（現代語訳）

5日、同じく（天気が晴れになった）。（本文記載なし）

（読み下し）

6日 天晴れ。壇所に向かい、僧正に対面す。かの祈祷事、申し談じおはんぬ。その後、御所へ参る。夜陰に及びおはんぬ。（京極）為兼参るの間、見参に入らず退出しおはんぬ。今日、湯を結構しおはんぬ。七僧・殿法印等来臨しおはんぬ。

（現代語訳）

6日、天気は晴れ。（笹目の頼助僧正の）壇所に向かい、僧正に対面した。例の（將軍家護持の）祈祷事について相談した。その後、（將軍家）御所へ参上した。（参上は）夜陰に及んでしまった。（京極）為兼がやってくるというので、（將軍への）見参はいたさず退出した。今日は、湯を沸かして接待をした。七僧（七条僧正道朝）と殿法印等がやってこられた。

（詳解）

・為兼とは、京極為兼のこと。父は為教（『尊卑分脈』1の294p。以下『分脈』1の294pと略）。武家歌人の宇都宮頼綱（蓮生）の曾孫。初見は本日記正応5年10月14日条。御子左、冷泉家などの歌人らとも交流していることも知られる。なお土岐善麿『京極為兼』（西郊書房1947）、井上宗雄『京極為兼』（吉川弘文館2006）などを参照。

・七僧とは、七条僧正の略で久我通光の子道朝のこと。親玄僧正の叔父にあたる（『分脈』3の509p、村上流源氏）。「醍醐寺座主讓補次第」（『続群書類従』4下）に「第三八前権僧正道朝、

定濟弟子、宝池院同宿、文永十年十二月十一日、為頭右大弁頼親奉行、任定濟之讓、可令寺務之由、被下綸旨」とあるのも参照。本日記での初見は、正応5年9月27日条である。

・殿法印とは、一条実経の子で実聖。真言広沢流で永仁2(1294)年12月23日に左々目御影堂で頼助から伝法灌頂を承ける(「血脈類集記」『真言宗全書』第39巻)。永井晋編『鎌倉僧歴史典』参照。

(読み下し)

7日 天晴れ。今日、僧正「○」退出せられおはんぬ。愚身また壇所へ参りおはんぬ。

(現代語訳)

7日、天気は晴れ。(左々目頼助)僧正が(壇所から)退出なされた。愚身もまた壇所に参上した。

(詳解)

・僧正とは、左々目の頼助僧正の事。この7日に僧正が壇所から祈祷を終えて退出することとなり、親玄僧正は、頼助を迎えるために壇所に改めて訪れたと見てよい。なおこの本文には「僧正」の次に○印が筆で書きこまれており、これ以下の文章「僧正、退出せられおはんぬ」文が8日条にも記されるものと理解した。

(読み下し)

8日 天晴れ。「○」退出せられおはんぬ。

(現代語訳)

8日、天気は晴れ。「○」僧正は退出なされた。

(詳解)

・当該条は、前条の「詳解」に基づき、一部を追加して補訂した。

(読み下し)

9日 天晴れ。有房朝臣書状到来しおはんぬ。27日京都を罷り立つ由なり。塩飽入り来たりおはんぬ。

(現代語訳)

9日、天気は晴れ。(六条)有房朝臣の書状が到来した。27日に京都を出発するとのことである。塩飽(右近)なる者が(親玄のもとに使者として)やってきた。

(詳解)

・有房朝臣とは、藤原(六条)有房のこと。父は六条通有で、有房は千種氏を称す。正安元(1299)年に正3位、非参議。六条内府と称される。歌学の二条為世に師事し、京極派とは後に対立することとなる。元応元年7月2日死去(『分脈』3の507p)。

・塩飽とは、塩飽右近のこと。本日記の初見は正応5年4月11日条である。得宗家の被官で御内人の一人。瀬戸内海の塩飽島出身の武士。本日記には「塩飽三郎兵衛」(6月13日条)、「塩飽宗遠」(7月7日条)。本日記では、塩飽氏が北条得宗家から派遣され、祈祷関係の依頼を親玄僧正に連絡をしていることが各条で共通している職務である。

(読み下し)

10日 天晴れ。辰の時、女房頓病出来ず。兵庫、使者として招き請ふ。向ひおはんぬ。念誦のためと云々。長崎来たりて云く。何事祈祷として宜しべきかなと云々。愚身、今日より北斗護摩これを始め行ふ。砂金20両これを送る。道昭房、新殿に於て不動護摩これを始む。

(現代語訳)

10日、天気は晴れ。辰の時(午前8時頃)、女房(北条貞時室)が急な病気となった。兵庫が使者となって、(親玄を北条邸に)招致しにきた。(親玄は)向かった。(女房の病気の)念誦のためであるという。(使者の)長崎がやってきた。どのような祈祷を行うのが良いのかということであった。自分としては、今日から祈祷として北斗護摩をはじめつもりだった。(北条

家使者から) 砂金 30 両が送られてきた。道昭房は新殿で不動護摩を行い始めた。

(詳解)

・女房とは、北条貞時の室のこと。永仁元年 7 月あたりから「女房」に関わる祈禱の依頼が続出する事にも注意したい。親玄僧正は連日のように「女房身固」のために出向いているのである。

・兵庫とは、北条貞時家の使者。本日記の正応 5 年 11 月 2 日条に、「内匠頭」と「兵庫頭」が親玄のもとに使節としてきているが、この「兵庫頭」とは限らない。

・長崎とは、北条貞時家の被官長崎氏のこと。なお得宗被官長崎氏については、細川重男『鎌倉政権得宗専制論』(吉川弘文館 2000) 参照。

・道昭坊とは、本条のみに見える人物。不動護摩を行っていることから真言僧のひとりであることはわかる。なお同時期の「道承」なる真言僧がおり、親玄僧正が後の正安 3 (1301) 年 3 月 21 日、鎌倉で「道承」に伝法灌頂をおこなっている (永井晋編『鎌倉僧歴事典』)。

・新殿とは、新たに設けられた「壇所」の一つか。

(読み下し)

11 日、天晴れ。亥刻ばかり、塩飽右近を以つて二衣一領これを送る。女房頓病、早速平癒。しかしながら法験加持力の致す所なり。返す々々恐れ入ると云々。ことさらまた進らせしむの由これを申す。仍つて謹しんで請けおはんぬの由返答す。僧正参られ、対面しおはんぬ。

(追筆)

「今年 12 月 11 日、一条殿薨ぜしめ給ふと云々。46 歳と云々」。

(現代語訳)

11 日、天気は晴れ。亥の刻 (午後 10 時頃)、塩飽右近が二衣セットになった一領衣を送ってきた。(貞時室の) 頓病が早速に良くなった。これは法験加持の力が及んだ証拠である。振り返ってみても真に恐れ入ることだ、と (貞時からの仰せ) ということだ。これだけ効験があったので、また (親玄僧正に) 来ていただきたいとのことであつた。それで (親玄は) 謹んでお請け致したいと返答した。(左々目の頼助) 僧正が参られたので対面をした。

(追筆)

「今年 12 月 11 日、一条殿がお亡くなりになられたということである。46 歳ということである」。

(詳解)

・塩飽右近とは、北条貞時家の得宗被官のひとり。本日記の初見は、正応 5 年 4 月 11 日条である。なお北条氏研究会編『北条氏系譜人名辞典』(新人物往来社 2001) 参照の事。

・一条殿とは、前摂政の藤原 (一条) 家経のこと。当該条の日に死去。父は藤原実経で後光明峯寺殿と号す。前左大臣従一位で 46 歳であつた (『公卿補任』2 の 318 p。『尊卑分脈』1 の 98 p 参照)。

(読み下し)

12 日 天晴れ。(記載なし)

(現代語訳)

12 日、天気は晴れ。(記載なし)

(読み下し)

13 日 天晴れ。今日は今度所生姫御前、「○」初めて招請の由これを聞く。

(現代語訳)

13 日、天気は晴れ。今日は、今度初めて生まれた (貞時の) 姫御前に対する (祈禱の) 招請があるとのことを聞いている。

(詳解)

・姫御前とは、北条貞時の女子のこと。これ以外の女子には 5 人ほどいる。なお北条氏研究会

編『鎌倉北条氏人名辞典』勉誠出版 2019) 参照の事。

・本条には「○」が記され、脇に「初」字が付されている。

(読み下し)

14日 天陰り。小雨降りおはんぬ。左々目参られおはんぬ。一献を勧めおはんぬ。

(現代語訳)

14日、天気は陰り。小雨が降っていた。左々目(僧正頼助)がやってこられた。(親玄の坊で)一献を勧めた。

(詳解)

・左々目とは、当該日記では鎌倉左々目に住坊をもつ頼助僧正を指す。無量寿寺ケ谷、佐助ケ谷から長谷の間にある地域である。4代執権北条経時はこの谷に葬られたと伝えられている(『吾妻鏡』寛元4(1246)年閏4月2日条)。また将軍藤原頼嗣室は「佐々目ケ谷故武州墳墓之傍」に葬られている(同宝治元(1247)年5月14日条)。宝治2年3月29日には、「左々目谷堂」において北条経時3回忌が行われている。また『金沢文庫古文書』からは具体的な人名として「佐々目僧正有助」(①452号)、「佐々目大式法印」(⑩識語②1924号)、「佐々目殿」(⑩識語①359、360号)の名前が見える。なお「佐々目御坊」と呼ばれる「遺身院」で行われた伝法灌頂図が『金沢文庫資料全書9巻：寺院指図編』9-53から56号(便利堂1988)に見ることができる。

(読み下し)

15日 朝程、小雨下りおはんぬ。陰り晴れ定まらず。羽林、下着しおはんぬ。

(現代語訳)

15日、朝程に小雨が降ってきた。曇りと晴れが定まらなかった。羽林(近衛)の六條有房が鎌倉に到着した。

(詳解)

・羽林とは、唐名近衛中将を冠する六條有房のこと(『分脈』3の507p)。本日記の初見は正応5年11月15日条で、その後は永仁元年9月16日条に「今(夜カ)中将、(丹波)長光宿所に向かうと云々」と見える。以後、京都と鎌倉を和歌詠みの指導関係を通じて往来することとなる。

(読み下し)

16日 天晴れ。今日羽林の許へ向ひおはんぬ。夜に入りて沐浴しおはんぬ。

(現代語訳)

16日、天気は晴れ。今日羽林(六條有房)の所へ向かった。夜になって沐浴をした。

(詳解)

・羽林の許とは、六條有房の滞在している丹波長光の宿所を示す。本日記永仁元年9月17日条に医師丹波長光の宿所を鎌倉滞在场としていることがわかる。丹波長光については、美濃部重克編『伝承文学資料集成22』(三弥井書店2006)所載の「丹波氏系図」(内閣文庫「医陰系図」を参照。同書66p)によれば、「正四位下侍医忠長」から医療知識を継承している人物である。

(読み下し)

17日 天晴れ。今日、羽林出仕しおはんぬ。

(現代語訳)

17日、天気は晴れ。今日、羽林(六條有房)が(北条貞時の邸に)出仕していった。

(詳解)

・出仕とは、この日、正式に六條有房が執権北条貞時の屋敷へ挨拶訪問したことを示す。

(読み下し)

18日 天晴れ。今日炎上す。名越と云々。

(現代語訳)

18日、天気は晴れ。今日、(家屋等の)炎上することがあった。(その場所は)名越という。

(詳解)

・名越とは、現在の鎌倉市大町一帯で、逗子と鎌倉の境界地域に当たる(三浦勝男編『鎌倉の地名由来辞典』東京堂出版2005)。北条時政の「名越御館<号浜御所>」(『吾妻鏡』建久3年7月18日条)があり、北条政子が「産所」にした記事が見える。その後、北条義時の「名越山庄」は北条朝時から時章へ継承されている(『同』嘉禎元年閏6月15日条他)。名越地域は商業地域でもあり、火事も頻繁に起こっている。三善善信の「名越亭」に保管していた日記や文書類が火災で焼失(『同』承元2年正月16日条)、北条朝時「名越亭」(『同』安貞2年12月12日条)、北条時幸、町野康俊宿所の火事(寛喜3年正月25日条)の頻出記事が見える。

また永仁4年12月11日には、「鎌倉大せウマウ(焼亡)、大しやうくんタウ(將軍塔)のハシノモト(橋下)ヨリイテ(出)キテ、コマチ(小町)・ヲウマチ(大町)・ナコエノ入(名越入)、ミナヤケテ、人四百人ハカリ、ヤケシ(焼死)ニケリ」とあるように、名越地区には庶民もまた多数居住していたことが知られるのである(「称名寺蔵銅造宝篋印塔舍利塔裏落書」『神奈川県史資料編2古代中世(2)』1208号)。「大しやうくんタウ(將軍塔)のハシノモト(橋下)」とは、初代將軍源頼朝の「法華堂」があった鎌倉市雪ノ下・西御門付近で、滑川にかかる橋辺りが火元になったのであろうか。

(読み下し)

19日 天晴れ。(記載なし)

(現代語訳)

19日、天気は晴れ。(記載なし)

(読み下し)

20日 天晴れ。今日、また女房胸発こす。祈事これを示さる。砂金20両これを送る、愛染王護摩これを始める。羽林、佐々目に向かひおはんぬ。(合点)「しかるべからざるなり」。

(現代語訳)

20日、天気は晴れ。今日、また(北条貞時の)室が胸の病を起こした。(貞時から)祈事をせよと示され、砂金20両が送られてきた。(親玄は)愛染王護摩の祈禱を始めた。羽林(の六條有房)は佐々目の(頼助)もとに向かった。(合点)「それは不都合なことで行ってはならないことだ」。

(詳解)

- ・女房とは、北条貞時の室。本日記12月11日条に「女房頓病」とある記事を参照の事。
- ・「左々目」文字の脇に合点がなされており、追加の文章が後に記された模様である。

(読み下し)

21日 天晴れ。今夜、長光、使者として入り来りおはんぬ。社頭参籠事、申されおはんぬ。砂金これを送る。

(現代語訳)

21日、天気は晴れ。今夜、(医師の丹波)長光が(北条貞時の)使者としてやってきた。(鶴岡の)社頭に参籠していただきたいとのことであつた。(そのための)砂金も送られてきた。

(詳解)

・長光とは、医師の丹波長光のこと(『分脈』4の181p)。施薬使で父は忠長。本日記の初見は正応5年2月28日条で関係記事を載せてある。なお内閣文庫蔵「医陰系図」にも「忠長-長光」とある(美濃部重克編『伝承文学資料集成22医談抄』三弥井書店2006)。

(読み下し)

22日 同じく(天気は晴れ)。今日、左女牛若宮別当、違乱の由、これを聞く。今日、安東新左衛門、使者として左々目に向かふの由、播僧これを申す。

(現代語訳)

22日、同じく天気は晴れ。今日、左女牛若宮別当が違乱があったとのこと、この噂を聞いた。今日、安東新左衛門(重綱)が使者として、左々目(の頼助僧正のもと)へ向かうとのことを、播僧が(私に)伝えてくれた。

(詳解)

・左女牛若宮別当とは、京都堀河付近の左女牛(さめがい)にあった若宮の別当の事。左女牛には源頼義以来、源氏の堀河館が所在していたことから、そこにも若宮とその別当が置かれていたと考えられる。現在の京都市下京区醒ヶ井通り付近で「左女牛井」があることでも有名である(『角川地名大辞典京都府上巻』角川書店1982)。

・安東新左衛門とは、得宗被官の安東重綱の事。本日記の初見は永仁元年5月13日条である。本日記では永仁元(1293)年4月22日条で平禅門の乱に関わる平宗綱を尋問する役を北条貞時から命じられている。また永仁3年2月、南都の争いにつき、やはり貞時の使者として上洛している(細川重男『鎌倉政権得宗専制論』吉川弘文館2000)。

・播僧とは、頼助僧正の使者。本日記の初見は正応5年後6月26日条である。

(読み下し)

23日 天晴れ。(記載なし)

(現代語訳)

23日、天気は晴れ。(記載なし)

(読み下し)

24日 天晴れ。(記載なし)

(現代語訳)

24日、天気は晴れ。(記載なし)

(読み下し)

25日 天晴れ。(追記)「今日、若宮事、御下知を賜るの由これを聞く」。今日、羽林出仕、ご返事を給いおはんぬ。為兼、同じく出仕しおはんぬ。

(現代語訳)

25日、天気は晴れ。(追記)「今日、若宮の事につき、御下知状を戴けるということを聞いた」。今日、羽林(六條有房)の出仕してよいとする(北条貞時からの)ご返事があった。(京極)為兼も同じく出仕してよいとのことであった。

(詳解)

・若宮事とは、本日記12月22日条に見えた「左女牛若宮別当」に関する北条貞時の「御下知」なのであろうか。不詳である。

・為兼とは、京極為兼のこと。本日記の初見は正応5年2月28日付け権中納言京極為兼書状に見えるが、頼助が新僧正となったお祝いを申し述べている。

(読み下し)

26日 天晴れ。羽林、進発しおはんぬ。

(現代語訳)

26日、天気は晴れ。羽林(六條有房)が(北条貞時の殿中へ)出かけていった。

(詳解)

・羽林とは、六條有房のこと。本日記の永仁元年9月17日条に鎌倉への下向連絡があり、以来今日まで鎌倉に待機していたのである。

(読み下し)

27日 天晴れ。今日、夜に入って山内の武田家形に向かひおはんぬ。

(現代語訳)

27日、天気は晴れ。今日、夜になってから山ノ内にある武田氏の家形に（親玄は）向かった。

(詳解)

・武田家形とは、甲斐国の有力武士武田氏の鎌倉「屋形」と考えられる。鎌倉後期の武田氏については、佐藤進一氏が「光明寺残篇」所載「武田三郎<一族并甲斐国>」という存在を提起されている(『増訂鎌倉幕府守護制度の研究』256p 東京大学出版会 1998)。彼は、実名を「武田石禾(和)三郎政義」(「建武年間記」『群書類従』第25輯)で鎌倉初期の「石和五郎信光」子孫に当たり(伊藤邦彦『鎌倉幕府守護の基礎的研究[国別考証編]』岩田書院 2010)、(石和)信政-政綱-信家-貞信-政義(駿河守)と継承している(『尊卑分脈』3-327p)。父の貞信が貞和3(1347)年6月に死去しているので、本日記の永仁2(1294)年段階の武田氏屋形主は、政綱か、その子信家の可能性があるだろう。

・当該条の日付け27日が「七七」と記しており、そこを「廿七」と修正してある。

(読み下し)

28日 天晴れ。(記載なし)

(現代語訳)

28日、天気は晴れ。(記載なし)

(読み下し)

29日 天晴れ。(記載なし)

(現代語訳)

29日、天気は晴れ。(記載なし)

(読み下し)

30日 天晴れ。今日より社「頭」に参「籠」しおはんぬ。大守より参籠すべきの由、示さるの故なり。

(現代語訳)

30日、天気は晴れ。今日から(鶴岡八幡宮)頭への参籠を開始した。大守(北条貞時)より参籠してほしい旨の命があったからである。

(詳解)

・社とは、鶴岡八幡宮のこと。「頭」が「ミセ消チ」であり。「籠」字が「参」の右わきに付せられている。

永仁2年(1294年) 卷頭

(読み下し)

一長者	道俊僧正	永仁二年	後七日	道俊
二長者	勝恵正			
三長者	寛伊権			
四長者	守誉			

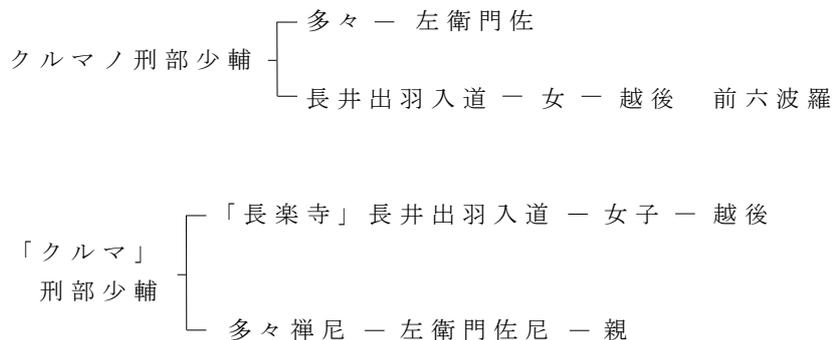
(現代語訳)

1長者	道俊僧正	永仁2年	後七日	(御修法) 道俊
2長者	勝恵(僧)正			
3長者	寛伊権(僧正)			
4長者	守誉			

(詳解)

- ・一長者とは、この場合は永仁 2 (1294) 年に行われた後七日御修法のトップを務めたものの意味である。以下は、その後に長者を務めた僧を示す。
- ・道俊僧正とは、金沢文庫蔵「弘長灌頂記」に大阿闍梨仁和寺開田准后法助が性助法親王へ仁和寺観音院にて伝法灌頂をする際、「色衆」36人のひとりの僧として「右大臣 道俊」と見える者と考えられる(『特別展 仁和寺御流の聖經』85p 金沢文庫 1996)。道俊僧正は、東寺一長者で理智院と称える。『尊卑分脈』1の67pによれば近衛基輔の養子、実は祖父道経の子である。延慶 2 (1309) 年 2 月 8 日死去、81 歳という。
- ・勝恵とは、天台寺門流の僧。弁法印と号す。建治 2 (1276) 年 7 月 26 日、園城寺唐院にて円助法親王から伝法灌頂を承ける。弘安 6 (1283) 年、鶴岡仏乗坊供僧となる。文保 2 (1318) 年 9 月死去する(『鶴岡八幡宮寺諸職次第』仏乗坊の項、鶴岡八幡宮 1991)。なお永井晋編『鎌倉僧歴事典』も参照)。
- ・寛伊とは、天台寺門流の僧。永仁 7 (1299) 年 4 月、園城寺唐院で実円から伝法灌頂を承ける。元亨 3 (1323) 年 2 月 28 日、鶴岡八幡宮寺の大仁王会の呪願を務めている(「鶴岡社務記録」『神道大系 神社編鶴岡』27p 神道大系編纂会 1978)。元徳 3 (1331) 年 6 月、園城寺の別当に就任。鎌倉においては証菩提寺別当、明石一心院別当を務めている(永井晋編『鎌倉僧歴事典』)。
- ・守誉とは、不詳である。参考として『尊卑分脈』1の176pに室町実藤の子で守誉なる者がいる。

(系図)



(詳解)

- ・長井氏は、大江広元子孫から生まれていく。『尊卑分脈』4の97p以下の大江氏系図によると、「刑部少輔」に任じられる。親広の孫政広系統が「少輔」を名乗り、また宗元の子政茂は「刑部権少輔、従五上、関東評定衆」となっている。だが本日記巻頭記載の系図は、この一族関係を示すものではないと思われるが不詳である。なお長井氏に関する研究は次のものがある。小泉宜右「長井氏の研究」(『古記録の研究』続群書類従完成会 1970)、西川広平「鎌倉御家人長井氏の同族間ネットワーク」(中央大学人文学研究所紀要 100号 2021)。

(読み下し)

廿四、衰日。寅申。

「永仁二」四十六<今年、後七日法、道俊僧正これを勤仕す。当年星、羅睺星>。

(現代語訳)

二十四方位による衰日にあたる日は寅申となる。「永仁 2」年は 46 (歳カ)。<今年の新年における、後七日御修法は道俊僧正がこれを勤めた。当年の星は羅睺星にあたる>。

(詳解)

- ・陰陽道でいう二十四方位では衰日(すいにち)で凶にあたり、十二支にある寅と申を結ぶ方

角が良くないので注意することを示す。当年の永仁 2 年は（親玄が）46 歳となるのだろう。今年の正月の後七日御修法は道俊僧正が担当して行う。今年の星回りは羅睺星（方位は南東）である。

・衰日とは、「すいにち」といい、陰陽道では悪日にあたる。人の生まれ年により特定の日がそれになるという（『小学館日本国語大辞典』、斉藤英喜『陰陽師たちの日本史』角川選書 2014）。

・後七日法とは、「後七日修法」のことである。後七日とは、正月 8 日から 14 日までの 7 日間で、宮中で神事を行う前 7 日に対し、仏事を行う後の 7 日をさす。宮中では、真言院にて玉体安穩・国利民福のために行う仏事の修法といえる（『小学館国語大辞典』）。

・道俊僧正とは、東寺一長者で理智院と称える。『尊卑分脈』1 の 67 p によれば、近衛基輔の養子、実は祖父道経の子である。

・羅睺星とは、宿曜経という経説中にあり「らごうせい」と読み、九曜星の最初に位置して、日食や月蝕にかかわる。方角は南東を指し、大凶となることが多い方位の一つである。

## 永仁 2 年 1 月（1294 年 1 月）

正月

（読み下し）

1 日 天晴れ。大納言僧都音信、同じく両界の間に参籠す。今日、安養坊、千秋万歳等その務めに及ばずと云々。尤も不審なり。

（現代語訳）

1 日、天気は晴れ。大納言僧都音信は、これまで同様に両界曼荼羅を（務めるために）参籠した。今日、安養坊は千秋万歳などの行事を務めることがなかったということである。（これは）尤も不審なことである。

（詳解）

・大納言僧都とは、不詳。その初見は本日記では正応 5 年 3 月 18 日条である。なお「音信」が名前と考えられるが、他の条では出てこない。

・安養坊とは、八幡宮寺内の「坊」の一つと考えられる。

（読み下し）

3 日 天晴れ。（記載なし）

（現代語訳）

3 日、天気は晴れ。（記載なし）

（読み下し）

4 日 天晴れ。今日初卯と云々。殿中より使者南條八郎兵衛あり。今日評定始と云々。

（現代語訳）

4 日、天気は晴れ。今日は初卯ということである。（北条貞時の）殿中より（親玄のもとに（北条貞時被官の）使者である南條八郎兵衛から、今日、評定始だということであった。

（詳解）

・南條八郎兵衛とは、北条貞時の被官、御内人のひとり。本日記では、この条のみに見える人物である。『吾妻鏡』仁治元（1240）年正月 2 日条に「忠時」の名前が見え、北条泰時の沙汰塚飯に際して馬引役を務め、また康元元（1256）年正月 4 日、的始の候補者として見える。

・評定始とは、新年最初の政策会議のこと。吉書などを読み上げる年初めの会議儀礼の一つ。

（読み下し）

5 日 雪下る。また使者あり。本馬（間）四郎なり。

（現代語訳）

5 日、雪が降った。また（北条貞時からの）使者があった。本間四郎という者だった。

（詳解）

・本間四郎とは、北条貞時の被官。得宗被官としての本間氏の事例を参考として以下に記す。徳治 2 (1307) 年 5 月、本間五郎左衛門尉 (『鎌倉市史史料編 1』円覚寺文書 42 号)、貞応 3 (1224) 年 11 月 13 日、本間左衛門尉 (市河文書『鎌倉遺文』⑤3308 号)、嘉禎 4 (1238) 年、本間左衛門尉 (伊勢金光明寺文書 7、佐藤進一『増訂鎌倉幕府守護制度の研究』所収) など。

(読み下し)

6 日 天晴れ。(記載なし)

(現代語訳)

6 日、天気は晴れ。(記載なし)

(読み下し)

7 日 天晴れ。(記載なし)

(現代語訳)

7 日、天気は晴れ。(記載なし)

(読み下し)

8 日 天晴れ。今日、心経会と云々。

(現代語訳)

8 日、天気は晴れ。今日は心経会ということである。

(詳解)

・心経会とは、般若波羅蜜多心経の教えを解釈して説く会の事。般若心経には、鳩摩羅什と玄奘の訳本があるが、日本では玄奘訳本が使用されることが多い (『小学館国語大辞典』)。

(読み下し)

9 日 天晴れ。今日より出仕しおはんぬ。今夜より児神楽これを始むと云々。「式は範性法印と云々」。

(現代語訳)

9 日、天気は晴れ。今日から (親玄は北条貞時御所に) 出仕した。今夜から児神楽を始めるということである。「この儀礼には範性法印が担当するということである」。

(詳解)

・児神楽とは、稚児が行う神楽の事。開催場所は八幡宮境内と思われる。  
・範性法印とは、本日記の初見は永仁元年 10 月 3 日条からである。親玄が彼の坊に向かう記事が見えている。  
・この本文の脇に護摩等を担当する僧侶名が付され、以下 13 日の条まで同様に追筆がされている。この注記は「児神楽」に関わる担当僧と考えてよい。9 日の夜に始まり、15 日が結願を迎えるのである。

(読み下し)

10 日 天晴れ。出仕しおはんぬ。「今夜、式は大弐法印と云々」。即ち相州亭へ向かひおはんぬ。明日来たるべきの由、平右衛門尉を以て返答しおはんぬ。

(現代語訳)

10 日、天気は晴れ。出仕することとなった。「今夜の (児神楽の) 式は大弐法印が担当するということである」。そこで相州 (北条貞時の) 亭に向かった。明日に来るようにとのことで、

(安東) 平右衛門を通じて返事があった。

(詳解)

・大弐法印とは、元瑜のこと。源延光子孫で父は薬師寺寛覚。真言広沢流。建長 4 (1252) 年、宏教より鎌倉無量寿院において保寿院流の受明灌頂を得る。同 5 年、宏教から小野安祥寺流の伝法灌頂を承ける。以後、さまざまな師匠を通じて各流の伝法灌頂を継承することとなる。弘

安7年正月、勝長寿院供僧となり、5月には安達泰盛による推薦で権少僧都、正応元（1288）年には頼助の推薦で法印補任。同2年11月、頼助より小野醍醐三宝院流の伝法灌頂を承ける。嘉元元（1303）年4月鶴岡八幡宮で大仁王会の読師となる。同年6月、頼助による将軍家彗星祈禱の鶴岡八幡若宮社壇十壇護摩に際しては、愛染明王護摩壇を務めた。同3年8月、幕府の推薦で権僧正となり、元応元（1319）年11月1日に92歳で死去する（以上、永井晋編『鎌倉僧歴事典』による）。なお本日記の初見は正応5年2月23日条である。また『特別展 仁和寺御流の聖經』（78、95p 金沢文庫 1996）を参照の事。

・平右衛門とは、得宗被官の安東氏のこと。本日記での初見は、正応5（1292）年7月10日条である。文永8（1271）年4月日越中国石黒庄山田郷雜掌申状（『鎌倉遺文』⑭10825号、蓬左文庫蔵「斉民要術」紙背文書）に「安東平右衛門入道蓮聖」の名前が見え、また文永10（1273）年4月24日得宗公文所奉行人連署下知状（『鎌倉遺文』⑮11252号、多田神社文書）にも筆頭の被官たる「安東右衛門入道」の成敗に従うようにとの記載もある。彼が出家名の「蓮聖」を自ら名乗る最初の文書は、文永6（1269）年6月10日の蓮聖書状案である（『鎌倉遺文』⑭10449号、蓬左文庫蔵「斉民要術」紙背文書）。ここでも東寺菩提院の用途借用に関する訴訟を指揮している。なお拙稿「醍醐寺親玄僧正日記・人名索引」（『游酔庵文庫紀要』第3号游酔庵文庫伊藤文化研究所 2023）を参照。

#### （読み下し）

11日 天晴れ。今日、殿中に参向す。「今夜式、弁法印と云々」。僧正（頼助）同じく参る。一所に於て謁しおはんぬ。太守（北条貞時）対面す。亭主、評定に出仕すと云々。その後、一献を勧められおはんぬ。僧正退出す。愚身同じく退出す。

#### （現代語訳）

11日、天気は晴れ。今日は（北条貞時の）殿中に向かった。「今夜の児神楽の式は弁法印ということである」。（頼助僧正が）同様に（殿中を）訪問してきた。（貞時邸で僧正と親玄は）ともに拝謁を受けた。亭主（貞時）は、（本日は）評定に出仕の予定があるという。（拝謁の）後に、（貞時から）一献を進められた。そののち頼助とともに（殿中から）退出した。

#### （詳解）

・殿中とは、北条得宗家の屋敷を指す言葉である。細川重男『鎌倉政権得宗専制論』（吉川弘文館 2000）参照。

・弁法印とは、聖瑜のこと。父は眞行坊。聖範より真言小野勸修寺流をうける。通称は近江、また弁。文永3（1266）年、佐々目禅房で良瑜から伝法灌頂をうける。弘安4（1281）年4月、佐々目頼助による異国降伏祈禱如法尊勝法に供僧のひとりとなる。永仁元（1293）年正月、法印として鶴岡社頭二十壇護摩金剛夜叉明王の護摩を務める。嘉元元年6月、将軍家彗星御祈の若宮社壇十壇護摩千手壇を務める。同年閏4月、鶴岡社社務政助の代理として大仁王会講師を務める。同2年9月17日に死去する（以上は永井晋編『鎌倉僧歴事典』による）。聖瑜は、永仁2（1294）年に鎌倉佐々目遺身院で「観助受灌頂記」という写本を筆写しており、金沢文庫に保管されている（『特別展 仁和寺の聖經』金沢文庫 1996）。なお本日記の初見は正応5年5月20日条である。

#### （読み下し）

12日 雪、降りおはんぬ。終日、天晴れず。「今夜、式は中納言法印と云々」。

#### （現代語訳）

12日、雪が降っていた。終日、天気は晴れなかった。「今夜の児神楽の式は中納言法印ということである」。

#### （詳解）

・中納言法印とは、範性のこと。本日記の初見は正応5年11月10日条である。『尊卑分脈』2の481p参照）によれば、高倉教範なる僧は「中納言法印範性子」とみえ、恐らく彼の出自は高倉家一族と考えられる。

(読み下し)

13日 小雪、時々降る。「今夜、式、大弐法印、これを勤む」。

(現代語訳)

13日、小雪で、時々降ってきていた。「今夜の児神楽の式は、大弐法印が務めた」。

(詳解)

・大弐法印とは、元瑜のこと。弘安8(1285)年4月、鎌倉鶴岡八幡宮別当坊にて仁和寺の法務法印権大僧都何某が観助に灌頂を授けた時、「持金剛衆十四口」のひとりに「権少僧都 大弐 元瑜 教授」と見える(『特別展 仁和寺御流の聖教』95p 金沢文庫 1996)。そして、この記録をした人物も元瑜であることは、同書に「弘安第八、晩夏下旬、受け奉るの禅命、卒爾にこれを染める、揮毫を期すのみ、権少僧都元瑜」とあることから知られよう(同書 98p)。なお、永仁6(1298)年、鎌倉の佐々目遺身院で上乘院宮益助が大阿闍梨名越長助(北条宗長子)に仁和寺御流を伝授する際に、「持金剛衆十四口」のひとりとして「元瑜 教授」となっている(同書 101p)。なお本日記の10日条の詳解をも参照のこと。

(読み下し)

14日 天晴れ (記載なし)

(現代語訳)

14日、天気は晴れた。(記載なし)

(読み下し)

15日 同じ。今夜、児神楽結願す。裏頭の神人交わり、見聞しおはんぬ。

(現代語訳)

15日、同じく天気は晴れ。稚児の奉納神楽式が結願となった。裏頭姿の神人がそれを見物していた。

(詳解)

・裏頭の神人とは、頭を頭巾などで包んだ神人のこと。この日記校訂者(「ダイゴの会「親玄僧正日記を読む会」)の注記では「雑」人と注記されている。この日、9日に始まった児神楽の結願を迎えたのである。

(読み下し)

16日 天晴れ。風いささか吹く。殿中に参り向かう。御鞠始めと云々。

(現代語訳)

16日、天気は晴れ。風が強く吹いていた。(親玄は)殿中に向かった。御鞠始の儀式が行われるということである。

(詳解)

・御鞠始とは、御所や北条邸にて、その年の「けまり」を始めて行う行事のこと。鎌倉将軍家の場合、源頼朝時期には全く見ることはできない。『吾妻鏡』建仁元(1201)年7月6日条に源頼家による御所で「百日御鞠」を行う記事が最初である。頼家は京都から「芸達者」一人を鎌倉に送ってほしいと後鳥羽上皇に依頼したことが契機となる。9月7日には上皇の命により紀内所行景が頼家の「鞠足」として大江広元邸に到着、9日に頼家に拝謁した記事がある。以後、頼家御所では、紀内行景の指導のもと北条時房・比企弥四郎時貞・富部五郎などの側近がこれを進めていくことが知られている。その後、北条泰時が中野能成に頼家の蹴鞠遊楽への批判的意見を伝えたことは有名である(『吾妻鏡』建仁元年9月22日条)なお、村戸弥生「研究ノート後鳥羽院の頃の蹴鞠(一)(二)」(『金沢大学国語国文』第48号2023・49号2024)を参照。

(本文空白あり)

(読み下し)

17日 天晴れ。なほ風止まず。

(現代語訳)

17日、天気は晴れ。いまだ風は止まなかった。

(読み下し)

18日 天晴れ。なほ風吹く。

(現代語訳)

18日、天気は晴れ。まだ風は吹いていた。

(読み下し)

19日 天晴れ。今日、使者あり。殿中に参向す。身固めのためなり。奥州の亭に向かはると云々。

(現代語訳)

19日、天気は晴れ。今日、(北条貞時邸から)使者があった。(親玄は)殿中に参向した。身固めを行うようにとのことであった。(親玄は)奥州(北条宣時の)屋敷に行くようにとのことであった。

(詳解)

・奥州の亭とは、北条宣時の邸宅のこと。北条朝直の嫡子で、母は足立遠光の女。北条大仏家の当主でもある。『徒然草』に、夜間に北条時頼に誘われて小土器の味噌をさがして、酒を酌み交わした逸話は有名である。文永2(1265)年引付衆、同4年武蔵守、同10年評定衆。弘安6(1283)年1番引付頭人、弘安10年8月19日、執権貞時のもとで連署となる(50歳)。正応2(1289)年6月、陸奥守に、同8月に従4位下となり、14年間も得宗貞時下で連署を務めていく。なお大仏家相伝の遠江・佐渡国の守護、また得宗家分国でもある若狭守護をも務めている。歌人としても優れ、「新後選和歌集」「玉葉和歌集」「続千載和歌集」「続後拾遺和歌集」などに収められている。元亨3(1323)年6月30日、86歳で死去する(以上は、北条氏研究会編『鎌倉北条氏人名辞典』(勉誠出版2019)を参照)。

(読み下し)

20日 天晴れ。湯を結構す。寅時、大守男口(子カ)降誕の由、夢想あり。

(現代語訳)

20日、天気は晴れ。(親玄は沐浴のために)湯を沸かした。(親玄は)寅の時に(午前4時頃)大守貞時の男子が誕生するという夢を見た。

(詳解)

・大守男口(子カ)降誕の由とは、北条貞時の側室播磨局浄泉の懐妊を暗示する夢の一つと考えられる。本日記の4月23日条を参照の事。

(読み下し)

21日 雨降りる。今日、頼有僧都のもとに遣はず。

(現代語訳)

21日、雨が降った。今日は、(親玄から)頼有僧都のもとに連絡を取った。

(詳解)

・頼有僧都とは、小野流の僧で播磨と号す。弘安8(1285)年4月、鎌倉鶴岡八幡宮別当坊にて仁和寺の法務法印権大僧都何某が観助に灌頂を授けた時、「持金剛衆十四口」のひとりに「播磨 頼有 神供」と見える(『特別展 仁和寺御流の聖教』95p 金沢文庫 1996)。また永仁6(1298)年、上乘院宮益助により鎌倉佐々目遺身院にて名越長助(名越宗長子)に仁和寺御流を伝授した際にも「金剛衆十四口」のひとり「権大僧都頼有」と見える(同101p)。本日記の

初見は永仁元年 4 月 13 日条である。

(読み下し)

22 日 天晴れ。宮律等、左々目へ向かひおはんぬ。

(現代語訳)

22 日、天気は晴れ。宮律らが左々目（笹目の頼助僧正）へ向かった。

(詳解)

・左々目とは、鎌倉佐々目ヶ谷の頼助僧正のこと。  
・宮律とは、権律師、通称は宮内卿で使者などを務めている。本日記での初見は正応 5 年 2 月 27 日条である。高橋慎一郎『親玄僧正日記』と得宗被官（五味文彦編『日記に中世を読む』217 p 吉川弘文館 1998）では実名を「重基」とされている。真言広沢流を継承。弘安 4（1281）年 4 月 20 日、明王院北斗堂で頼助大阿闍梨が異国降伏御祈如法尊勝法を務めた折の供僧を務め、同 8 年 4 月 25 日、鶴岡八幡宮社務別当坊での観助が伝法灌頂を受ける際にも讃衆を務めている（永井晋編『鎌倉僧歴事典』参照）。

(読み下し)

23 日 天晴れ。今日、観助僧都、書状を送ると云々。大守禁忌事出来ず。よつて田楽等延引と云々。

(現代語訳)

23 日、天気は晴れ。今日、観助僧都から手紙が送られてきたということである。大守（北条貞時）に禁忌すべきことが起きてしまった。そこで（予定していた）田楽等が延期されたということである。

(詳解)

・観助僧都とは、土御門頭方の子山科大納言入道孫雅方の子どもで、二条坊門内府の猶子となった（金沢文庫編『特別展 仁和寺御流の聖經』92 p 金沢文庫 1996）。本日記の初見は永仁元年 9 月 18 日条である。  
・田楽とは、豊作を祈念する田植え行事「田遊び」から発達して芸能化した神事芸のことで、田楽法師と称える専門的芸能者も生まれた。平安時代では『洛陽田楽記』に詳しく、その後は、白河田楽、奈良田楽、宇治田楽などが有名。鎌倉時代では、『吾妻鏡』嘉禄 3 年正月 2 日条に鎌倉の「田楽辻子東西一町余」が焼亡した記事が見られる。また執権北条高時が田楽好きであったことは、『太平記』巻 5「相模入道弄田楽并闘犬事」を参照。

(読み下し)

24 日 天晴れ。(記載なし)

(現代語訳)

24 日、天気は晴れ。(記載なし)

(読み下し)

25 日 同じく。(記載なし)

(現代語訳)

25 日、同じく（天気は晴れ）。(記載なし)

(読み下し)

26 日 雨降りる。今日より殿中に祇候す。左々目手替わりす。護摩勤仕料なり。今夜より同じく小山料不動供これを始む。夜に入りて天晴れ、雨止む。

(現代語訳)

26 日、雨が降った。今日から（北条貞時の）殿中に祇候することとなった。（これは）左々目（僧正の頼助の）の代わりに務めることとなったからである。護摩を焚いて務める勤仕料も得

た。今夜から（貞時の殿中で）同じく小山料不動供をも始めることとなった。夜に入って天気は晴れてきた。雨も止んだ。

（詳解）

・小山料不動供とは、不動護摩を行うものだが、詳細は不詳。

（読み下し）

27日 天晴れおはんぬ。（記載なし）

（現代語訳）

27日、天気は晴れた。（記載なし）

（読み下し）

28日 天晴れ。成朝僧都進発しおはんぬ。

（現代語訳）

28日、天気は晴れ。成朝僧都が（鎌倉を）出発した。

（詳解）

・成朝僧都とは、不詳。本条のみに見える僧。

（読み下し）

29日 雨降る。（記載なし）

（現代語訳）

29日、雨が降った。（記載なし）

（読み下し）

30日 同じ。（記載なし）

（現代語訳）

30日、同じく。（雨が降った）（記載なし）

（次号へ続く）

# 藤沢市の遺跡から見つかった自然災害の痕跡

上本 進二

# 藤沢市の遺跡から見つかった自然災害の痕跡

神奈川災害考古学研究所  
上本進二

## 1. 藤沢の地形と地質

藤沢市の地形は、高座丘陵と片瀬丘陵、相模野台地、境川や引地川の川沿いの谷底平野と、砂丘と砂丘間低地、低湿地（自然堤防を含む）に分類できる（上本・浅野 1998）。

高座丘陵（47m）と片瀬丘陵（56m）は約 13 万年前に陸地になった平野が隆起しながら浸食された結果、平坦面が残る丘陵地形になっている。関東ローム層は最大約 30m 堆積している。

相模野台地は約 8 万年前に陸地になった海成段丘で、藤沢市の北東端の長後小学校北方で約 40m、北西端の用田の辻で 24m、南西端の大庭城址公園で 35m、南東端の伊勢山公園で 49m、江ノ島で 60m となっている。このうち関東ローム層は最大約 20m 堆積している。海に近いほど低くならず逆に高くなっているのは、台地の南側ほど地殻変動を受けて隆起しているためである。江ノ島の平坦面も同じ時期の海成段丘であるが、山二つから西側と天台山には古相模川の礫層がある（藤沢市教育文化センター 2004）。

境川・引地川の谷底平野やその支谷に断片的に残る平坦面（河岸段丘）は約 3～1 万年前に陸地になったが、新しい台地なので浸食が進んでいない。

藤沢の低地は約 6000 年前の最温暖期になると海水面が上昇して海水が侵入して入江になった。これを縄文海進という。その後、海退期になると沿岸流によって相模川の土砂が藤沢入江の出口に運ばれ、砂州が発達して、入江の埋め立てが始まった。砂州はやがて砂丘となり、鶴沼のような低湿地も残ったので、砂丘と低湿地が入り混じる低地になった。以上の藤沢低地の過去 2 万年間の地形変化は、上本・浅野（1998）と藤沢市教育文化センター（2002）の『ふじさわの大地』に 8 枚の地形発達図で示されている。

藤沢市は富士山や箱根火山の西側にあるので、偏西風に乗って火山灰やスコリア（溶岩の粒）や軽石などのテフラが堆積した関東ローム層に覆われた。縄文海進後に新しく陸地になった藤沢低地にも富士山のテフラが堆積している。

このような地形と地質の特徴を持つ藤沢で行われた遺跡の発掘調査では、以下のような地震や津波、火山災害の痕跡が見ついている。

## 2. 遺跡発掘調査で見つかった地震跡の種類と事例

神奈川県内の遺跡から見つかった地震など過去の突発的な地震跡は上本・上杉（1999b）と上本（2021）にまとめたが、藤沢市の遺跡から見つかった地震と火山災害の事例を以下に示した。詳細は引用文献として挙げた遺跡報告書を参照してほしい。

地割れ（写真 1・2）

地震や地すべりによって地面に亀裂が生じる現象が地割れである。規模や形は様々であるが、割れ口が開いている地割れを特に開口地割れと呼ぶ（写真 1）。開口地割れの中には遺物やテフラが入っていることあり、地割れが形成された時期がわかることがある。

二伝寺砦遺跡（渡内）では、埋まっていた弥生時代の住居跡が元禄地震（1703 年）によって引き裂かれていた。その地割れが埋まった後に、さらに大正関東地震（1923 年）でもう一度地割れが起きている（上本・上杉 1999a; 写真 2）。

用田バイパス遺跡群（用田）は立川ローム層中から地割れと小断層や亀裂が多数検出された（上本 2002; 写真 3）。

本入ござっ原遺跡（善行）では立川ローム層の上面に 50cm 間隔で斜向する 2 方向の地割れが見つかった。斜面の下方に向かって引っ張られるような力が働いている（上本 1996）。

#### 小断層（写真 4・5・8・14・15）

小断層は活断層とは区別されており、地層の破断面に沿う数 10cm のずれを伴う小規模な地割れのことである。藤沢市の丘陵と台地はローム層に覆われており、遺跡の発掘調査では多くの小断層が見つかる。この小断層はローム層中のすべり面から派生していることが多い（写真 4）。小断層の大半は重力方向にずれる正断層である。小断層が階段状に多数密集している場所もある（写真 14）。このような場所では住居跡などが変形している。台地の端に近い斜面には地割れが密集する傾向がある。

慶応湘南藤沢キャンパスに関連した発掘調査（慶応 SFC 遺跡）では住居跡を切る小断層（写真 5）や段差を生じる小断層が多数見つかった（写真 8）。

遠藤打越・遠藤西谷遺跡は同キャンパス内にある遺跡で、長さ 100m 以上、最大落差は 80cm の断層の他、地溝状凹地が検出されている（写真 6）。地震の痕跡の形成時期は小断層が古墳時代のテフラに覆われることから、古墳時代前期～中期頃までの地震によって形成されたと考えられる（上本ほか 1993; 上本 2010a・2012）。

川名新林遺跡（川名）では、北西・北東方向の断層系があり、北東方向の断層が遺跡のある谷戸の方向と一致している。遺跡が立地する以前の断層と思われる（上本 2008）。

#### 地溝状凹地（写真 6・7）

菖蒲沢大谷遺跡（遠藤）では丘陵の丸い尾根状の稜線に長さ 200m、幅 2-10m の地溝状凹地が形成されており、凹地内覆土中から古墳前・中期～縄文時代草創期の土器が大量に出土した（写真 7）。地震の震動で丘陵の斜面が傾斜方向にすべった結果、稜線に平行な地溝状凹地ができたと考えられる。

西富貝塚では地震による地溝状凹地（写真 15）と小断層群が見つかった（上本 2005）。

#### 層面すべり（写真 9・10）

層面すべりは、地すべりの一形態であるが、主にローム層の層理面に沿って水平方向にすべり動く現象で、緩傾斜地でも頻繁に起こっている。東京軽石層（東京パミス層）のような厚い軽石層で構成され、水を含みやすく粘土化して不透水層となっている地層は層面すべりが発生しやすい。液状化してパミスダイクになることがある。いずれの場合も地下水が層面すべりの発生に関与している。

慶応 SFC 遺跡では古い地割れが層面すべりによって横にずれていた（写真 9）。

南鍛冶山遺跡（石川）では東京パミス層（最上部は火砕流堆積物）と三浦パミス層に層面すべりのすべり粘土層が数枚形成されている（写真 10）。これは強い地震の横揺れによって粘土質のすべりやすい層にそって地盤が横方向に動いたためである。すべり動く時の圧力によってパミス層内で液状化現象が起きている（写真 12; 上本ほか 1994）。

#### パミスダイク（写真 12・13）

強い地震をきっかけに、水を含んだ風化軽石が地震の振動によって液状化して（写真 12）、粘土質の地層中の圧が高まると、小断層・地割れ・亀裂に沿って上方または下方に絞り出されて脈状に噴き出すことがある（写真 12・13）。上杉ほか（1985）はこれをパミスダイクと呼んでいる。

南鍛冶山遺跡（石川）のパミスダイクはパミス層内のすべり面（写真 10）から始まっており、東京パミスが流動してロームブロックを巻き込みながら地割れに沿って上昇している（写真 12）。遺跡で観察できる液状化と地割れは、古墳時代の土層まで達しているので地震発生の時期は古墳時代と考えられる。ローム層内の風化軽石が液状化してパミスダイクを形成するまでのメカニズムが解明された遺跡である。

慶応 SFC 遺跡でも東京パミス層からのパミスダイクが見つまっている（写真 13）。

#### 地震性地すべり・崩壊（写真 14～16）

地すべりは地震の際によく起こる地変であるが、山地や傾斜地では集中豪雨など地震以外の原因でもしばしば起こっている。本稿には地形条件などから地震が原因と考えられるもののみを記載した。地震性地すべりは複数の小断層や無数の地割れを伴うことと（写真 14）、動いた土層ブロックが原形を留めたまま移動していることが多く、遺物や遺構が変形していても原型

が失われていないことがある。

小塚遺跡（渡内）では地すべりによって、弥生時代後期の住居跡の床面に多数の段差ができたり（写真 14）、蝶番状の変形を受けていた（上本 1998）。

西富貝塚（西富）では地溝状に陥没した凹地と小断層群が検出され、埋没していた縄文時代後期の炉石の一つが焼土とともに約 30cm 落ち込んでいる（写真 15）。古墳時代前期の地すべり起源の地割れであろう（上本 2005）。

隣接するチンガ塚古墳（西富）でも古墳の墳丘が崩落し、地すべり起源の開口地割れによってローム層に黒色土が落ち込んでいた（写真 16; 林原 2004）。

大庭城跡がある相模野台地の引地川側の崖下で、約 2 万年前に大規模な崖崩れが起きて相模野礫層が崩落し、石器製作のための礫を選別した遺跡となっていた。一度に大量の礫が崩落しているのので、地震が原因の可能性が高い（桜井ほか 2001）。

噴砂（写真 17～20）

噴砂は砂地に発生する液状化現象の一種で、地震の振動によって地下にあった砂や小礫が地下水とともに上方に移動し、地表に噴き出す現象である。

下沢遺跡（本鶴沼）は現地地表下 1.5m の砂層に皿状構造などの液状化跡があり、そこから当時の地表まで 98cm 噴砂が上がっている（写真 17）。遺物がないため噴砂の時期は不明である（根本 1998）。

川名原・市場遺跡（川名）は境川と柏尾川合流点下流左岸の砂質低湿地にある。砂丘砂の中に 50cm 噴き上がった噴砂が見ついている（写真 18）。

若尾山遺跡（朝日町）でも砂地の遺跡に噴砂が見ついている（写真 19; 上本・土屋 1998）。液状化による擾乱構造（地層の乱れ）（写真 21）

砂泥質の土地に立地する低地遺跡で見られる。本来水平に堆積していたはずの砂・シルト・泥の層が液状化現象によって混ざり合い複雑な模様になる。模様の形から皿状構造や柱状構造と称される（寒川 1992）。遺物を巻きこんでいる場合もある。

藤原北遺跡（本鶴沼・鶴沼海岸）では上位の黒色砂と下位の褐色砂の間に液状化による地層の乱れと噴砂のような砂の上昇跡と荷重痕が検出された（写真 20）。地震の揺れをきっかけにして形成された可能性がある（上本 1997）。

荷重痕（写真 20・21）

本来は水平であったと思われる地層境界が重い上位層が軽い下位層に垂れ下がると荷重痕ができる。地震の震動をきっかけに起きることもあるし、未固結状態で堆積している場合に起きることもある。低湿地や砂丘遺跡ではしばしば見られる現象である。

若尾山遺跡（大道小学校）では黒色砂と白色砂が入り混じっていて、重い黒砂が軽い白砂層に垂れ下がる現象である（写真 21; 上本・土屋 1998）。

### 3. 遺跡発掘調査で見つかった津波の痕跡

津波堆積物（写真 22・23）

片瀬宮畑遺跡第 3 地点（片瀬）では、藤沢市で初めての津波の痕跡の可能性のある堆積物が見つかった。遺跡は藤沢市片瀬の境川左岸（東岸）にあって、現在の河口から 3km 弱上流の標高 5-6m の砂質平野にある。円磨された海洋浮遊性軽石の堆積層（写真 22）は津波堆積物の可能性がある。海岸付近にあった軽石群（写真 23）が津波または高潮に運ばれて、海水は遡上限界付近で砂に浸透して消えたあと軽石がほぼ水平に堆積したまま残されたと考えられる（写真 22）。このような事例は鎌倉の材木座海岸の遺跡などでも複数検出されている。炭化物片を採取して放射性炭素年代測定を実施したところ、 $2921 \pm 22$  年前（縄文時代後期末～晩期前葉）であった（上本 2025）。

東海道藤沢宿遺跡（本町）でも境川を遡って来た津波の堆積物と思われる砂層薄層が見ついているが、風成砂の可能性もある（上本 2010b）。

#### 4. 地震で隆起した海岸

相模湾沿岸の海岸はほぼ 200 年周期で起きる関東地震（大正関東地震や元禄地震など）のたびに海岸が隆起している。江ノ島のような岩石海岸では隆起の痕跡が残っており、地震段丘と呼ばれている。

地震で隆起した海岸段丘（地震段丘）（写真 24・25）

江ノ島の海岸は地震で隆起した波食台（地震段丘）がよく保存されている。江ノ島東海岸にある「ヒガシの通り」と呼ばれる商店街の道路面は 1703 年元禄地震の地震で隆起した段丘面（元禄面）であり、80cm 下位の公園や駐車場がある面が大正関東大地震の地震隆起段丘面である（写真 24）。明治初期の観光絵はがきには、大正関東地震（1923 年）の地震隆起段丘隆起前の景観が見える。元禄面の 2m 上には納骨堂のある海食洞窟があるので、元禄地震以前の地震で隆起した海食洞であろう。また、江ノ島の南海岸には大正関東地震で隆起した広大な波食台（写真 25）と元禄地震で隆起した波食台の残骸がある（藤沢市教育文化センター 2002）。

#### 5. 遺跡発掘調査で見つかる火山噴火の災害跡

箱根火山は約 50 万年前から、富士山は約 10 万年前頃から大量のテフラ（火山灰・スコリア・軽石など）を放出するような爆発的噴火を開始し（上杉 2003）、南関東には偏西風によって運ばれた大量のテフラが継続して堆積するようになった。これが関東ローム層である。藤沢市では関東ローム層が最も厚いのは、相模野台地では六会中学校で 20m、丘陵では御所見消防署で 30m 堆積している（藤沢市教育文化センター 1987）。富士山と箱根火山はしばしば同時に噴火することがあり、富士山の赤茶色の火山灰の中に箱根火山の白色軽石層が混ざることがある。

東京軽石（東京パミス）（写真 11・26）

南鍛冶山遺跡（石川）で見られた 7 万年前に起きた箱根火山の大噴火で飛んで来た東京軽石層と火砕流として流れて来た東京軽石流は層面すべりやパミスダイクの項目で記載した（写真 11）。特に火砕流は藤沢市を超えて横浜市西部まで達しているの、藤沢の動植物は全滅していた可能性がある。

江ノ島の山二つの東斜面に東京軽石（上）と三浦軽石（下）が見られる（写真 26）。

延暦・貞観スコリア（写真 27）

富士山は 800～802 年の延暦噴火と 864 年の貞観噴火の 2 回の大噴火をしている。この噴火ではスコリアと呼ばれる溶岩の粒が藤沢にも飛んできて、9 世紀の平安時代初期の遺跡に堆積している。

藤沢市 No.451 遺跡は遠藤菖蒲沢境の相模野台地にあるが、遺跡の溝状遺構から延暦・貞観スコリアが直接堆積した状態で見つかった（写真 27）。1cm 以上の大きさのスコリアもあって、かなりの被害があったと想像できる。

河村城スコリア（写真 28・29・30）

1590 年に豊臣秀吉が小田原北条氏を攻め、山北町の河村城を廃城にして堀を埋めさせた直後に降下した富士山のテフラがある。これが河村城スコリアである（上杉・砂田 2008）。河村城スコリアは大規模な噴火のテフラではないが、特徴のあるテフラが含まれているので識別しやすいメリットがある。神奈川県内各地で見ついているが、藤沢市では 5ヶ所の遺跡で河村城スコリアが確認されている（上本ほか 2016）。

鶴沼横須賀遺跡は鶴沼砂丘に立地する遺跡であるが、16 世紀代のかわらけを伴う砂丘の堆積層中に厚さ 3cm の白色軽石層が確認された（玉川文化財研究所 2005）。発掘当時は河村城スコリア発見以前だったので伊豆系のテフラと考えたが、保存していた試料を再検査した結果河村城スコリアの純層と判明した（写真 28; 上本ほか 2016）。16 世紀代のかわらけを伴う点からも時代が一致する。

大庭城跡 戦国時代の山城であった大庭城跡の横堀を埋めていた土の中から河村城スコリアが見つかった（写真 29・30）。これによって河村城スコリアが降下した 1590 年直後にはこの堀はすでに自然の営力でほぼ埋まっていたことがわかった。

宝永スコリア（写真 31・32）

1707年の富士宝永噴火は江戸にまで火山灰が降る大災害であった。

日大藤沢校舎内の遺跡の凹地で40cm（写真31）、片瀬の砂丘遺跡で約9cm積もっている（写真32）。耕作の邪魔になったと思われ、集めて廃棄されている。

## 引用文献

- 上本進二（1996）藤沢市本入こざつ原遺跡のテフラ層序．本入こざつ原遺跡，かながわ考古学財団調査報告13，167p.
- 上本進二（1997）藤沢市藤原北（No.438）遺跡の地形と土層．藤沢市文化財調査報告書第32集，p276-280.
- 上本進二（1998）小塚遺跡の地震の痕跡とテフラ分析．藤沢市文化財調査報告書第33集，p66-68.
- 上本進二（2005）西富貝塚（藤沢市No.46遺跡）の地震跡．西富貝塚－藤沢市西富字光徳422番1における住宅建設にともなう発掘調査－，p19-22，西湘文化財研究所，33p.
- 上本進二（2008）「遺跡周辺の地形発達」．『藤沢市川名新林右横穴墓群発掘調査報告書』，p17-23，藤沢市公園みどり課・湘南考古学研究所，126p.
- 上本進二（2002）藤沢市用田バイパス関連遺跡群の地形・地質環境．用田鳥居前遺跡，p581-586，かながわ考古学財団調査報告書128，財団法人かながわ考古学財団，636p.
- 上本進二（2005）西富貝塚（藤沢市No.46遺跡）の地震跡．西富貝塚－藤沢市西富字光徳422番1における住宅建設にともなう発掘調査－，p19-22，西湘文化財研究所，33p.
- 上本進二（2010a）藤沢市No.202遺跡の地震跡．神奈川県藤沢市遠藤打越・遠藤西谷遺跡，p75-82，有明文化財研究所，88p.
- 上本進二（2010b）藤沢市No.78遺跡（藤沢宿）のテフラ分析と礫層・砂層の粒度分析．東海道藤沢宿藤沢市No.78遺跡第4地点発掘調査報告書，p190-196，株式会社博通，201p.
- 上本進二（2012）藤沢市遠藤打越・遠藤西谷遺跡（No.202）遺跡の地震跡．神奈川県藤沢市遠藤西谷遺跡Ⅱ，p67-71，有明文化財研究所，80p.
- 上本進二（2021）神奈川県の遺跡から見つかった地変の痕跡．関東の四紀，37，p3-38，関東第四紀研究会．
- 上本進二（2025）藤沢市片瀬宮畑遺跡第3次調査の堆積物分析．神奈川県藤沢市片瀬宮畑遺跡第3次調査発掘調査報告書，p27-33，株式会社博通，36p.
- 上本進二・上杉陽・由井将雄・米澤宏・桜井準也・小沢かおる（1993）遺跡とその周辺的环境と歴史．慶応義塾湘南藤沢キャンパス内遺跡第1巻，p205-283.
- 上本進二・上杉陽・桜井準也（1994）南鍛冶山遺跡のテフラ層とパミスダイク．南鍛冶山遺跡発掘調査報告書第1巻縄文時代草創期，p218-227，藤沢市教育委員会．
- 上本進二・浅野哲哉（1998）藤沢低地の地形発達と遺跡形成．『若尾山遺跡』，p373-388.
- 上本進二・土屋浩美（1998）若尾山遺跡の噴砂．若尾山（藤沢市No.36）遺跡考察・写真図版編，p367-372，藤沢市立大道小学校内遺跡埋蔵文化財発掘調査団・東国歴史考古学研究所．
- 上本進二・上杉陽（1999a）藤沢市二伝寺砦遺跡の地形・地質と地震の痕跡．二伝寺（藤沢市No.215）遺跡，p80-87，藤沢市No.215遺跡発掘調査団・東国歴史考古学研究所．
- 上本進二・上杉陽（1999b）相模湾岸の遺跡から検出された地震の痕跡．第四紀研究，38，p533-542.
- 上本進二・上杉陽・ト部厚志（2016）南関東各遺跡の富士－河村城スコリアFj-Kw対比候補－1590年直後に富士山から噴出した新発見のテフラ－関東の四紀，35，p27-45.
- 上杉陽（2003）『地学見学案内書「富士山」』．p117，79-81，日本地質学会関東支部．
- 上杉陽・伊藤谷生・歌田実・染野誠・澤田臣啓（1985）大磯丘陵西部雑色～古怒田間に露出した衝上断層．関東の四紀，11，p3-16.
- 上杉陽・砂田佳弘（2008）Fj-Kw（仮称）の発見について．神奈川県山北町文化財調査報告2河村城跡，第6章自然科学分析，p22-28，山北町教育委員会，62p.

- 桜井準也・松山敬一郎・鈴木啓介・中川真人（2001）藤沢市No.211遺跡．－旧石器時代の石器  
石材採集・選別地－．第25回神奈川県遺跡調査研究発表会発表要旨，p19-24．
- 寒川 旭（1992）地震考古学－遺跡が語る地震の歴史．中公新書，251p．
- 玉川文化財研究所（2005）鵠沼横須賀遺跡発掘調査報告書，22p．
- 根本志保（1998）藤沢市No.437遺跡．湘南考古学同好会々報，70，p20-23．
- 林原利明（2004）チンガ塚古墳発掘調査報告書．藤沢市文化財調査報告第39集，藤沢市教育委  
員会．
- 藤沢市教育文化センター（1987）藤沢の地下をさぐる－ボーリング柱状図集－．147p．
- 藤沢市教育文化センター（2002）ふじさわの大地－人々の暮らしと自然－．160p．
- 藤沢市教育文化センター（2004）みどりの江の島．159p．



写真1 菖蒲沢大谷遺跡(遠藤)の地割れ



写真2 二伝寺砦遺跡 住居跡を裂く開口地割れ



写真3 用田バイパス関連遺跡群の亀裂

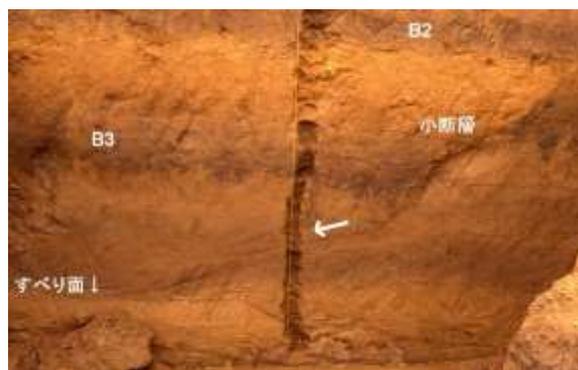


写真4 慶応 SFC 遺跡の地すべり断面



写真5 慶応 SFC 遺跡の住居跡を切る小断層



写真6 遠藤打越・西谷遺跡の地溝状凹地



写真7 菖蒲沢大谷遺跡(遠藤)の地溝状凹地



写真8 慶応 SFC 遺跡の小断層と傾いた地層

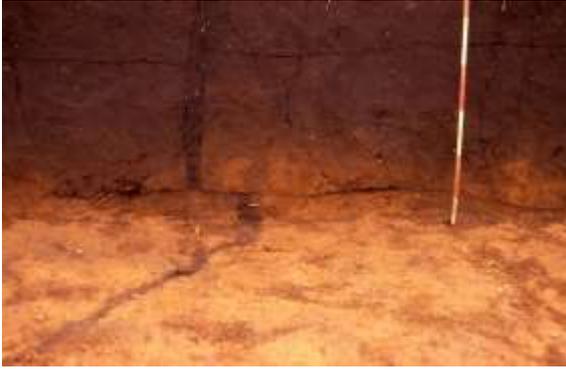


写真9 慶応 SFC 遺跡の地割れを切る層面すべり



写真10 南鍛冶山遺跡の東京軽石層の層面すべり



写真11 南鍛冶山遺跡の東京軽石層の液状化



写真12 同東京軽石層の液状化の痕跡



写真13  
慶応 SFC 遺跡の  
パミスダイク



写真14 小塚遺跡(渡内)の地すべり跡



写真15 西富貝塚の小断層と地割れ群



写真16 チンガ塚古墳の開口地割れ



写真 17  
下沢遺跡(本鶴沼)  
の噴砂



写真 18 川名原・市場遺跡(川名)の噴砂



写真 19 若尾山遺跡(朝日町)の噴砂

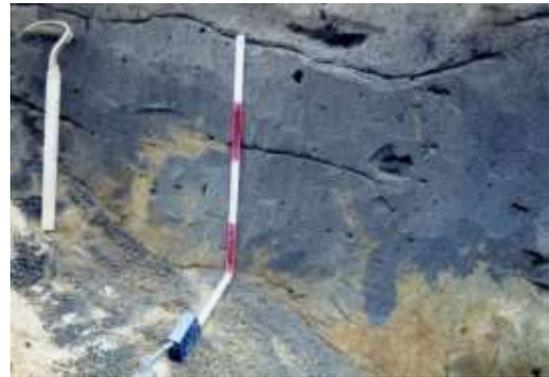


写真 20 藤原北遺跡の噴砂(左)と荷重痕(右)



写真 21 若尾山遺跡(朝日町)の荷重痕



写真 22 片瀬宮畑遺跡の津波堆積層中の軽石



写真 23 片瀬宮畑遺跡の津波で運ばれた軽石



江ノ島ヒガシ通り  
元禄地震段丘  
公園と道路至  
大正地震段丘

写真 24 江ノ島ヒガシ通りの元禄段丘と大正段丘



写真 25 江ノ島南岸の大正段丘



写真 26 江ノ島山二つの東京軽石と三浦軽石



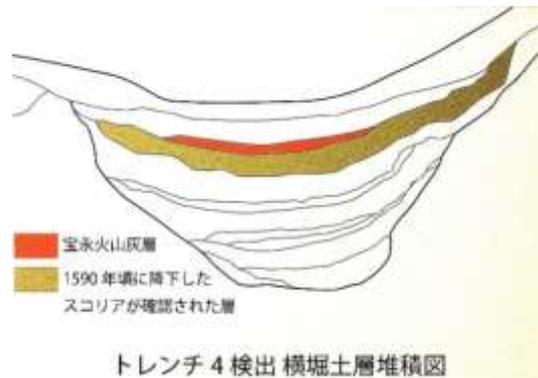
写真 27 遠藤菖蒲沢の延暦・貞観スコリア  
スケールの目盛りは1mm



写真 28 鶴沼横須賀遺跡の河村城スコリア  
1mm メッシュ



写真 29 大庭城跡 横堀覆土の河村城スコリア



トレンチ 4 検出 横堀土層堆積図  
写真 30 写真 29 の土層断面図



写真 31 日大藤沢校舎内の凹地の宝永スコリア



写真 32 片瀬砂丘の宝永スコリア(コインは2cm)

# 玉縄城と藤沢市の城館遺構

宇都 洋平

# 玉縄城と藤沢市の城館遺構

藤沢市郷土歴史課  
宇都洋平

## 1. はじめに

玉縄城は永正九年（1512）十月に伊勢盛時により築かれた城であるが、『石川忠総留書』には明応三年（1494）に山内上杉氏と扇谷上杉氏の「玉縄要害」をめぐる攻防があったことが記されている。この玉縄要害と玉縄城の関係については不明な点が多いが、玉縄要害を伊勢盛時が改修し、玉縄城が完成した可能性が考えられる。この玉縄城周辺には、鎌倉時代以来の幹線道である鎌倉街道をはじめ、相模国内や武蔵国へ通じる道が多数存在することから、交通の要衝であったことが伺える。武蔵国および三浦半島進出を目指していた伊勢盛時にとって玉縄城は、相模国東部における最重要拠点であったことは疑いようがない。

玉縄城築城前後の時期、伊勢盛時は扇谷上杉氏と対立しており、その重臣である三浦義同の岡崎城（平塚市）や住吉城（逗子市）を攻め、義同を本拠地の新井城（三浦市）に追い落としている（『北条記』・『北条五代記』）。玉縄は三浦氏と対峙し、かつ武蔵国に勢力を持つ扇谷上杉氏が相模国に侵入する際などの有事に備えるため、またこれらの地域に攻め入るための前線基地としての役割を果たしていたと考えられる。しかし永正十三年（『北条記』では永正十五年）に三浦氏を滅ぼし、大永四年（1524）に扇谷上杉氏の拠点である江戸城を攻め川越城に敗走させると、玉縄城は軍事施設としての位置づけと同時に、三崎城や江戸城と小田原城を結ぶ小田原北条氏の領国経営の一翼を担う最重要拠点へと変貌していく。このことは玉縄城が武蔵国神奈川湊や江戸湾を通行する廻船の支配を行う事と無関係ではなかろう。

なお天正十八年（1590）の羽柴秀吉による小田原攻めののち、徳川家康が関東に移封されるが、これ以降の玉縄城については不明な点が多い。一般的には家康の側近である本多正信が城主となったとされているが定かではない。『新編相模国風土記稿』には、徳川家康が関東移封の際、水野忠守に本城を預け、二の丸・三の丸には兵を置いたとし、本多正信が玉縄城を領したということは誤伝としている。『鎌倉市史 総説編』では、慶長年間末に本多正信が玉縄で2万2000石を領していたものの、玉縄城を居城としていたことについては疑義を呈している。なお『神奈川県史 通史編』においては『鎌倉市史 総説編』で述べられている2万2000石の所領についても根拠となる資料が確認されていないとして否定しており、領地を持たない「番城」であったと推定している。

## 2. 玉縄城の変遷

以上が、大まかな玉縄城の時代的な流れであるが、これらの時期を整理すると以下のような時期変遷を設定することができよう。

### ① 0期

15世紀後半から永正九年までの時期。上杉氏により玉縄要害が築かれ、その要害が伊勢盛時により陥とされ、玉縄城が築城される時期までを0期として設定した。文献で玉縄要害に関する記録は少なく、また発掘調査の成果においても、当該時期の明確な遺構は確認されていない。ただし、玉縄城の築城背景を考える上では重要な時期にあたり、今後この時期の研究が進むことで、玉縄城全体の研究が一層進むものと思われる。

### ② 1期：玉縄城が伊勢盛時の東進の前線基地として機能する時期

永正九年から享禄までの時期。伊勢盛時により扇谷上杉氏や三浦氏との抗争の際、前線基地として玉縄城が使用された時期までを1a期として設定した。伊勢盛時は永正九年八月に三浦

義同の守る岡崎城を攻略し、その勢いのまま、扇谷上杉氏の重要拠点の一つであった大庭城（大庭要害）を攻め落としている。玉縄城は大庭城の落城の後に築城が開始されたものと思われるが、玉縄一帯がすぐに伊勢氏の安定的支配に入ったわけではなく、翌永正十年正月には清浄光寺（遊行寺）周辺で伊勢方と扇谷上杉方の合戦があり、清浄光寺が焼亡している。

当初は東相模の前線基地としての役割を担っていた玉縄城だが、こののち永正十三年（『北条記』では永正十五年）に三浦氏を滅ぼし、大永四年（1524）に扇谷上杉氏の拠点である江戸城を攻め、川越城に敗走させると、前線基地という役割から小田原北条氏の領国支配の拠点という役割が大きくなる。玉縄周辺で続いた断続的な合戦は、大永六年（1526）に起きた里見氏の鎌倉進攻をもって一つの区切りとすることができよう。

### ③ 2期：玉縄城が小田原北条氏の領国経営を担う拠点として機能する時期

享祿から天正十八年（1590）までの時期。扇谷上杉氏や三浦氏に対する前線の軍事施設という役割から、三崎城や江戸城と小田原城を結ぶ小田原北条氏の領国経営の一翼を担う最重要拠点へと変貌していく時期である。玉縄城が武蔵国神奈川湊や江戸湾を通行する廻船の支配を行っている点や、北条綱成から氏舜までの玉縄北条氏が、白河結城氏（白川氏）との折衝を行っているのも、このことと無関係ではあるまい。

なおこの時期に玉縄城は2度合戦の舞台となっている。1度目は永祿四年（1561）に上杉景虎が関東に進攻した時である。この軍事行動の際、玉縄城も攻撃を受けているが、北条康成は籠城し上杉勢の攻撃を防いでいる（『鎌倉九代後記』）。その8年後の永祿十二年（1569）には武田信玄が小田原攻めをおこなっているが、この際玉縄城は戦場とならず、南西約2.5 kmに位置する御幣山砦が武田勢により陥落している（『新編相模国風土記稿』）。

2度目の合戦は羽柴秀吉による北条攻めの際である。羽柴勢が出陣を始める前年の天正十七年（1589）に北条氏直は家臣や他国衆に対して小田原入城や各主要の城郭への配置を行っており、玉縄城主であった北条氏勝は山中城（静岡県三島市）への配置を命じられている。しかし山中城は天正十八年三月二十九日に羽柴勢の攻撃により半日で落城し、北条氏勝は玉縄城へ戻り籠城したが、四月二十日に玉縄城を徳川・浅野勢の説得を受け開城している（『関八州古戦録』・『相中留恩記略』）。この後氏勝は下総方面平定の案内役を務め、下総国岩富に一万石で封じられている。

### ④ 3期：徳川家康の関東入封から廃城まで

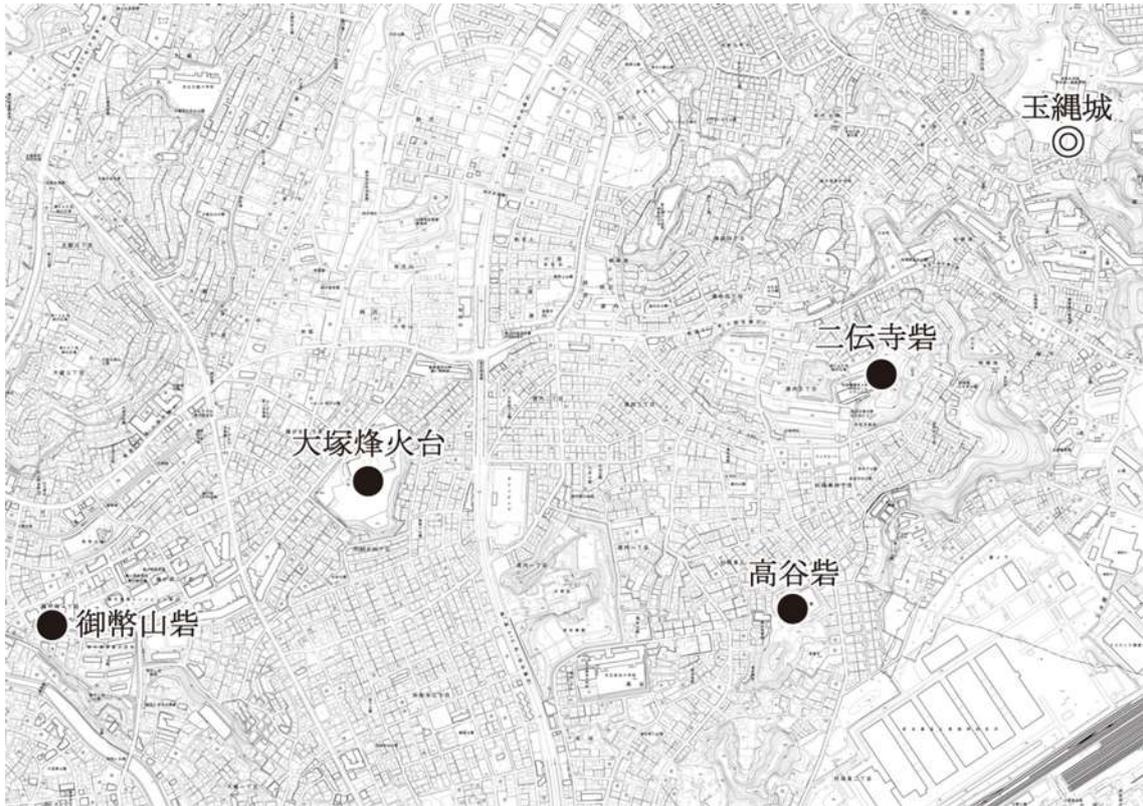
先述したとおり、玉縄城の廃城時期については確かな記録がないために不明である。ただし、元和五年（1619）に松平正綱が玉縄を領した際、城跡の南麓に陣屋を築いたとされていることから、少なくとも慶長二十年（元和元年・1615）に出された一国一城令の際には廃城になっていたものと思われる。

玉縄城跡相模陣 370番地点の発掘調査では16～18世紀の年代が考えられる道路跡、池跡、建物跡などが検出されている。未報告なので詳細は不明だが、この地点で確認された池跡や建物跡は陣屋と関連する施設である可能性が考えられる。

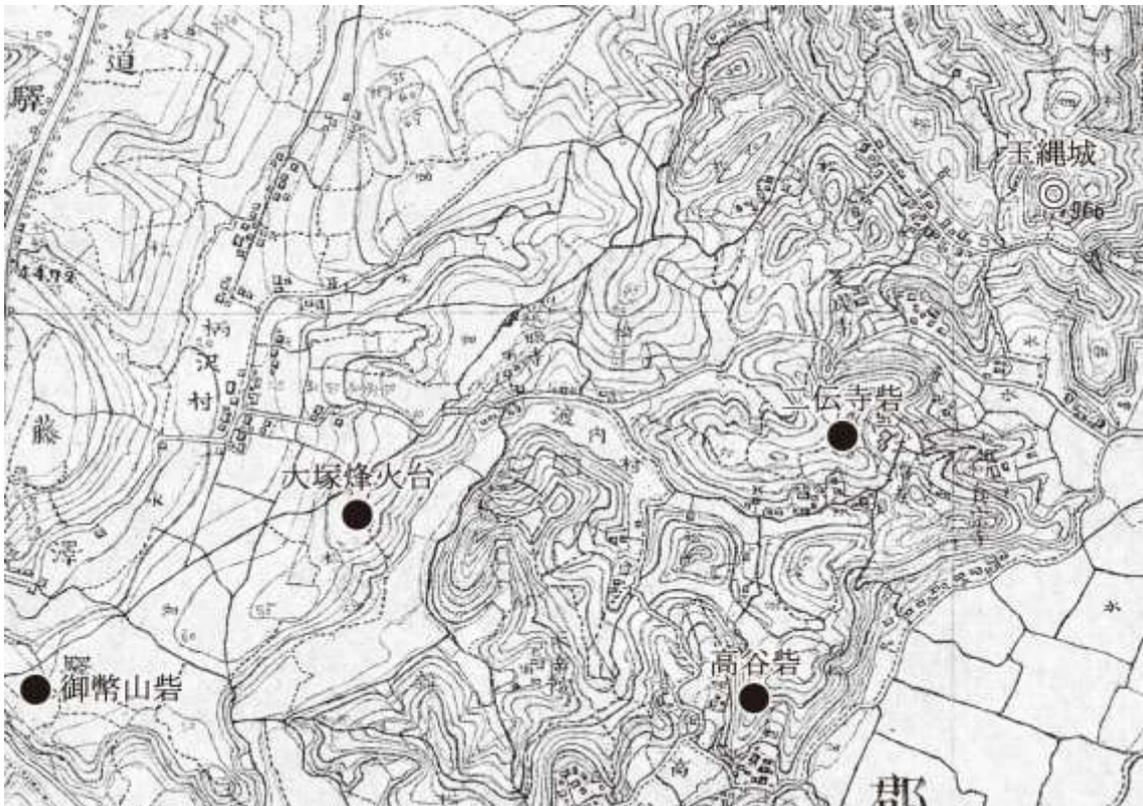
## 3. 藤沢市内の中世城館

玉縄城は複雑にめぐる尾根筋が集合する標高の高い城郭の東側に位置する「中心部」と、中心部より標高が低いものの複雑に入り組んだ自然地形を活かした西側の「外郭部」に大別されている（大河内勉ほか1994）。また玉縄本城と相模陣一帯を城の中心とし、玉縄城の周辺に所在している長尾台砦・岡本砦・龍寶寺砦・高谷砦・二伝寺砦・清水曲輪を玉縄城の総構えとした考えも近年玉林氏により提唱されている（玉林2017）。

これらの内、高谷砦・二伝寺砦・清水曲輪の一部が、現在行政区分上藤沢市となっている。また藤沢市内には室町～戦国期に築かれたと伝わる城館が存在していた。ここでは発掘調査の成果を含め、これらの城郭についてまとめてみたい。



第 1 図 玉縄城および藤沢市内の城館位置図 [S=1/15000]



第 2 図 明治の迅速測図からみた城郭の位置と旧地形 [S=1/15000]

### ① 二伝寺砦

二伝寺砦は藤沢市の渡内に所在していた砦である。玉縄城の南西に位置し、赤星直忠氏は玉縄城南西防衛上の要地と評価している（『鎌倉市史』）。この砦の名称ともなった二伝寺は寺伝によると、永正二年（1505）に初代玉縄城主である氏時（伊勢盛時の次男）によって創建されたとしているが、この永正二年段階で玉縄城は築城されておらず、二伝寺の創建時期については慎重に考える必要がある。ちなみにこの寺の前には二伝寺坂と呼ばれる坂があり、この坂を下れば玉縄城に至り、また西に進むと小田原方面に向かうこともできる。この道はいわば玉縄城の南西側の玄関口にあたり、二伝寺砦はこの要所を抑えるため築かれた防御施設なのであろう。

『鎌倉市史』によれば、二伝寺砦には堀切や土塁等が存在せず、平場を造成し、相模陣側を大手とする構造であり、高谷砦と連動して南方からの攻撃にも備えることができた砦としている。現在二伝寺砦周辺は昭和40年代から始まった村岡地区の区画整理やその後の宅地造成により、旧地形が存在している場所は二伝寺周辺のみである。

なおこの二伝寺から南西約200mの場所に、江戸時代峯渡内村の名主であった福原氏の屋敷が存在した。福原氏は大永六年（1526）の戸部川での合戦の際、大船の甘糟氏とともに氏時を助けて、里見氏と戦っている。また天保十年（1839）に福原高峯によって編纂された『相中留恩記略』は現在でも地域の歴史を知るうえで貴重な資料となっている。

現在二伝寺一帯は「二伝寺砦遺跡（藤沢市No.215遺跡）」として周知の埋蔵文化財包蔵地となっており、これまでに5回の発掘調査が行われている。ここでは、発掘調査で確認された戦国期の遺構を紹介したい。第1地点（第1次調査）は砦のほぼ中央部に位置しているが、この調査では16世紀後葉から末葉の年代が考えられる掘立柱建物跡2軒、溝状遺構2条、段切り状遺構2基が確認されている。この中で特に注目される遺構は1号掘立柱建物である。この遺構は丘陵の斜面を平らに造成された箇所（段切り状遺構）に建てられている。建物規模は南北4間×東西2間の総柱建物（床面積28.8㎡）であり、建物の方位は玉縄城の中心部分に向いている。ただし、正面には視界を遮るように丘陵があるため、直接玉縄城を望むことはできない。この建物の用途は不明であるが、立地から二伝寺砦の臨戦時における詰所のような用途の可能性を報告書では指摘している。

このほかに旧福原氏邸内の調査である第4地点の調査では、15世紀末から16世紀の年代が考えられる遺構面で6軒の掘立柱建物跡や溝状遺構、竪穴状遺構が確認されている。掘立柱建物跡は全体の様相が掴みづらいが、近世福原家の位置していた場所で戦国期の遺構群が存在していた点に注目したい。

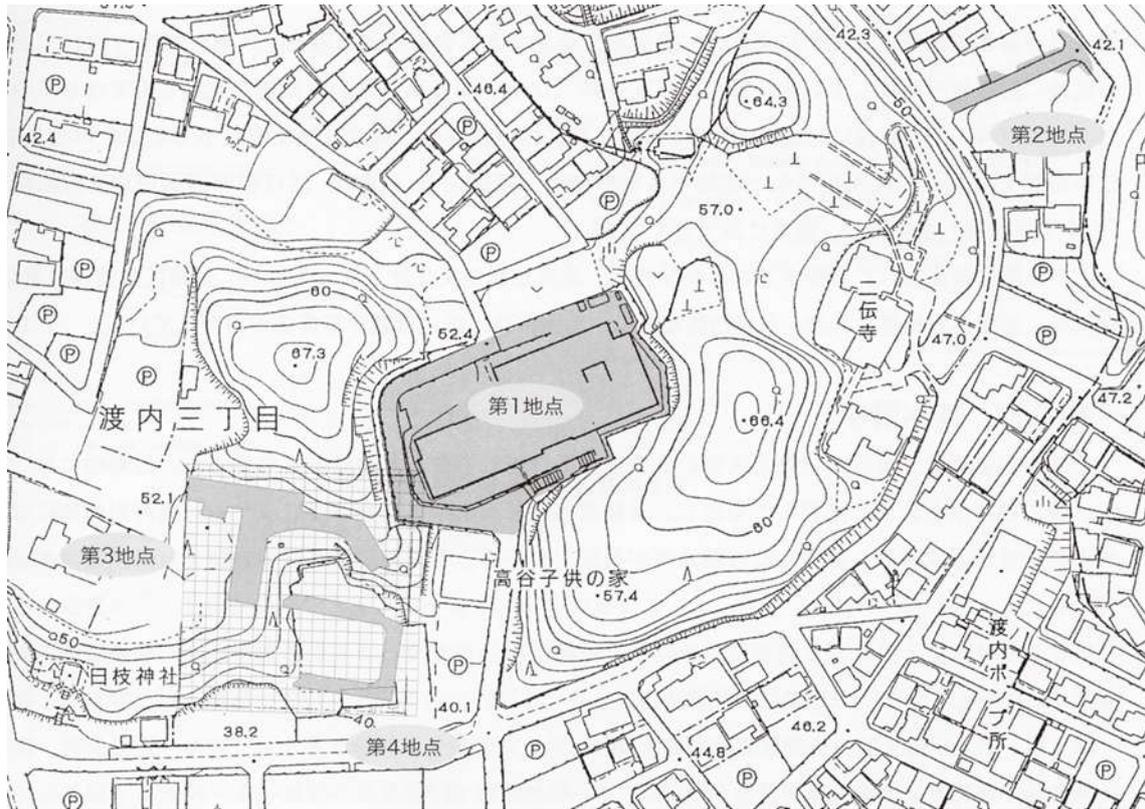
### ② 高谷砦

高谷砦は別名村岡城ともいい、藤沢市高谷に所在していた砦である。二伝寺砦の南約350mの場所に位置していたとされるが、昭和40年代の区画整理により砦跡周辺は削平されてしまい、現在では砦に関連する遺構群を確認することができない。『鎌倉市史』によれば、砦は「H」字形を呈し、砦の北東側「三日月の井」周辺に建物が存在していた可能性を指摘している。砦の南側に堀や土塁を重点的に配置していたことから、赤星直忠氏は南側の守備を意識した構築された砦だと推定している。

### ③ 大塚烽火台

『新編相模国風土記稿』の柄沢村の項に「大塚 東南の山上松林中にあり、径五間高九尺許、北條氏分国の頃玉縄城より小田原城へ急を告る時、號火を放つ為に築し所と伝ふ」とあり、これが大塚烽火台と考えられている。大塚の地名は現在の藤が岡3丁目付近に「大塚山」や「大塚下」の地名が残ることから、『日本城郭体系』では現在の藤が岡中学校付近に烽火台が存在していた可能性を指摘している。

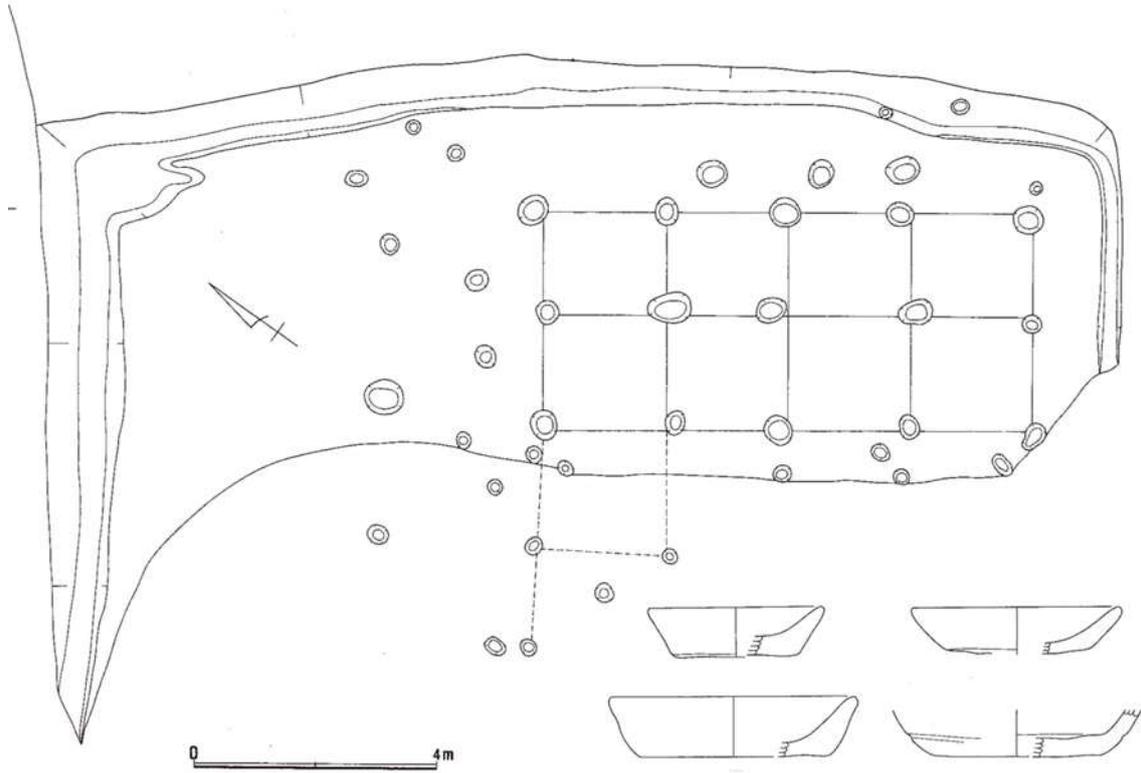
この一帯は、昭和30年代の区画整理により、消滅してしまっていることから、『鎌倉市史』にもその記述はない。この烽火台は玉縄城からの距離は約1.6kmあり、二伝寺砦跡からの距離は約1kmである。また後述する御幣山砦は烽火台から約700mの距離にあることから、玉縄城



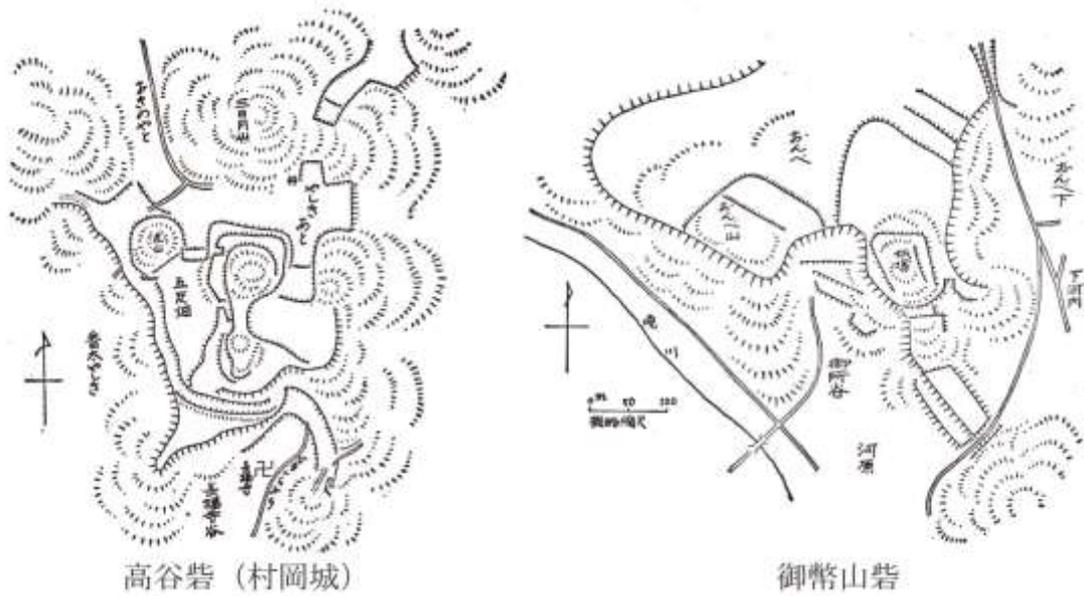
第3図 二伝寺砦遺跡調査地点位置図（小池ほか 2007 より転載）



第4図 第1地点遺構配置図（秋山ほか 1996 より転載）



第 6 図 第 1 地点検出掘立柱建物跡とかわらけ (秋山ほか 1996 を改変・転載)



第 7 図 赤星直忠氏による高谷砦・御幣山砦縄張り図 (『鎌倉市史』より転載)

からの狼煙による伝達を直接受けたのではなく、玉縄城→二伝寺砦→大塚烽火台→御幣山砦と丘陵が複雑に入り混じる地域で烽火を使い情報伝達を行ったと考えるのが理解しやすい。また御幣山砦以西から相模川東岸までの間で防御施設らしいものは現在確認されている城館は大庭城のみであることから、この間は烽火ではなく、砂丘上にはしる道を使い馬や徒歩などにより情報伝達を行った可能性が考えられる。

近世では砂丘上をはしる東西道として東海道が有名であるが、『快元僧都記』によれば天文四年（1535）九月に扇谷上杉朝興の軍勢が武蔵国から乱入し、小和田・賀崎（茅ヶ崎か）・鶴沼などを放火している。この記事からは室町期にはすでに砂丘上にある程度の軍勢が通ることのできる東西道が存在していたことがわかる。

#### ④御幣山砦（おんべ山砦）

御幣山砦は藤沢市藤が岡1丁目に所在した砦である。『新編相模国風土記稿』では「大谷帯刀左衛門公嘉城蹟」の名前で記載されている。この砦を守備していたとされる大谷公嘉だが、永禄十二年（1569）の武田信玄による小田原攻めの際は小田原本城に詰めており、御幣山砦は武田勢により陥落している。こののち天正十八年（1590）の羽柴秀吉による小田原攻めの際、大谷公嘉は上野国西牧城に籠城し戦死している。御幣山砦もまた羽柴方の軍勢により陥落しており、この後廃城したとされている。

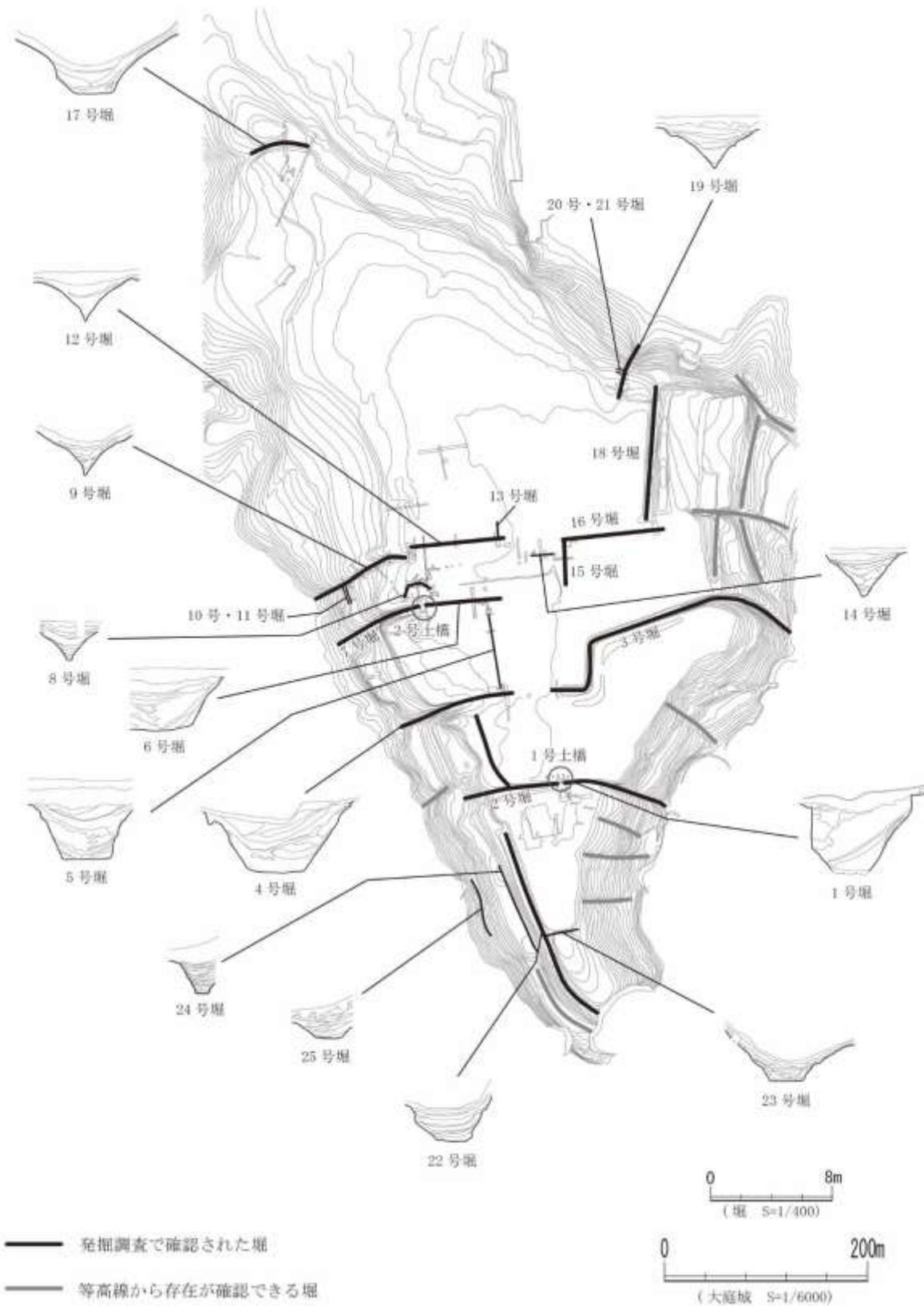
『鎌倉市史』には御幣山砦は丘陵部の西方の高い部分を城郭とし、南西方向を正面とした砦であるとしている。また御幣山砦の用途としては、西からの敵を防ぐ目的とともに、大鋸に集住していた工匠など職能民を守ることも目的の一つと推測している。この御幣山砦の防御施設は南斜面に築かれた平場であり、その南側に流れる境川を堀とした自然地形を生かした城郭であると解説している。

御幣山砦一帯は昭和30年代の区画整理により、現在は団地が建ち並んでおり、城郭に関連する遺構を目にすることはできない。ただし発掘調査ではわずかながら中世遺物が出土している。御幣山一帯は「御幣山遺跡（藤沢市No.48遺跡）」として周知の埋蔵文化財包蔵地になっており、これまでに9回の発掘調査が行われている。第4次調査とした藤が岡1丁目4番地点からは、かわらけをはじめ、常滑窯甕、瀬戸窯灰釉皿など16世紀代と考えられる遺物が出土している。また同地点を再度発掘調査した第7次調査では、御幣山砦とは直接的な関係性はないものの、調査区の北側から東西方向にはしる中世の堀切道が検出されている。また、この第4次調査・第7次調査ではに巨大な梁行2間×5～10間の長屋状の掘立柱建物が数棟検出されている。報告書では出土遺物から中世の遺構として扱っているものの、同時にこれだけの規模の建物群が中世に存在し得るのか疑問も呈している。

#### ⑤大庭城（大庭要害）

これまで紹介した二伝寺砦・高谷砦・大塚烽火台・御幣山砦は旧鎌倉郡内に所在した城館であるが、大庭城は旧高座郡である大庭字城山に所在した城館である。大庭城の名前の初見は『新編相模国風土記稿』の藤澤宿の項であり、「土人傳て大庭三郎景親の居城なり、後太田道灌暫時居城とし、北條の頃は其旛下某在城せりと傳う、【豆相記】及び【新編諸國城主記】等に拠れば「扇谷上杉氏の築城にして、修理大夫定正在城し、其子修理大夫朝良の時、永正九年北條早雲に攻落さる、是より持城となる、廃城となりし年代詳ならず」とある。この記事からは地元伝承では平安後期の武士である大庭景親の居館を室町期に太田道灌が改修したという由来を伝える一方、文献からは扇谷上杉氏により築かれた城館としていることがわかる。

なお玉隠英瑣の記した『玉隠和尚語録』明応八年（1499）の条には「一人（朝昌）大庭堅其、大庭氏館、此去不遠」とあり、当時大庭城を守備していた人物は扇谷上杉朝昌であり、大庭氏の館と大庭城が別の所にあることが記されている。この扇谷上杉朝昌は、父・持朝、兄・定正、子・朝良が相模守護であり、扇谷上杉の中でも有力な一門であったとされている。長享二年（1488）に朝昌は自身が守備する七沢要害を山内上杉氏により陥落させられて以降、大庭に拠っていることから、少なくとも長享二年から明応八年までの11年間は朝昌が城主であった可能性がある。また『浅羽本上杉系図』には朝昌の孫である朝興に「大庭又五郎」と注記があり、



第 8 図 大庭城の堀位置図（宇都ほか 2021 より転載）

朝興の父である朝寧が大庭城に在城していた可能性も指摘されている（藤沢市郷土歴史課 2019）。

永正九年（1512）、大庭城は伊勢盛時により落城しているが、そののち小田原北条氏によってどのように使用されたか具体的に知ることのできる資料はない。湯山学氏は玉縄城が小田原城の支城として機能するにしたがい使用されなくなったとし（湯山 1979）、伊藤正義氏は大庭城と玉縄城は当初相互を補完し合う関係ながら、玉縄城の城郭整備が充実した段階で、大庭城は廃城となったと推定している（伊藤 2011）。

大庭城の所在する字城山一帯は「大庭城跡（藤沢市No.211 遺跡）」として周知の埋蔵文化財包蔵地になっており、これまでに 25 回の発掘調査が行われているが、このうち奥田直栄氏が担当した 1968 年～1971 年の 5 回の調査で城館に関する遺構・遺物が確認されている。大庭城は堅堀や横堀により区画されているが、その内最も南に位置する曲輪から 4 棟の掘立柱建物群が検出されている。このうち 1 号掘立柱建物とした建物の規模は 2 間×6 間（側柱建物・四面庇付）、3 号掘立柱建物と 4 号掘立柱建物とした建物の規模は 2 間×5 間（側柱建物・四面庇付）であり、この場所が城主の居住空間であったことが確認されている。また 3 号掘立柱建物の柱穴からは炭化米や炭化材が出土しており、化学分析の結果、15 世紀中頃から 16 世紀初頭の年代が推定されている（宇都 2018）。

大庭城では中世の遺物がこの掘立柱建物群以外からも出土しているが、おおよそ 13 世紀代と 15 世紀中頃のものが中心となっており、小田原北条氏の支配していた 16 世紀初頭以降の遺物はこれまでに出土していない。ただし、これまでの発掘調査は部分的なものであり、今後の調査で 16 世紀代の遺構・遺物が確認される可能性は否定できない。

#### 4. 各城館の成立と廃絶時期

前章では、藤沢市内に所在した 5 つの城館の紹介をしたが、ここではそれらの城館がいつ頃成立し、また廃絶したのか考えてみたい。二伝寺砦は玉縄城の外郭に位置していることから、玉縄城の築城後比較的早い段階で築かれたと考えられる。二伝寺の南西約 200m には戸部川の合戦でも活躍した福原氏の屋敷があり、発掘調査の成果でも 15 世紀末から 16 世紀の掘立柱建物が確認されている。このことから 1 期の後半段階までには二伝寺砦は整備されたと推測される。また高谷砦は学術的な調査がされないまま消滅してしまったため、様相は不明である。ただし『鎌倉市史』が指摘するように二伝寺砦と一定の連携が考えられるのであれば、二伝寺砦と同時期もしくはやや遅れて築かれたと考えるのが自然と思われる。

大塚烽火台は『新編相模国風土記原稿』では玉縄城と小田原城の連携のために複雑な村岡丘陵内に所在する玉縄城および玉縄城以西の砦群と御幣山砦の連絡に使用されたと考えられる。後述する御幣山砦は天正十八年まで使用されていたことを考えれば、この烽火台は 1 期の段階に築かれ、2 期の終了とともに廃絶したものと考えられる。この大塚烽火台の西側約 700m に所在する御幣山砦は、砦の北側には鎌倉道と伝わる東西道がはしり、西側には近世東海道として整備される江戸方面に向かう道がはしる。また南側には片瀬方面に向かう片瀬道がはしっており、三方に幹線道がはしる交通の要衝に御幣山砦は築かれている。永正十年正月に大鋸あたりで扇谷上杉氏と小田原北条氏の軍事衝突があり、清浄光寺が焼亡しているが、この時に御幣山砦に関する記述はない。玉縄城が築かれた前後から大永年間頃まで北条氏による相模国東郡の支配は不安定であり、御幣山砦は玉縄城の西側における最前線の防衛拠点であると同時に交通の要衝を抑えるために欠かせない重要な拠点であったと考えられることから、その築城の時期は 1 期の早い段階には築かれていたと思われる。ただし、以上のような交通の要衝において伊勢盛時以前に誰も城郭を構えなかったということも疑問に残る。御幣山遺跡第 4 地点からはわずかではあるが、15 世紀後半の遺物も出土していることから、御幣山には御幣山砦に先立ち、扇谷上杉氏もしくは山内上杉氏により 0 期段階に防御施設が築かれていた可能性も考えられる。

大庭城は扇谷上杉氏により築かれたことが文献から確認されているため、0 期段階に存在し

ていたことは確実である。伊勢盛時により落城したのは、小田原北条氏に利用されたと思われるが、遅くとも2期の最終段階にあたる天正十八年段階ではすでに廃城していた可能性が高い。ただし伊藤氏と湯山氏の考察から考えると、大庭城は1期の段階でその役割を終えたことになる。これまでの発掘調査の成果では16世紀初頭以降と考えられる遺構・遺物は確認されていないが現時点での成果で永正九年に廃絶したと断じることは性急と考える。今後の調査により廃城年代を考えることができる資料が蓄積されることに期待したい。

## おわりに

以上、藤沢市内に所在した城館と玉縄城の関わりについて若干の考察を行った。藤沢市内に存在した城館の多くは昭和以降の造成により、現在は往事を偲ぶことができない。しかし、これまでの発掘調査の成果から断片的ではあるものの、玉縄城を取り巻く城館についての情報が徐々にではあるが蓄積され始めている。また玉縄城の初期段階の様相を知るためには大庭城の調査研究は欠かせないものとする。

城館以外にも玉縄城と密接な関係にある地域が藤沢には存在する。近世に藤沢宿となった地域であるが、この一帯には大鋸・大久保・坂戸の三町が存在し、特に大鋸は玉縄北条氏と密接な関係を持っていたことが残された文書から知られている。今後はこのような経済圏を含めた多角的検討により、より藤沢の戦国時代が明らかになっていくものとする。

※本稿は玉縄城址まちづくり会議が主催した平成30年6月21日開催の「第二回セミナー 玉縄地域の発掘調査報告と埋蔵文化財」に一部掲載されたものを全文掲載し、加筆修正したものである。

### 【引用・参考文献】

- 秋山重美ほか 1996『神奈川県藤沢市 二伝寺砦遺跡発掘調査報告書』  
二伝寺砦遺跡発掘調査団
- 伊藤正義 2011「玉縄城」『関東の名城を歩く 南関東編』吉川弘文館
- 宇都洋平 2015「玉縄城」『北条氏康の子供たち』宮帯出版社
- 宇都洋平 2018『神奈川県藤沢市 大庭城跡－1968年～1971年の城郭に関連する発掘調査の記録－』藤沢市教育委員会
- 宇都洋平ほか 2021『神奈川県藤沢市 大庭城跡Ⅱ－第24次・第25次発掘調査報告書－』  
藤沢市教育委員会
- 奥田直栄 1968『第一次大庭城址発掘調査概報』藤沢市西部開発事務局
- 奥田直栄 1968『第二次大庭城址発掘調査概報』藤沢市西部開発事務局
- 香川達郎ほか 2019『神奈川県藤沢市 大庭城跡 第23次調査発掘調査報告書』  
玉川文化財研究所
- 黒田基樹 2004『扇谷上杉氏と太田道灌』岩波書院
- 小池 聡ほか 2007『神奈川県藤沢市 二伝寺砦遺跡第3地点・第4地点』盤古堂
- 玉林美男 2017「玉縄城の総構えを考える」『玉縄城址遺構群学術調査報告書 鎌倉・玉縄城の総構え』玉縄城址まちづくり会議
- 降矢順子ほか 2008『神奈川県藤沢市 御幣山遺跡第7地点発掘調査報告書』鎌倉遺跡調査会
- 宮井 香ほか 2006『御幣山遺跡』かながわ考古学財団
- 湯山 学 1979『藤沢の武士と城－扇谷上杉氏と大庭城－』名著出版
- 鎌倉市 1967『鎌倉市史 考古編』吉川弘文館
- 鎌倉市 1967『鎌倉市史 総説編』吉川弘文館
- 茅ヶ崎市 1981『茅ヶ崎市史 4 通史編』
- 藤沢市 1972『藤沢市史 第四巻 通史編』
- 藤沢市郷土歴史課 2019「〈開催報告〉平成30年度大庭城関連イベントについて」『藤沢市文化財調査報告書 第54集』藤沢市教育委員会

【開催報告】

シンポジウム『下土棚諏訪ノ棚遺跡と氷期の藤沢』

郷土歴史課

# 【開催報告】シンポジウム『下土棚諏訪ノ棚遺跡と氷期の藤沢』

郷土歴史課

## 1. はじめに

本稿は、令和8年2月14日（土曜日）に開催した、シンポジウム『下土棚諏訪ノ棚遺跡と氷期の藤沢』の開催結果を報告するものである。現在、北部区画整理事業に伴い発掘調査が行われている下土棚諏訪ノ棚遺跡では、旧石器時代の遺物が豊富に出土している。特に第8次調査で出土した「船野型＋荒川台型」細石刃石器群と、第9次調査で出土した砂川期のナイフ形石器群は、特筆すべき資料である。今回のシンポジウムは、下土棚諏訪ノ棚遺跡の調査成果を起点に、藤沢市の旧石器時代について、市民をはじめとする人々に周知することを目的として開催した。

## 2. 当日の経過

本シンポジウムは、Fプレイスのホール（定員300名）で開催した。当日は天候にも恵まれ、市民を中心に多くの方々にご来場いただいた。今回のシンポジウムのテーマは、「旧石器時代」という一般に認知度の低いものであったため、100名程度の来場を見込んでいた。しかし、実際には163名と、実に想定の1.5倍を上回る集客があり、市民の歴史への関心の高さが窺えるものであった。

以下は当日のスケジュールである。藤沢市の学芸員を含めた4名により、旧石器時代についての講演を行ったのち、登壇した4名によるパネルディスカッションを実施した。また、ホール入り口（ホワイエ）にて、藤沢市内で出土した旧石器時代の遺物（石器）の展示を行った。講演で取り上げた遺物を中心に、下土棚諏訪ノ棚遺跡・大庭根下遺跡・石川稲荷山遺跡の出土遺物合計103点を、解説パネルを交えて展示した。



会場の様子

〈13時開会（12時30分開場）〉

開会あいさつ 鈴木恒夫（藤沢市長）

講演①「氷期の藤沢について」

桐原弘亘（藤沢市生涯学習部郷土歴史課）

講演②「相模野旧石器研究の展望」

諏訪間順（明治大学黒耀石研究センター）

（休憩）

講演③「下土棚諏訪ノ棚遺跡の調査」

麻生順司（株式会社玉川文化財研究所）

講演④「藤沢で確認された砂川期の石器群について」

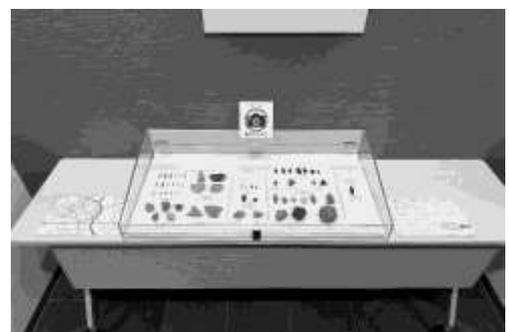
高屋敷飛鳥（神奈川県教育委員会）

（休憩）

パネルディスカッション・質疑応答

閉会あいさつ 井出祥子（藤沢市生涯学習部長）

〈16時35分閉会〉



展示の様子

### 3. 講演の概要

本シンポジウムでは、4人の講師による講演を行った。概論、総論的な部分から入り、実際の調査成果や、それらの調査成果から行われている研究成果へと、徐々に掘り下げていくという構成をとった。以下にその概要を記すほか、文末に当日配布した予稿集を掲載する。

#### ①「氷期の藤沢について」桐原弘亙（藤沢市生涯学習部 郷土歴史課）

本講演は、本シンポジウムのテーマである旧石器時代と、藤沢市内の遺跡について、旧石器時代のことを全く知らない方でも、続く3つの講演を少しでもよく理解できるように、基本的な内容を当市学芸員の桐原から発表した。旧石器時代の年代観や当時の気候、生活形態、見つかる道具（石器）などについて簡潔にまとめた。また遺跡については、市内最古の石器や石斧などが出土した大庭根下遺跡や、綾瀬市の吉岡遺跡群との遺跡間接接合で有名な用田鳥居前遺跡などを中心に取り上げた。



桐原弘亙

#### ②「相模野旧石器研究の展望」諏訪間順（明治大学黒耀石研究センター）

本講演は、藤沢市がその南端に位置する相模野台地における旧石器研究について、相模野台地の石器編年研究の第一人者である諏訪間氏からご発表いただいた。関東地方が世界的にも旧石器時代の調査成果が豊富な地域であること、その中でも相模野台地は分厚くかつ分解能の高いローム層から編年研究に非常に適したフィールドであることや、実際にどのような石器の変遷が見られるのか、また時期による石材利用の変化など、多角的な視点から相模野台地における旧石器時代研究の状況をお話しいただいた。



諏訪間順氏

#### ③「下土棚諏訪ノ棚遺跡の調査」麻生順司（株式会社玉川文化財研究所）

本講演は、本シンポジウムのタイトルでもある下土棚諏訪ノ棚遺跡について、これまでの調査成果を、実際に発掘調査を担当されてきた株式会社玉川文化財研究所の麻生氏からご発表いただいた。主に、令和6年度に調査が行われ、報告書が未刊行である第9次調査の出土遺物について、文化層ごとの器種構成や使用石材の変化を、写真や実測図を交えながらお話しいただいた。また、通常ではあまり見ることのできない発掘調査区の様子を、ドローンによる空撮映像を用いてお見せいただいた。



麻生順司氏

#### ④「藤沢で確認された砂川期の石器群について」高屋敷飛鳥（神奈川県教育委員会）

本講演は、下土棚諏訪ノ棚遺跡第9次調査でも豊富に出土した砂川期と呼ばれる時期の石器群について、当該期を専門に研究されている神奈川県教育委員会の高屋敷氏からご発表いただいた。砂川期の概要と、藤沢市内の砂川期の遺跡の様相や、相模野台地の様相を概観したのち、遺跡の分布や、出土する遺物の内容から、当時の集団の行動パターンや移動ルートを推定し、最終氷期最盛期という非常に厳しい環境下での人類の戦略的な行動をお話しいただいた。



高屋敷飛鳥氏

#### 4. パネルディスカッション

パネルディスカッションは、登壇者4名をパネリストとして行った。今回のシンポジウムでは、旧石器時代という、あまり馴染みのないテーマを扱ったため、単に講演を聞いただけでは、来場者に多くの疑問を残すことになると考えた。そこで、通常のように講演内容を深掘りするのではなく、当日に、来場者から登壇者への質問を募集し、その中から抜粋して回答する形式をとった。

その結果、25人から計37件の質問があり、そのうち11件の質問を取り上げ回答した。質問は核心を突くものが多く、また、会場には旧石器時代の有識者も多く来場しており、その方々も巻き込んだ活発かつ有意義な質疑応答の時間となった。以下はその要旨である。なお、有識者にご回答いただいた質問については、本稿に掲載する旨を事前に伝えていなかったため、割愛する。



パネルディスカッションの様子①

**桐原（以下、桐）:** 皆様からたくさんのご質問をいただき、感謝いたします。時間の都合上、いくつか抜粋して、お答えしていきます。

「旧石器時代の遺跡はどうして遺されるのか？移動しながら生活をしているのに、どうして石器が置いて行かれるのか？」という質問です。高屋敷さんいかがでしょうか。

**高屋敷（以下、高）:** 基本的に、私たちも生活している上で、様々なゴミや要らないものなどが出てくると思います。また、ものをそのまま忘れて残していってしまう、忘れ物で置いて行ってしまうということもあると思います。旧石器時代の人たちも、有機物は日本列島では酸性土壌で溶けて遺らないのでわからないんですが、基本的に石器を遺しています。石器というのは、一度割ると元には戻せない、不可逆性のものですので、割ってしまうと石器のくずがたくさん出るんですね。そういったくずとかを、要らないので置いて行ってしまうので、残るのかなと思います。ただ、その石器が、打ち割ったままの場所にある場合もあると思うんですが、そのほかにも、家をきれいにしたいということで掃除をしたりとか、または要らないものをゴミ捨て場に運んでまとめて捨てたりとか、そういったこともあると思います。なので、遺跡によっていくつかのパターンがあると思います。

**桐:** 次の質問です。旧石器時代の狩りの方法について、「落とし穴のようなものは見つかっていないのでしょうか？」。麻生さん、いかがでしょうか。

**麻生（以下、麻）:** 落とし穴は静岡の愛鷹山麓で数多く見つかっています。年代でいうとちょうどAT（始良丹沢火山灰：約30,000年前に降下した広域火山灰）直前くらいの時期で、列をなして見つかっています。もう一か所、三浦半島で船久保遺跡という遺跡を私は調査していて、静岡で見つかったのは全部円形の落とし穴だけだったんですが、船久保遺跡では円形の落とし穴が列をなして3列見つかったほかに、時期を1,500年くらいずらして長方形の落とし穴が見つかっています。その長方形の落とし穴は谷筋を添うように13基見つかっています。四角い形の落とし穴が見つかっているのは船久保遺跡だけです。年代については先ほども話したATが長方形の覆土には入っていて（約30,000年前）、一方で円形のほうには下層から炭化物が出てきて年代測定の結果約31,500年前ということがわかったので、その二時期にわたって三浦半島では落とし穴が使われていました。しかも、長方形のほうは下のほうが細くなっていてイノシシとかだと落ちて逃げられてしまうのですが、シカのように足が長い動物だと一本の足が入ってしまうともう動けない、そういう作りをしているんですね。愛鷹山麓と三浦半島でしか見つからないので地域性はありますが、3万年前という非常に古い段階で、旧石器時代の人はそのようなものを獲る（一定の動物を対象とした）落とし穴というものも使いながら狩猟をしていたということがわかってきています。

桐：続いての質問です。「今回発見できた遺跡（下土棚諏訪ノ棚遺跡）は、偶然発見できたんでしょうか？」。こちらは私からお答えします。

今回の下土棚諏訪ノ棚遺跡の周辺は、麻生さんのお話にもありました通り、北部区画整理事業をしている場所です。もともと「周知の埋蔵文化財包蔵地」として登録をされている場所でした。包蔵地内で工事をする際には、事前に、遺跡に影響がないかどうかを調べる試掘調査をします。その試掘調査を下土棚諏訪ノ棚遺跡でも行った結果、旧石器時代の遺物が見つかったので、発掘調査をした、という経緯です。

桐：続いての質問です。「黒曜石の入手方法について、徒歩で移動していたのか、あるいはほかの移動方法があったんでしょうか？」。諏訪間さん、お願いいたします。

諏訪間（以下、諏）：車に乗って、取りに行ったんだと思います。…ということはありません（一同笑）。縄文時代だったら、例えば干した貝と黒曜石を交換するとかいうこともあるのかもしれませんが、基本的には、例えば当時藤沢に遺跡を遺した人が、直接採集しに行って、戻ってくるみたいな形でした。ただ、遊動とはいいながら、やたらとあちらこちらに動き回るわけではなくて、その時期とか季節とかに合わせて、とれる動物や植物といったものとうまく連動させつつ、例えば長野県に行って黒曜石も採る、そのような遊動生活を送っていたと考えられます。また、例えば藤沢から（長野県の）和田峠までの距離は150kmを超えますので、簡単ではないわけです。それを、黒曜石を採りに行くがためだけに移動するということはやはり考えにくいので、それなりの小さな家族なり集団で遊動していく、ということが考えられるのではないかと思います。ただ、いろいろな考え方があって、黒曜石だけを採りに行く集団あるいは部族みたいなものがあって、採りに行くのが例えば2～3人の若手だけで採りに行かせる、というようなことがあったかもしれませんが、それは検証できないので、難しいと思います。

桐：続いての質問です。「根下遺跡ほか藤沢の旧石器時代遺跡は相模野台地の最南端に位置するものだと思いますが、これよりも南の三浦半島や房総半島にも旧石器時代の遺跡はあるんでしょうか？」。麻生さんいかがでしょうか。

麻：藤沢市の場合は相模野台地というところが基本になってきて、その中では根下遺跡が一番南なんです。三浦半島はそこからまた丘陵が伸びていきますので、また違う地形、堆積になっています。旧石器時代という時代はローム層が堆積して川に面する端のところに遺跡を作るわけです。藤沢市の南部は砂地で生活できない、でも三浦半島のほうはローム層が堆積しているので遺跡があるんです。千葉のほうも下総台地という台地がありますから、そこに旧石器時代の遺跡が多くあります。先ほど諏訪間さんがお話になったように相模野台地はローム層の堆積が厚いからです。堆積が比較的薄い下総台地のほうでは相模野台地では手薄な一番古い時代の石器群が多く出てきています。それが下総台地の特徴でもあって、逆に相模野台地が得意な新しい時期の石器群などは下総台地では全部一緒に出てきてしまっていて分けられないので、わかりにくいところも出てきます。つまり、ローム層の堆積の厚さによって旧石器の出方も違って来るし、分類の仕方も難しくなってくる、掘れないところも出てくるということです。要するに、三浦半島も下総台地も含めて旧石器の遺跡があって、地域によっていろいろな旧石器時代の出方があります。

桐：続いての質問です。「砂川期について、集団の役割分担のようなものは進んでいたのでしょうか？」。高屋敷さんいかがでしょうか。

高：集団の役割分担になってしまうと、人の話になってくるので、そこまで踏み込んだ話はなかなか難しいです。ただ、砂川期になると、加工具類、搔器や削器、彫器などが分けられており、道具の使い分けのようところが出てくるので、使用方法、道具の使い分けがあったということは、それらの道具をそれぞれ専門にして皮なめしなどを主体的にやっていたというような役割分担はもしかしたらあったのかもしれませんが、一般的には、狩猟は男性、皮なめしや植

物採集は女性、ということも言われていますけれども、今の段階ではそこまで、さらに砂川期ではどうだった、というところまでは踏み込めないかなと思っています。

**桐：**次の質問に移ります。「下土棚で旧石器時代の遺跡がたくさん見ついているのはなぜでしょうか?」。まずは私からお答えします。

下土棚諏訪ノ棚遺跡というところは、立地的に、麻生さんの資料でもあったように、引地川と蓼川という川が合流している地点にあります。だいたい旧石器時代の遺跡は川とか水源の近くで見つかることが多いのですが、その中でも河川の合流部で、地形的にも繰り返し利用しやすい場所だったと考えられるかなと思います。麻生さんからはいかがでしょう。

**麻：**やはり地形的な問題は非常に大きいということです。川がないと礫群の礫も拾えないし石器の素材も拾えない、だからみんな川沿いに出てきます。川に沿って遺跡がいっぱいあるのは、縄文時代もそうですが川があるところにどうしても人が集まってくるということが大きいと思います。特に旧石器の場合は狩猟採集社会ですから、これは推定ですが、今回の下土棚にしても川に向かってせり出す台地の先端部に石器がいっぱい落ちているということは、つまり川に下りてくる動物などを仕留めるために見晴らしのいいところに遺跡を作った、という可能性が高いです。なので、川が見える台地の先端部のようなところに旧石器時代から人がよく住み着いているのではないかなと思います。その結果として現代では川の近くに道路を作ったり大きな建物を建てたりするときには、遺跡を調査する必要が出てきてしまうということになっていると思います。

**桐：**時間的に、次が最後の質問になります。「今日入り口のところに置いてあったような石器が見れるところはあるのでしょうか?」。まずは私からお答えいたします。

現在藤沢市内には、皆様もご存じかもしれませんが、なかなか恒常的に考古資料が見られる場所、博物館というものはありません。そのため、今日のようなイベントの時あるいは藤沢市外の博物館に行っていて、見ていただくしかないということになってしまっています。パネリストの皆様はこのことについていかがでしょう。

**諏：**市立博物館がない、というのは極めて残念な話でして、やはり、中核的な都市には、市民の歴史文化資産が集積する場所ということで、博物館が必要なのではないかなと思います。それはぜひ、小田原にもないので言えないですが、ぜひお願いできればと思います。

**麻：**今日展示してある遺物にしても、根下遺跡などには非常にいい石斧などがあります。また、今日私が発表したように細石器の中でも非常に珍しい、相模野台地でも珍しい石器群が藤沢市で出ているわけです。そのようなものをこういう時でないで見られないというのは非常に残念、掘っている人間としても非常に残念です。ですのでそういうものを定期的にいつでも見られる、そういう状況が望ましいと思います。どうしても旧石器という時代は縄文時代と違って土器があるわけでもなく、形のわかりにくいものばかりなのですが、石斧や細石器などというものは非常に見てわかりやすいですし、また今回私が発表したような非常に綺麗なナイフ形石器や槍先につけるような道具も見つかっていますので、25,000年前の人がこんなものを作ってこんな活動をしたんだということがわかる場所というのは、やはり必要ではないかなと私も思います。

**高：**私も、ぜひ藤沢市に博物館があるといいなと思います。中核的な都市ですと、お隣の茅ヶ崎市や鎌倉市にもありますし、特に茅ヶ崎市には最近博物館ができています。藤沢市は、旧石器ももちろんそうですけれども、全時代を通してかなりいい資料をお持ちだと思いますので、ぜひ博物館があるといいなと思います。神奈川県教育委員会のほうですと、毎年「かながわの遺跡展」という展示を冬場にやっていて、その会場を毎年県内の各地



パネルディスカッションの様子②

をお願いしてやらせていただいております。藤沢市にも博物館があれば、ぜひかながわの遺跡展も、できればお願いしたいと思っておりますので、楽しみにしております。

桐：いろいろなご意見・ご感想をいただいたところで、お時間になりました。このシンポジウムを通して、皆様が少しでも藤沢の旧石器時代のことに興味をもていただければなと思います。これにてパネルディスカッションを終わります。ありがとうございました。

## 5. アンケート結果の検討

ここでは、当日回収したアンケートの集計結果をもとに本シンポジウムの成果を検討する。

まず、来場者数 163 名のうち、アンケートの回収数は 103 枚で、回収率は 63.2%であった。今回のアンケートでは、「居住地」、「情報源」、「講演時間の長さ」、「講演の難易度」、「全体の満足度」および「感想（自由記述）」を項目として設け、調査した。感想を除く結果は次のとおりである。

アンケート集計結果

来場者数	163	回答数	103	回収率	63.2%
居住地					
市内	72	県内	22	県外	9
情報源（複数回答可）					
広報ふじさわ	34	チラシ・ポスター	28	知人・友人から	17
市公式 LINE	8	郷土歴史課 X	7	藤沢市 HP	5
その他	14				
講演時間の長さ					
長い	10	やや長い	31	丁度いい	58
		やや短い	2	短い	0
（無回答 2）					
講演の難易度					
難しい	8	やや難しい	37	丁度いい	55
		やや簡単	1	簡単	0
（無回答 2）					
全体の満足度					
とても満足	14	満足	57	やや満足	20
やや不満	3	不満	0	とても不満	0
（無回答 9）					

概観すると、

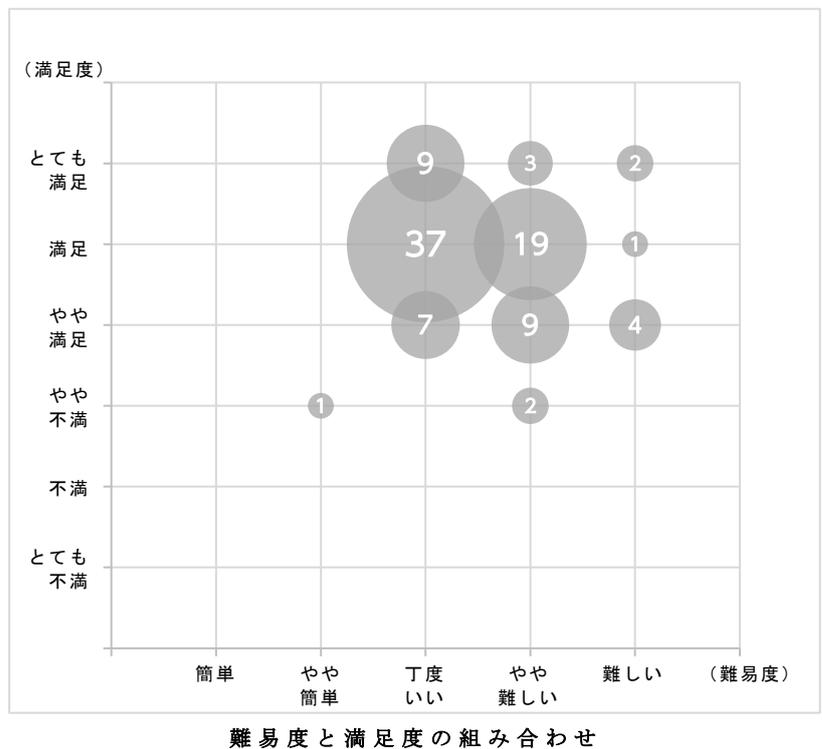
- ①居住地：回答者のうち 72 名が市内在住者で、多くの市民が来場していたことがわかる。
- ②情報源：市民の割合の高さ、あるいは年齢層を反映してか、広報を見て来場した人が多かった。また、チラシ・ポスターの割合も高く、単純ながら効果的であることがわかる。

- ③ 講演時間の長さ：丁度いいという意見が半数以上（56.3%）を占めたが、長い・やや長いという意見も多かった（39.8%）。
- ④ 講演の難易度：こちらも、丁度いいという意見が半数以上（53.4%）であったが、難しい・やや難しいという意見も半数近くあった（43.7%）。
- ⑤ 全体の満足度：満足度は非常に高く、「とても満足」が 13.6%、「満足」が 55.3%で、「やや満足」以上を合計すると 88.3%であった。

総括すると、

- ① 市民の来場が多く、歴史や文化財というコンテンツへの関心の高さが窺えた。
- ② 情報源は広報ふじさわやチラシ・ポスターといった紙媒体が効果的であった。
- ③ 講演時間・内容ともに丁度いいという意見が多いものの、やや長い、やや難しいという意見も少なくなかった。
- ④ 全体の満足度は非常に高く、「やや満足」以上を選択した人の割合は 88.3%であった。という結果となった。

興味深かったのは、講演の難易度と満足度の関係である。当初の想定通り、4割以上の来場者が「(やや)難しい」と回答した。しかし、先述した通り満足度は9割に迫るものであった。右の図は、難易度と満足度の回答の組み合わせをプロットした図である。縦軸が満足度、横軸が難易度を示し、回答数を数字と円の大きさとで表している。これを見ると、最も多い組み合わせである「丁度いい×満足」に次いで多いのが、「やや難しい×満足」であることがわかる。つまり、難易度の高さは必ずしも来場者の不満につながるわけではなく、むしろある程度の「歯ごたえ」は、満足感を与えるために必要な要素であるということがいえるだろう。



## 6. おわりに

今回のシンポジウムは、旧石器時代という一般に認知度が低いテーマを取り扱ったにもかかわらず、多くの市民をはじめとする来場者があり、また満足度の高い内容を提供することができた。感想からも、来場者の歴史や文化財への関心の高さが窺え、非常に充実したシンポジウムであったといえよう。

ただ、反省点として、事前に閉会予定時間を案内しなかったことや、来場者数の想定の高さが挙げられる。特に閉会時間については、アンケートの感想欄にも多くの意見をいただいた。これらの反省は次回に活かしたい。

また、パネルディスカッションでも質問を取り上げたが、感想でも展示施設を希望する声が多くあった。展示施設がないことが不思議だ、という声すらあった。藤沢市には、市民が誇るべき長く豊かな歴史があり、市民に対し、藤沢市の歴史や文化財に触れる機会を提供することは、市としての責務である。少しずつでも、このような機会を絶やさず、いつの日か恒常的に市民が文化財に触れることができる場所が置かれることを切に願う。（文責 桐原弘亘）

# 氷期の藤沢について

藤沢市生涯学習部郷土歴史課  
桐原弘亘

## 1. はじめに

「氷期の藤沢」という言葉から、どんな景色を思い浮かべるだろうか。氷に覆われた、一面の銀世界、あるいは、マンモスのような大型動物と、人間が対峙しているような情景だろうか。

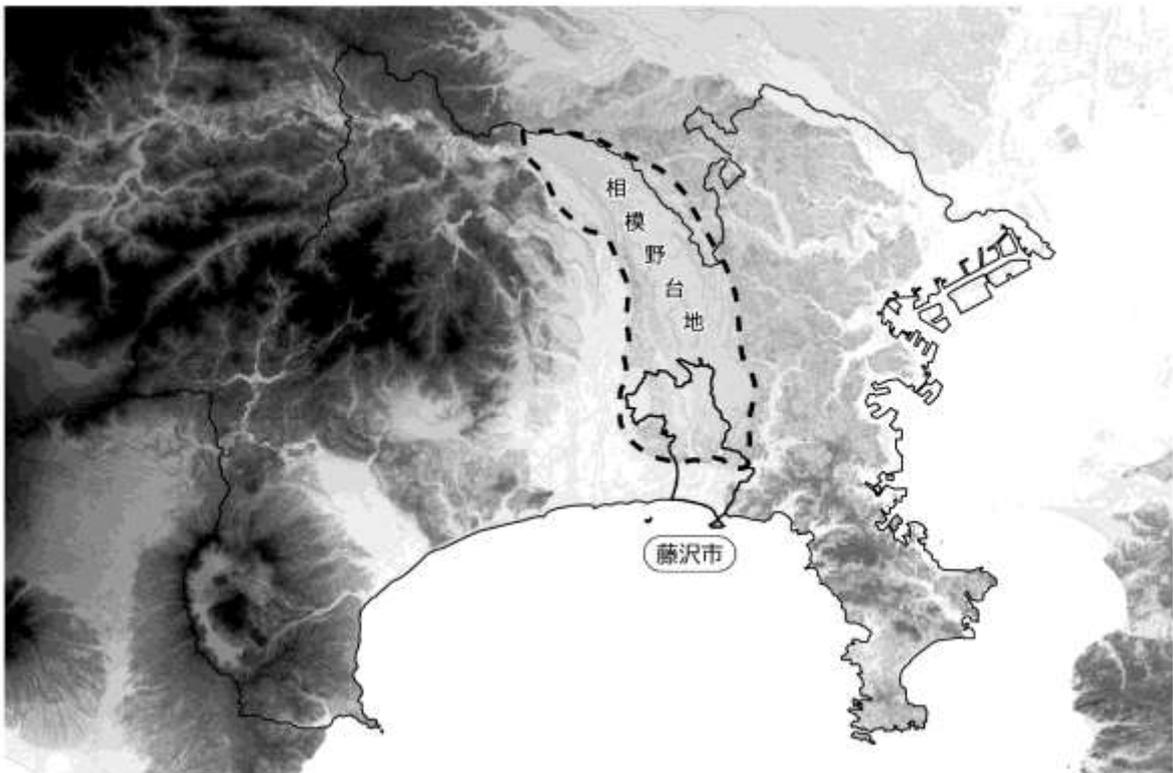
「氷期」とは、いわゆる「氷河期」のことである。現在よりも寒く、氷河が発達し、海面が低下していた時代で、日本列島が大陸と陸続きだったこともある。そんな氷期の最中である約38,000年前に、人類は日本列島にやってきた。それから約2万年間、人類が土器を使い始める約16,000年前までの時代が、「旧石器時代」である。

今回のシンポジウムでは、そんな「氷期」≒「旧石器時代」の藤沢で生きた人々の様子に迫っていききたい。

## 2. 旧石器時代の日本列島

日本列島に人類がやってきたのは、約38,000年前のことだと考えられている。それから、人類が土器を使い始めた時代＝縄文時代が始まる約16,000年前までの約2万年間のことを、旧石器時代という。

旧石器時代は、主に石器という、石を割って作った道具を使っていた時代である。当時の人々は、現在のように同じところに住み続けるのではなく、動物を狩ったり果物を採ったりしながら、広い範囲を移動して生活していた。自然環境としては、針葉樹を中心とした森が広がり、現在では絶滅したナウマンゾウなどの大型動物が生息していた。



第1図 藤沢市の位置（地理院タイルを加工して作成）

### 3. 旧石器時代の藤沢

藤沢でも、旧石器時代から人類が生活していた。藤沢市は、相模野台地という、相模原から南東に広がる台地の南端部に位置する。市内には境川や引地川などの河川が流れており、また湧水などによってできた大小さまざまな谷戸が発達している。

このような環境からか、市内には多くの旧石器時代の遺跡が遺されている。現在、市内には350か所以上の遺跡（周知の埋蔵文化財包蔵地）があるが、そのうち51か所で旧石器時代の遺跡が見つかっており、59回の発掘調査が行われてきた。

旧石器時代の遺跡は、台地の上に積もった旧石器時代の土である「関東ローム層」の中に眠っている。これらの遺跡からは、石器や礫、つまり、ほぼ石しか見つかりません。決して、当時の人々が石しか使っていなかったわけではなく、ローム層の特性により、木や骨などの有機物が残りづらいため、ほとんど石しか残らないということである。“石だけでは何もわからないのでは？”と思われるかもしれない。しかし石器は、とても多くの情報を持っている。例えば、使っている石の種類や産地、石器の作り方や石器に残る細かい痕跡など、そういったさまざまな情報から、石器を作り、使っていた人々の行動を導き出すのである。

### 4. 藤沢最古の石器

藤沢市内でこれまでに見つかった最も古い石器は、大庭地区にある根下遺跡の第V文化層で発見されたものである。相模野台地のローム層は、土色や含有物の違いから何枚もの層に分けることができ、その中のどの層から見つかったのかという情報から、どれくらい前の時期の石器かということがわかる。報告当時は、見つかった層が相模野ローム層のどの層にあたるかが判然としていなかったが、調査事例の蓄積と近年の研究により、B5層という非常に深い地層からの出土であったことがわかった（麻生 2025）。剥片と敲石のみの出土ではあるものの、今から35,000年以上前の時期の石器は神奈川県下でも数が少なく、大変貴重な資料である。

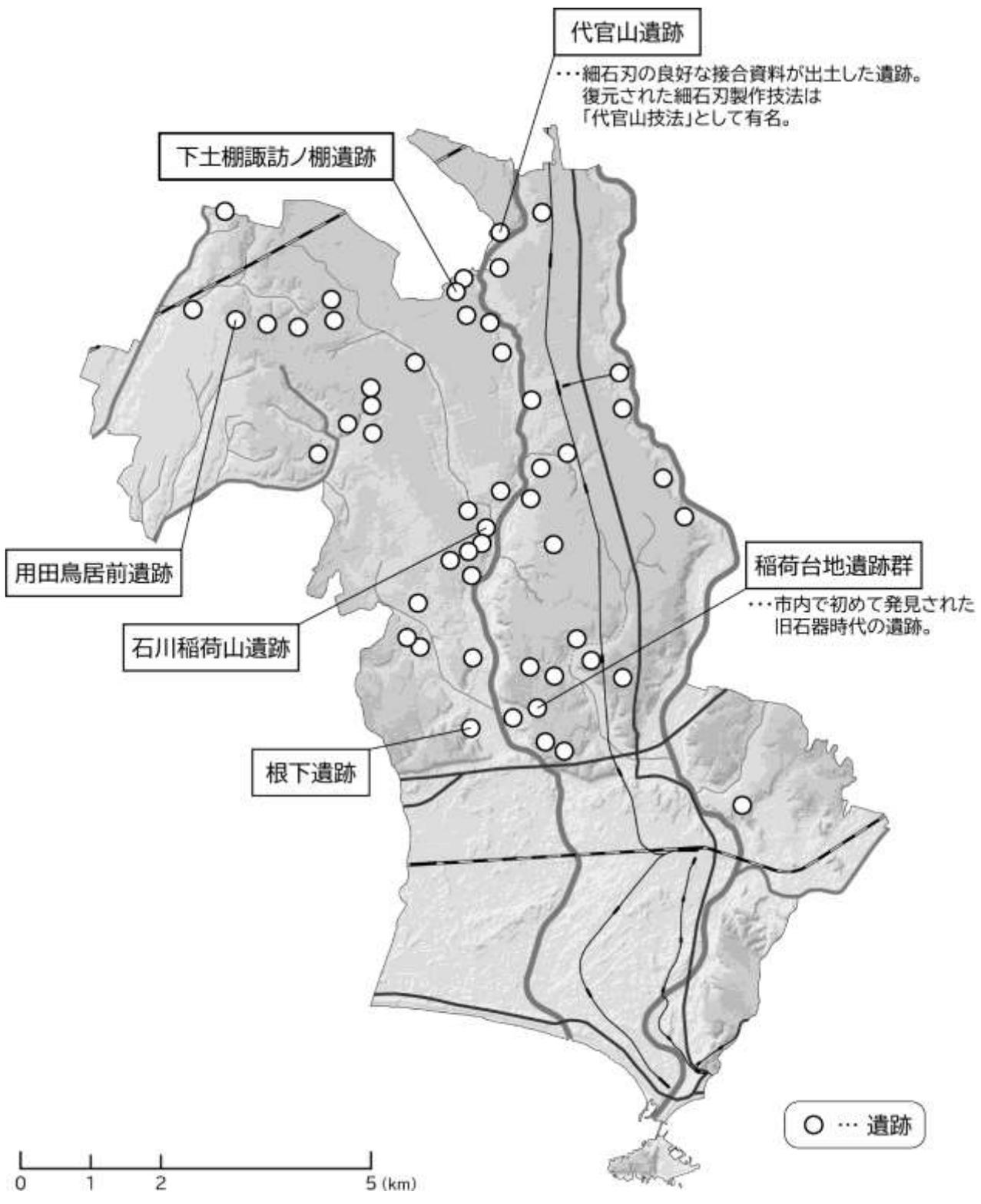
この根下遺跡では、もう一つ、重要な石器が見ついている。それが、第IV文化層で発見された打製石斧である。この石器はB4層という層から出土したもので、神奈川県内で初めて発見された打製石斧でもある（麻生ほか 1987）。石斧は、日本列島の旧石器時代の古い時期に特徴的な石器で、ローム層の堆積が厚い相模野台地では出土例が他地域に比べて少なく、貴重な事例である。なお市内では、局部磨製石斧という、刃の部分を磨いて加工した石斧がもう2点、石川地区にある石川稻荷山遺跡で出土している（須田・関根 1995）。

### 5. 遺跡と遺跡のつながり

御所見地区にある用田鳥居前遺跡は、用田バイパスの建設に伴って調査された遺跡である。この遺跡から出土した石器に、「遺跡間接合資料」といわれるものがある。石器は石を割って作るため、同じ石を材料にして作った石器どうしは、パズルのように、割る前の形に組み合わせることができる。これが「接合」で、同じ石から作った石器の組み合わせがわかることはもちろん、石器をどのように作ったかということもわかる。石器の接合自体は、同じ遺跡から見つかったものどうしであれば、珍しいことではない。しかし、用田鳥居前遺跡で出土した石器は、北に2kmほど離れた綾瀬市の吉岡遺跡群という遺跡で出土した石器と接合した（栗原ほか 2002）。これらの資料から、この二つの遺跡は同じ集団が遺したものだということがわかり、彼らの行動までもが描き出された（栗原 2008）。異なる遺跡の関係性を明確に示す資料は非常にまれで、旧石器時代の人々の行動を示す、大変貴重な資料である。

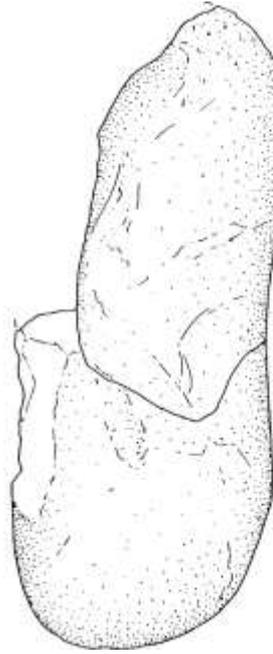
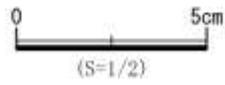
### 6. おわりに

ここまで、主に二つの遺跡を紹介した。しかし、他にも市内には興味深い旧石器時代の遺跡が多くある。勿論、今回のタイトルにもなっている下土棚諏訪ノ棚遺跡もその一つである。限られた時間では語りつくせないものがあるが、本シンポジウムで、皆様が少しでも旧石器時代に興味を持っていただき、注目していただければ幸いである。



第2図 藤沢市内の旧石器時代遺跡（地理院タイルを加工して作成）

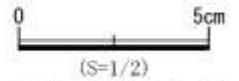
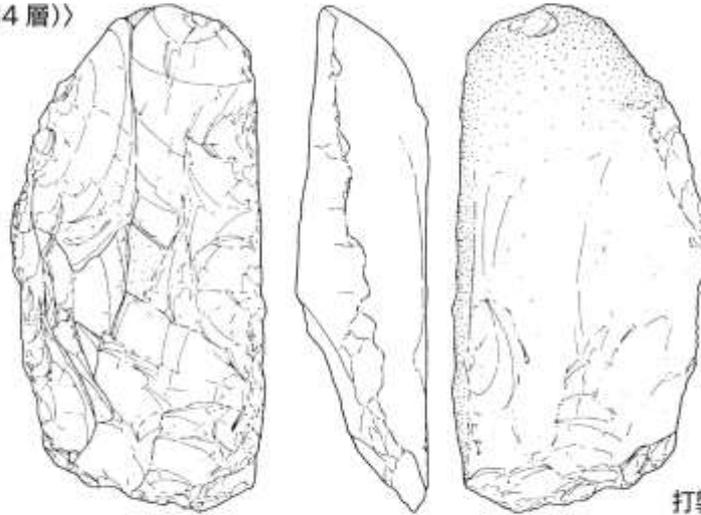
〈根下遺跡 第V文化層 (B5層)〉



敲石 (たたきいし)

第3図 藤沢最古の石器 (麻生ほか 1987より引用)

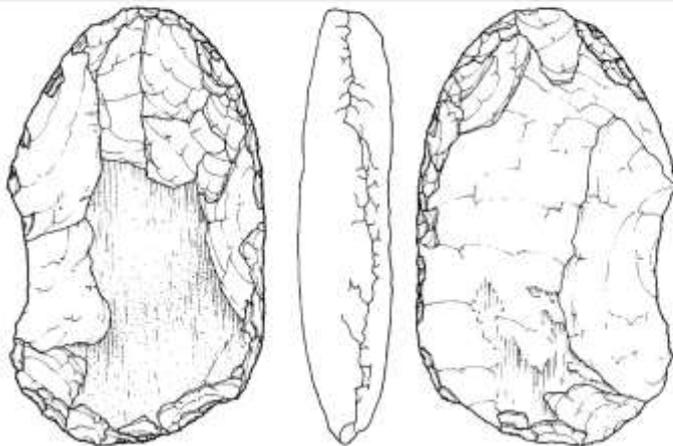
〈根下遺跡 第IV文化層 (B4層)〉



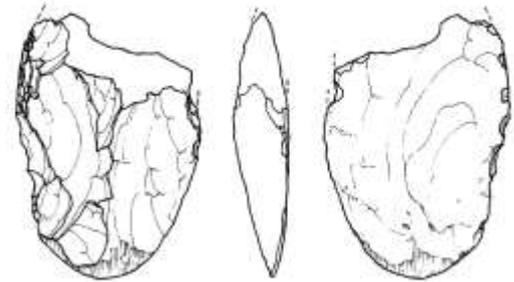
(表面 - 側面 - 裏面)

打製石斧

〈石川稲荷山遺跡 第II文化層 (B4層)〉



局部磨製石斧

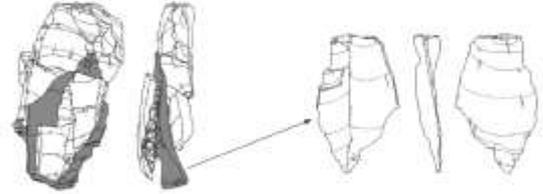


第4図 藤沢市内で出土した石斧 (麻生ほか 1987、須田・関根 1995より引用)

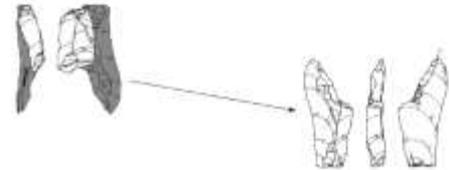


グレーの石器が用田鳥居前遺跡から出土したもの、それ以外の石器は吉岡遺跡群から出土したもの。  
( ) 内は石材名。

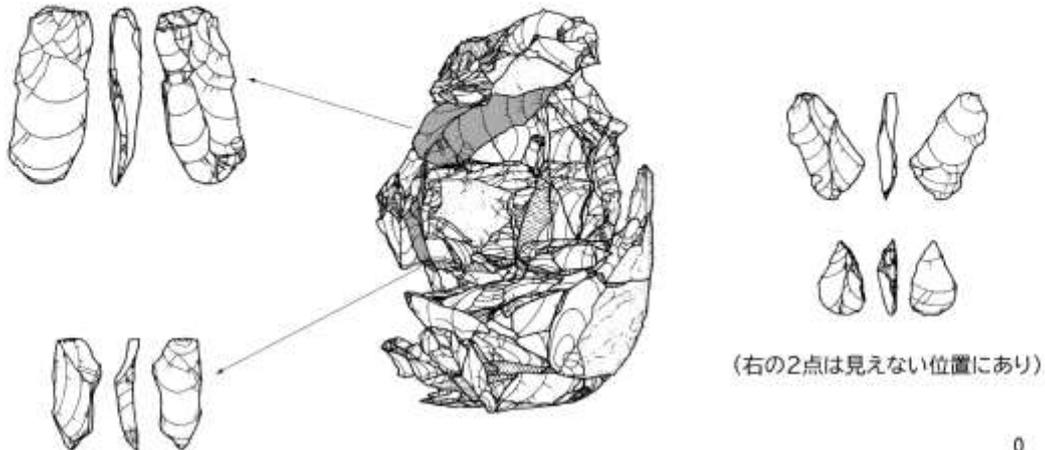
接合資料①(碧玉)



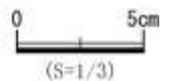
接合資料②(珪質頁岩)



接合資料③(硬質細粒凝灰岩)



(右の2点は見えない位置にあり)



第5図 用田鳥居前遺跡の位置と遺跡間接合資料  
(地理院地図及び吉田ほか 2003 を加工して作成)

### 引用・参考文献

- 麻生順司ほか 1987『藤沢市大庭 根下遺跡 発掘調査報告書』  
 麻生順司 2025「相模野旧石器時代前半期の再整理」『シンポジウム 関東・東海地方の旧石器時代研究の現在 予稿集』 pp. 44-49  
 工藤雄一郎ほか 2022『復元イラストでみる！人類の進化と旧石器・縄文人の暮らし』  
 栗原伸好 2008「遺跡間接合の石器」『大地に刻まれた藤沢の歴史 I ～旧石器時代～』 pp. 76-77  
 栗原伸好ほか 2002『用田鳥居前遺跡』かながわ考古学財団調査報告 128  
 須田英一・関根唯充 1995「No.399 遺跡」『藤沢市文化財調査報告書』 30 pp. 1-34  
 諏訪間順 2019『相模野台地の旧石器考古学』  
 吉田政行ほか 2003『吉岡遺跡群 X』かながわ考古学財団調査報告 153

# 相模野旧石器研究の展望

明治大学黒曜石研究センター客員研究員  
諏訪 順

## 1. 相模野台地の旧石器時代はなぜ重要か

相模野台地は、日本列島の中でも旧石器時代研究において極めて優れたフィールドとして評価されている。その最大の強みは、石器群が出土する関東ローム層が厚く堆積している点にある。層位的な出土例に基づき、日本列島で最も精緻な石器群の変遷を段階的に確認することが可能である。

この点において、相模野台地は日本旧石器研究の「基準地域」であり、日本にとどまらず、世界的に見ても極めて重要な研究フィールドであるといえる。

本講演では、相模野旧石器研究がどのように始まり、どのような点が強みであるのか、またその弱点は何か、さらに今後どのような展望が考えられるのかについて、簡潔に整理する。

## 2. 相模野旧石器研究はどのように進められてきたか

1949年の岩宿遺跡の発見によって、縄文土器の出現以前に位置づけられる「先土器時代」が確認され、その後、列島各地で同時代の石器群の発見・調査が相次いだ。

こうした研究の流れの中で、1968年から大和市月見野遺跡群の調査が開始される。異なる層位から複数の石器群が出土し、それぞれが異なる時期に属することが明らかとなった。これにより、層位的出土に基づいて石器の変遷を捉える「編年」の基準が形成されていった。

月見野遺跡群や小園前畑遺跡の調査成果を基に、相模野編年（Ⅰ～Ⅴ期）が提示された（小野・鈴木編 1972）。これは、小野正敏・鈴木次郎・矢島國雄による相模野編年、すなわち「第四紀総合編年」構想であり、石器型式の変化のみならず、層位・地形・海面変動・火山活動などを総合的に捉えようとする視点であった。このような人類史と自然史の統合を志向する姿勢は、日本では極めて早い段階のものであり、国際的に見ても先進的であった。

1976年には、矢島國雄・鈴木次郎の両氏により、Ⅰ期からⅤ期に区分される「相模野編年」が体系的に提示され（矢島・鈴木 1976）、南関東地方の旧石器時代編年の基準として定着していく。

その後、1970年代末から1980年代にかけて、大規模な発掘調査が相次いだ。大和市月見野上野遺跡、海老名市柏ヶ谷長ヲサ遺跡、座間市栗原中丸遺跡、相模原市中村遺跡、藤沢市慶應藤沢キャンパス内遺跡などでは、一文化層で数千点を超える石器群や、一遺跡で10層以上の文化層が確認された。とくに、ナイフ形石器文化後半期から縄文時代草創期にかけての良好な資料が飛躍的に蓄積された。

これらの成果を基に、1988年、筆者は相模野台地における旧石器時代から縄文時代草創期（石鏃出現以前）までの石器群を、層位的に段階Ⅰから段階ⅩⅡまで整理した「相模野段階編年」を提示した（諏訪 1988）。以後、本編年は日本列島の中で最も精緻な石器群変遷を示す地域編年として、他地域の研究にも大きな影響を与えている。

2000年以降は、層位編年に加えて放射性炭素年代測定による年代的検討が進展した。とくに近年は、較正年代を導くプログラムの精緻化により、より高精度な年代議論が可能となっている（高屋敷 2024）。また、黒曜石原産地推定研究の進展により、時期ごとの石材構成の変化から、石材獲得行動や遊動領域、地域間関係についても検討が進められている。

### 3. 相模野旧石器研究の強みと弱点

#### (1) 圧倒的な層位的優位性

後期旧石器時代の石器群は、関東ローム層のうち立川ローム層から出土する。立川ローム層は富士山を給源とし、偏西風によって東方へ堆積したものであるが、相模野台地は富士山に近いこと、特に厚く堆積している。

さらに、黄褐色のローム層と暗色の黒色帯が互層をなし、相模野第一スコリア (S1S)、相模野第二スコリア (S2S)、始良丹沢火山灰 (AT) といった鍵層が明瞭であるため、遺跡間の層位対比が容易である。

相模野台地の立川ローム層の厚さは 6~7m に及び、武蔵野台地の約 2 倍、下総台地の約 4 倍に相当する。当時の生活面は礫や大型石器の集中層から推定されるが、石器が数十 cm 以上移動している場合も多く、慎重な層位判断が必要である。

#### (2) 多様な石材と時期ごとの明瞭な変化

相模野台地では、黒曜石、ガラス質黒色安山岩、硬質細粒凝灰岩のいわゆる「相模野三大石材」を中心に、チャートなど多様な石材が利用されている。原産地までの距離は概ね以下のように区分できる。

- ・ 在地石材 (10km 以内・日帰り圏)  
丹沢産硬質細粒凝灰岩、多摩川産チャート
- ・ 近在地石材 (30~70km・一泊圏)  
畑宿産黒曜石、柏峠産黒曜石、箱根産安山岩
- ・ 遠隔地石材 (70km 以上・数日圏)  
信州系黒曜石、高原山産黒曜石、神津島産黒曜石、東北系硬質頁岩

相模野台地では、文化層ごとに主要石材の構成が明瞭に変化するため、文化層の分離が容易である。また、石材構成の変化は、石材獲得行動や行動領域を具体的に復元する上で有効な指標となる。

南関東各地でも同様の傾向は認められるが、相模野ほど明瞭ではない。また、長野県では信州産黒曜石、東北地方では硬質頁岩、近畿地方ではサヌカイトが主要石材となり、石材構成のみから時期変化を捉えることは困難である。

相模野台地における石材・分布研究は、集団の行動圏を可視化した点で、大きな研究到達点といえる。

#### (3) 相模野研究の弱点

一方で、相模野台地は層位が厚いため、立川ローム層上部で大量の石器群が検出されると、下層まで調査が及ばない場合が多い。AT 層までも 2~3m の厚さがあり、1 万点を超える石器・礫が検出された場合、開発条件によってはそれ以下の層位の調査が不十分となることも少なくない。

その結果、立川ローム層下底まで全掘されることの多い武蔵野台地や下総台地に比べ、後期旧石器時代前半期の資料が少なく、「環状ブロック群」などの検出例も乏しいという弱点がある。

### 4. 相模野旧石器研究の展望

2001 年に開催されたシンポジウム「相模野旧石器編年の到達点」から 25 年が経過した。また、1988 年の相模野段階編年提示からは 38 年が経過している。この間、資料の増加はあったものの、層位に裏付けられた石器群変遷は大きな修正なく運用され続け、編年研究のスタンダードとして定着している。

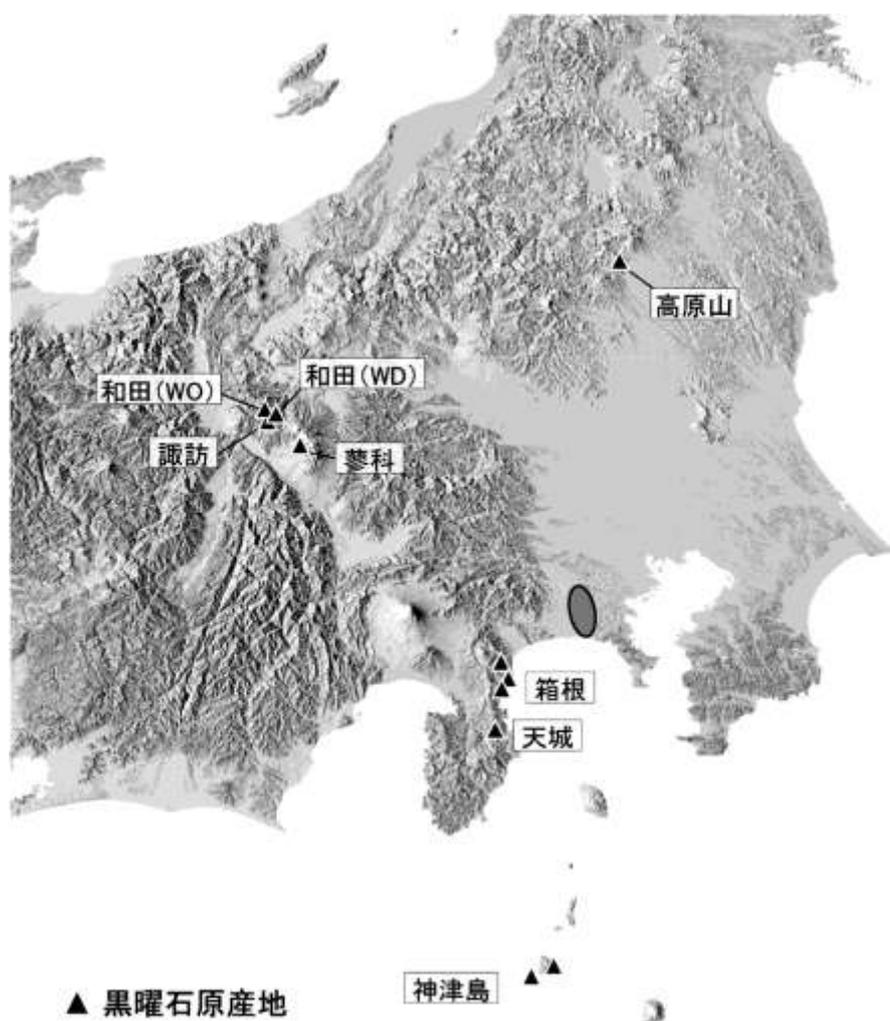
現在の相模野旧石器研究は、石器型式の変化のみならず、遠隔地由来石材の利用、遺跡集域と空白域の意味、台地・谷・水系を単位とした景観的理解へと展開している。

石材利用と遺跡分布から旧石器人の行動圏を復元した点で、研究は大きく前進した。相模野は単なる「遺跡密集地」ではなく、「人の移動と選択が読み取れる空間」として再定義されつつある。

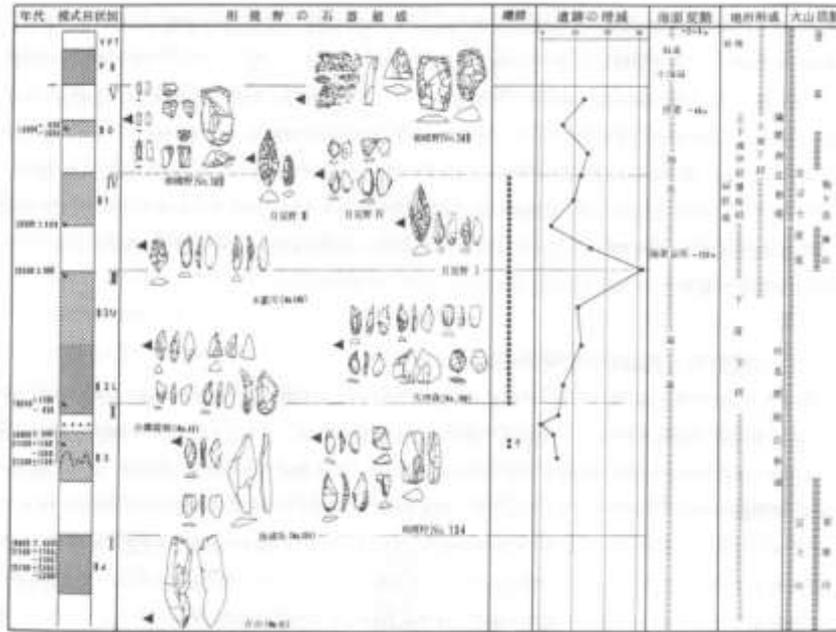
今後は、放射性炭素年代測定のさらなる蓄積により、より高精度な編年を構築し、相模野集団の行動領域や集団間関係を明らかにすることが求められる。相模野台地は、日本列島のみならず東アジア旧石器研究を牽引する基準フィールドへと進むべきである。

## 引用・参考文献

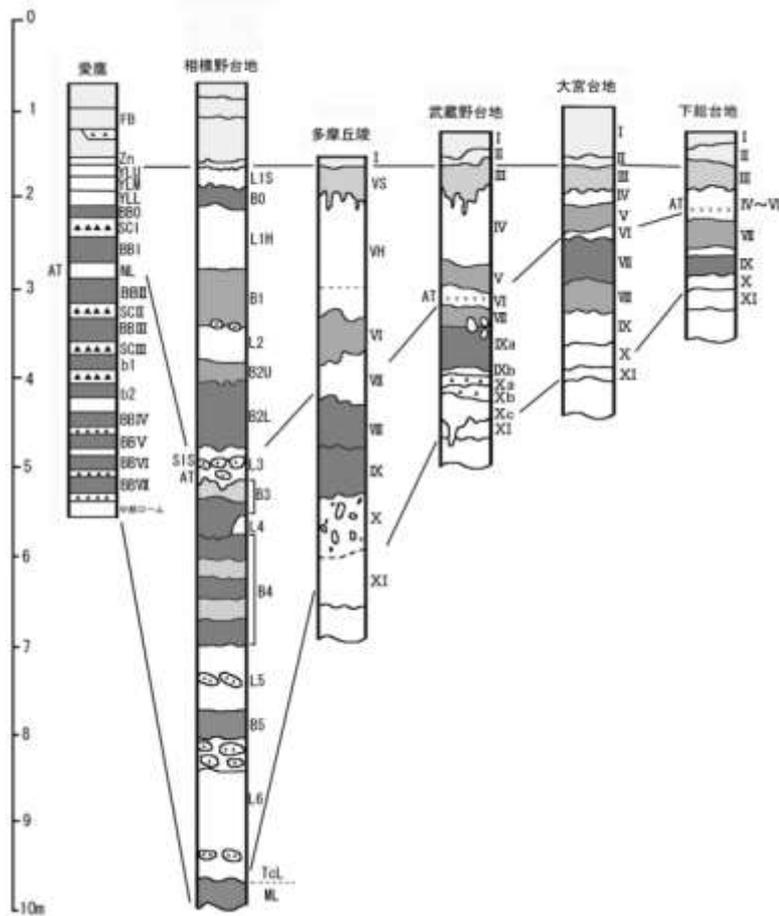
- 小野正敏・鈴木次郎編 1972『綾瀬町文化財調査報告第1集 小園前畑遺跡発掘調査報告書』  
鈴木次郎・矢島國雄 1988「先土器時代の石器群とその編年」『日本考古学を学ぶ』（1）新版  
諏訪間順 1988「相模野台地における石器群の変遷について一層位的出土例の検討による石器群の段階的把握一」『神奈川考古』24  
諏訪間順 2001「相模野旧石器編年の到達点」『相模野旧石器編年の到達点』平成12年度神奈川県考古学会考古学講座  
諏訪間順 2019『相模野台地の旧石器考古学』新泉社  
諏訪間順 2025「関東域における海と山の黒曜石資源利用の動態一神津島・伊豆・箱根・高原山原産地をめぐって」『季刊考古学』172  
高屋敷飛鳥 2024「放射性炭素年代からみた相模野編年の現在」『神奈川考古』60  
中村雄紀 2014「関東地方における旧石器時代の年代と編年」『旧石器研究』10  
矢島國雄・鈴木次郎 1976「相模野台地における先土器時代研究の現状」『神奈川考古』1



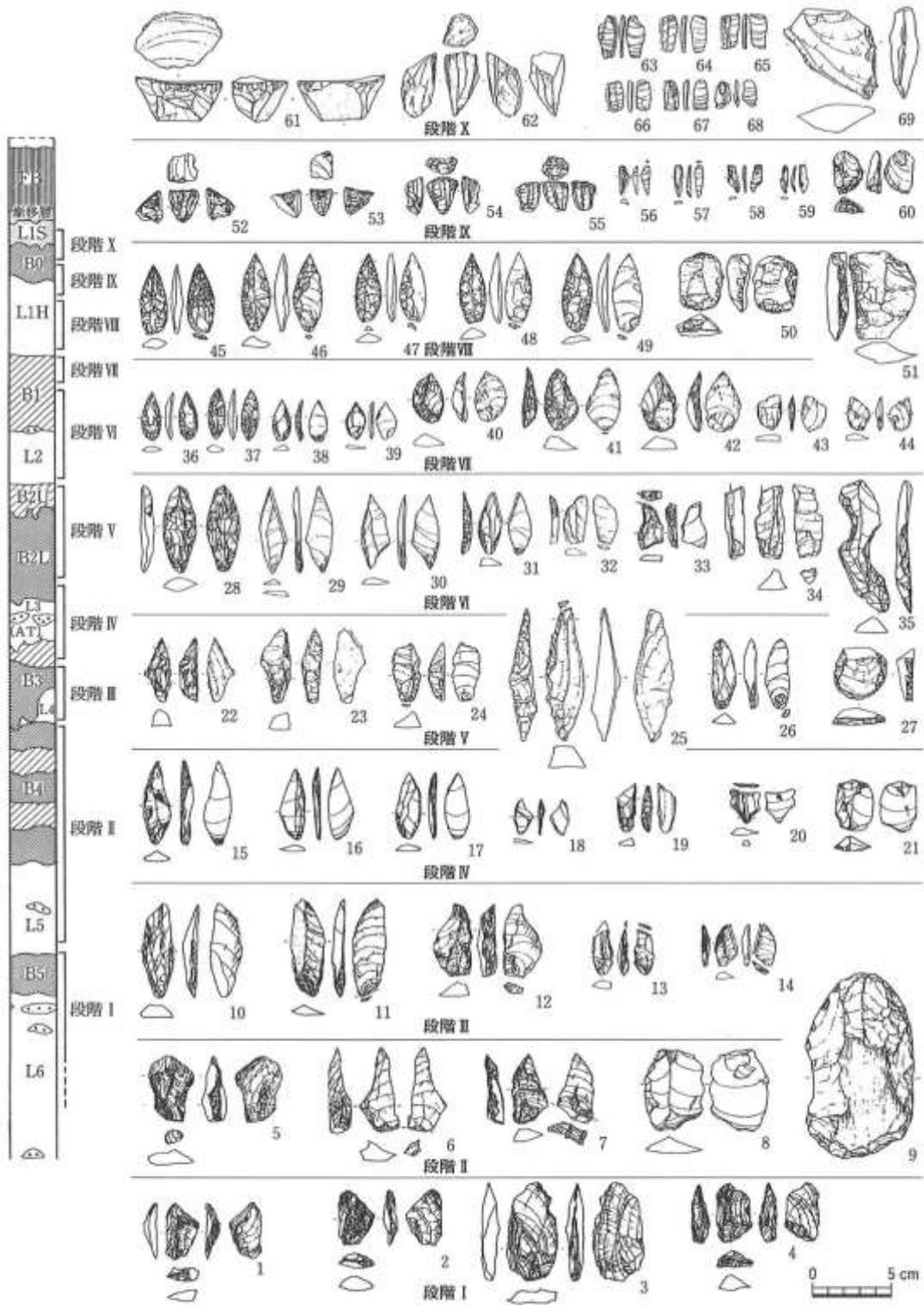
第1図 相模野台地と黒曜石原産地



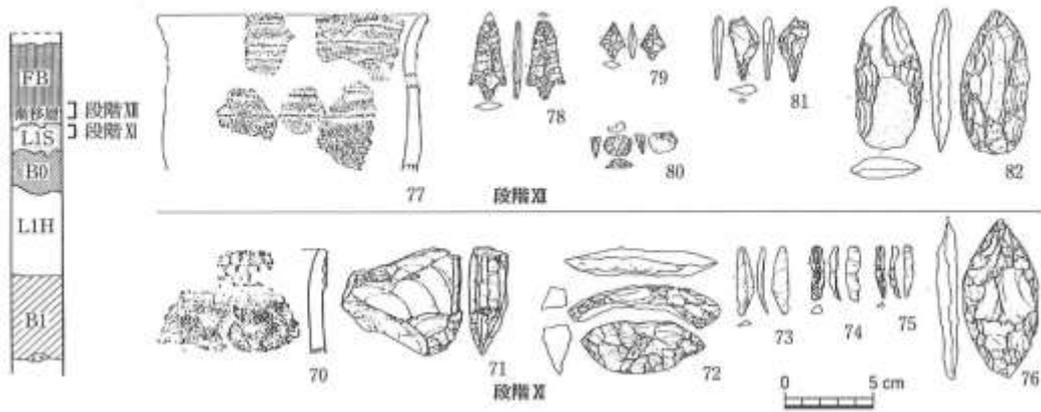
第 2 図 相模野第四紀総合編年（小野・鈴木 1972）



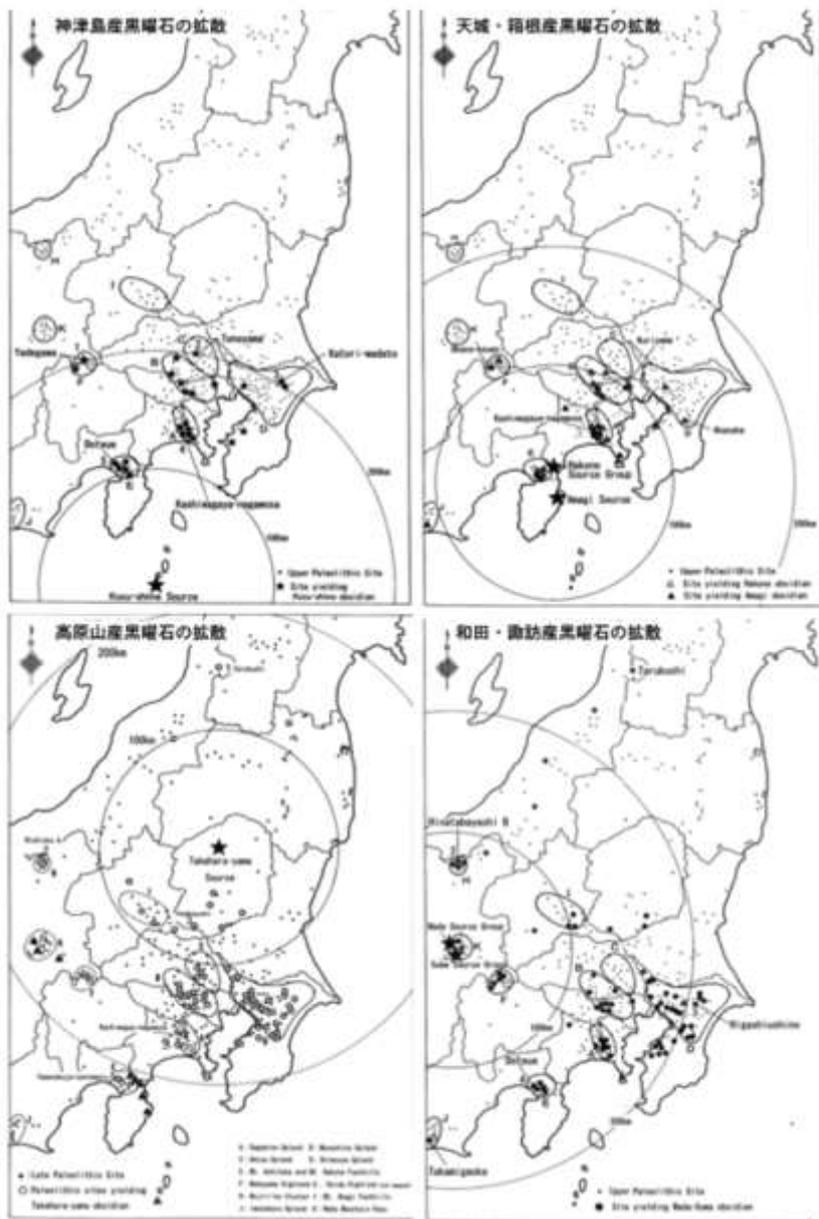
第 3 図 愛鷹山麓から下総台地までの立川ローム層



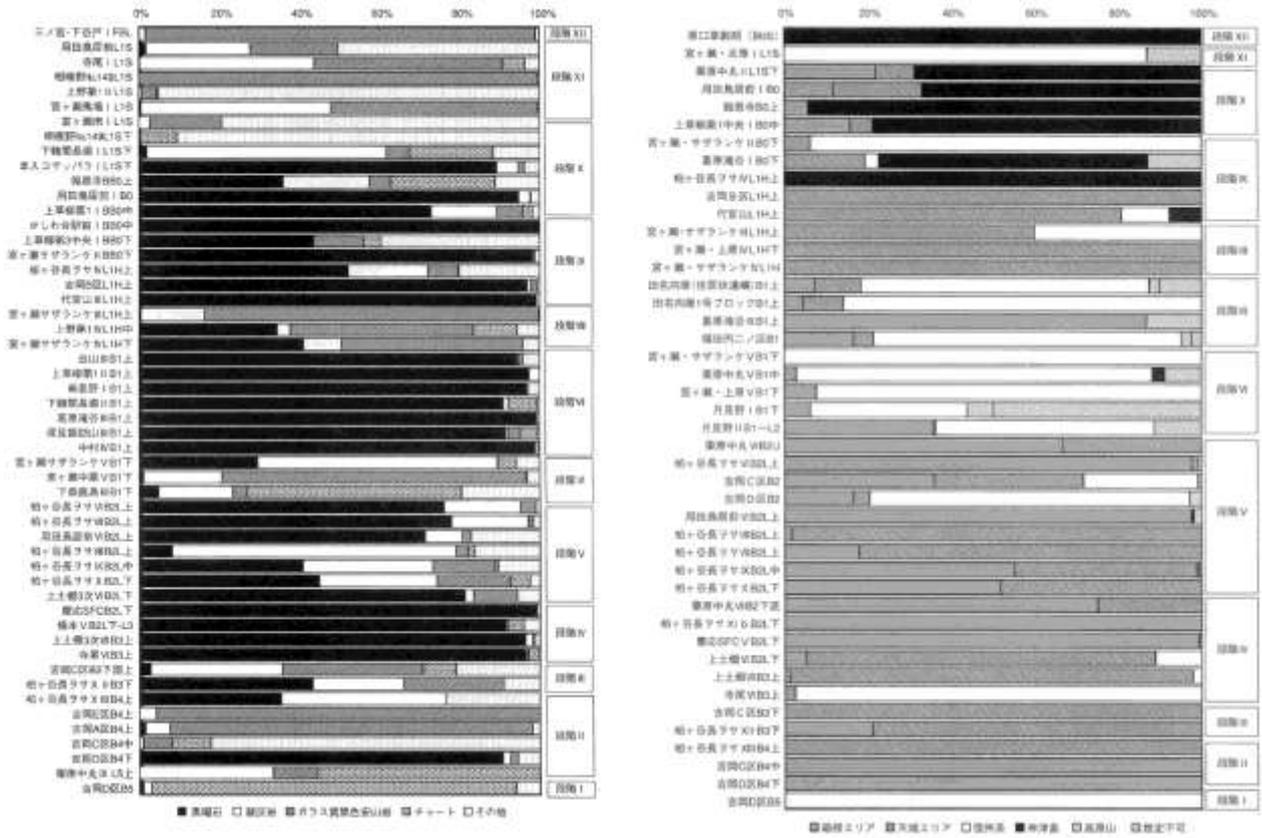
第4図 相模野段階編年（段階Ⅰ～段階Ⅹ）



第 5 図 相模野段階編年（段階 X I ～段階 X II）



第 6 図 関東・中部の黒曜石の拡散



第7図 相模野台地の石材構成の変遷（左：石材構成 右：黒曜石）

時期区分	相模野編年	相模野段階編年	主な出土層位	年代(cal BP)
縄文草創期(隆起線文土器)	-	段階XII	漸移層~FB下部	約15,000~14,000
縄文草創期初頭(出現期土器) ・削片系細石刃石器群	-	段階XI	L1S上部	約16,000~15,000
稜柱系・舟底系細石刃石器群	第V期	段階X	B0上部~L1S下部	約19,000~17,500?
稜柱系細石刃石器群		段階IX	L1H上部~B0下部	約20,500~19,000
尖頭器石器群		段階VIII	L1H	約21,500~19,000
ナイフ形石器終末期(月見野期)	第IV期後半	段階VII	B1上	約22,500~21,500
砂川期	第IV期前半	段階VI	L2~B1下	約24,000~22,500
IV下V層相当	第III期	段階V	B2L上部~B2U	約29,000~24,000
VI層相当	第II期後半	段階IV	L3~B2L下部	約30,500~29,000
VII層相当		段階III	L4~B3	約33,000~30,000
IX層相当	第II期前半	段階II	L5~B4	約35,000~33,000
X層相当	第I期	段階I	B5	~約35,000

第8図 相模野編年と年代（高屋敷 2024）

# 下土棚諏訪ノ棚遺跡の調査

玉川文化財研究所  
麻生 順司

## 1. はじめに

下土棚諏訪ノ棚遺跡の調査は、藤沢都市計画事業北部第二（三地区）土地区画整理事業に伴って行われた。北部第二（三地区）土地区画整理事業は藤沢市の北部地域に計画された総面積約275haにも及ぶ大規模な開発事業であり、下土棚諏訪ノ棚遺跡はこの事業区域の北端部に位置している（第1図）。

北部第二（三地区）土地区画整理事業区域内には複数の周知された遺跡が存在していることから、区画整理事業を開始するためには遺跡の事前調査が必要となる。このため、調査に当たっては事業区域全体を対象とした分布調査を平成3年12月から開始した。そして、この分布調査の成果を参考に平成5年6月から平成16年度にかけて予備調査（テストピット調査）が断続的に実施され、その結果を元に下土棚諏訪ノ棚地区の本格調査が平成17年11月から開始された。

## 2. これまでの調査

下土棚諏訪ノ棚遺跡の調査は、現在までに9次にわたる本格調査が断続的に行われており、今後も調査が行われる予定である（第2図）。これまでの発掘調査では旧石器時代から近世にまたがる各時期の遺構・遺物が発見されている。特に弥生時代後期から古墳時代前期にかけては住居跡が合計で63軒も確認されており、この地域に同時期の大きな集落が展開していたものと推定されている。また、今回報告する旧石器時代においても第4次調査以降の本格調査においてまとまった点数を持つ石器ブロック（石器集中部）や礫群が検出されている。

本報告では、下土棚諏訪ノ棚遺跡の第8次調査までの出土石器を中心に藤沢市内から発見された主要な石器群を基に旧石器時代の石器群の移り変わりを第5～7図に示した。

**第4次調査**－生活面としては2時期の文化層が確認された。第Ⅰ文化層はB0層に位置し、石器群の内容は細石刃関連遺物の出土が大きな特徴としてあげられるもので、良質の黒曜石を使用した細石刃が7点、「野岳・休場型細石核」の特徴を持つ細石刃石核が1点、細石刃石核打面再生剥片が1点確認された（第7図⑩）。編年的には相模野第Ⅴ期（鈴木・矢島 1978、鈴木2001）、段階Ⅸ（諏訪間 1988・2001）に位置づけられる。第Ⅱ文化層は、本遺跡での基本層序でB1層の黒色帯が目視できなかつたことからB1相当層とした文化層である。遺構としては石器ブロックが3ヵ所確認され、石器群の内容としては非黒曜石である凝灰岩とチャートを用いたナイフ形石器6点とスクレイパー1点が主要な定形石器となるものである（第6図⑪）。剥片剥離の技術的な特徴としては幅広で寸づまりの剥片が主体となっており、石刃技法が認められないものと考えられることから、剥片剥離技術としては相模野第Ⅳ期前半の石刃技法が崩壊して次の段階へ移行していく過程を示しているものと考えられる。

**第6次調査**－出土遺物は、細石刃関連遺物1点、ナイフ形石器1点、剥片1点、石核1点、黒曜石チップ4点でした。層位的には漸移層からB2L層にかけて出土したが、いずれも単独出土であり、各出土層位の内容としては不明瞭な点の多い出土状況であった。しかしながら、B2L層から出土したナイフ形石器は単独出土であったものの、横長剥片素材である点やその出土層位から相模野第Ⅲ期、段階Ⅴに属する遺物と考えられ、第9次調査でもこの層位から礫群と石器が確認されていることから、この時期にも遺物群の広がりが確認されている（第5図⑥）。

**第7次調査**－遺跡の北西側に位置する1区と台地の東端部に位置する4区において旧石器時代の本格調査が行われた。1区の旧石器時代調査では、生活面としては2時期の文化層とし

て捉えられた。第Ⅰ文化層はB1相当層上部にあたり、遺構としては旧石器調査区の崖線部に近い北東部に石器群ロックが3カ所確認された。石器群の内容としては、主な定形石器としてナイフ形石器6点、スクレイパー1点、彫器1点が確認され、ナイフ形石器を主要な利器とする石器群と考えられる(第6図⑭)。石器群の特徴としては、黒曜石を主要な石材として小形で不定形な剥片を作出し、これを素材とする不定形なナイフ形石器を主要な定形石器とする石器群と考えられ、編年的には相模野第Ⅳ期後半、段階Ⅶに位置づけられるものと考えられる。

4区の旧石器時代調査は引地川に面する崖線の斜面部に位置し、第4次調査で検出された石器群から東に約40m離れた地点にあたる。第Ⅰ文化層として出土した遺物は、1カ所のブロックと1基の礫群として確認された。石器群の内容としては、定形石器としてはナイフ形石器3点であり、基本的にナイフ形石器を主要な利器とする石器群である(第6図⑩)。特に33のナイフ形石器とした石器は、表面が茂呂系のナイフ形石器、裏面には尖頭器に施される面的な加工が見られる石器であり、編年的位置づけにおいても重要な石器と言える。これらの石器群は編年的には相模野第Ⅳ期前半、段階Ⅵに位置づけられるものと考えられ、黒曜石の剥片1点を除くと全て同一母岩の黒色頁岩であり、石核が検出されていないことから移動途中の一時的な石器製作状況を示しているものと考えられる。

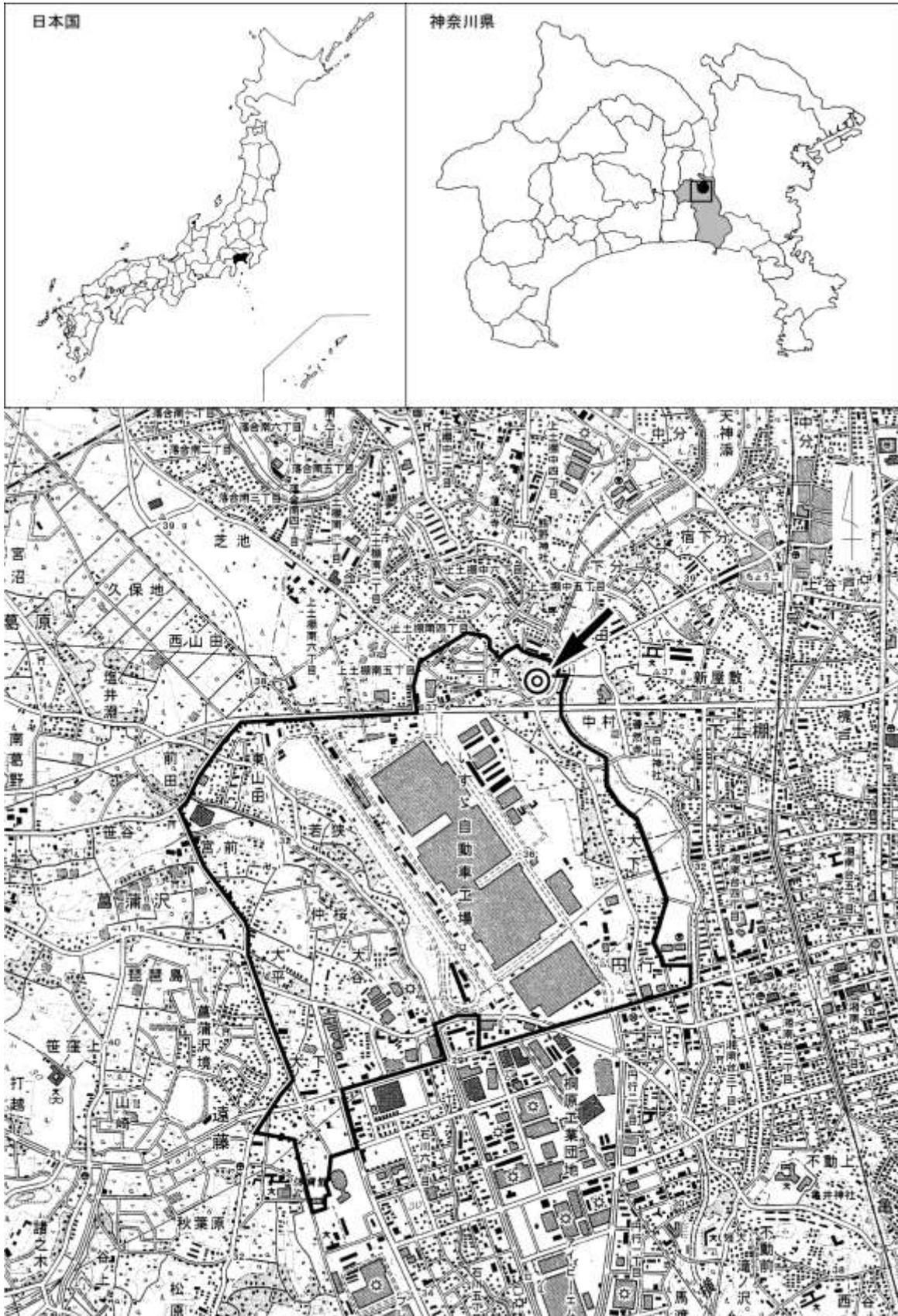
**第8次調査**—遺跡の北側に位置する1区、台地の中央部に位置する2区と3区において本格調査が行われた。1区では、堆積土の層相の変化が乏しく土層堆積の分層に対応させることができなかった。このため、出土遺物については石器の母岩別分類と石器群の特徴を用いて検討して2時期の文化層に分離した。第Ⅰ文化層はB1相当層の上部に設定されるもので、石器群の内容としては主な定形石器として尖頭器1点、ナイフ形石器3点、彫器1点が確認され、ナイフ形石器を主要な利器とする石器群と考えられる(第6図⑬)。石器群はいずれも黒曜石を素材としたものであり、原産地分析を行ったところナイフ形石器に天城柏峠産が1点確認された以外は蓼科冷山産の黒曜石であった。石器群の特徴としては、冷山産の黒曜石を石材とした小形の縦長剥片を素材とするナイフ形石器を主要な定形石器とするもので、これに有樋尖頭器が伴う石器群と考えられる。

3-1区の旧石器時代調査では、文化層として黒曜石石器群を第Ⅰ文化層、非黒曜石石器群を第Ⅱ文化層とした。このうちの第Ⅱ文化層からは調査区の中央部に位置する1カ所のブロックとその南側と東側に離れて分布する単独石器として確認された。石器群の内容としては典型的な二側縁加工の茂呂形ナイフ形石器が確認されており、打面再生剥片や両設打面で石刃状の縦長剥片を作出した剥離痕を残す石核の存在からは、いわゆる「砂川型刃器技法」(戸沢 1968)の存在が想定される(第6図⑪)。

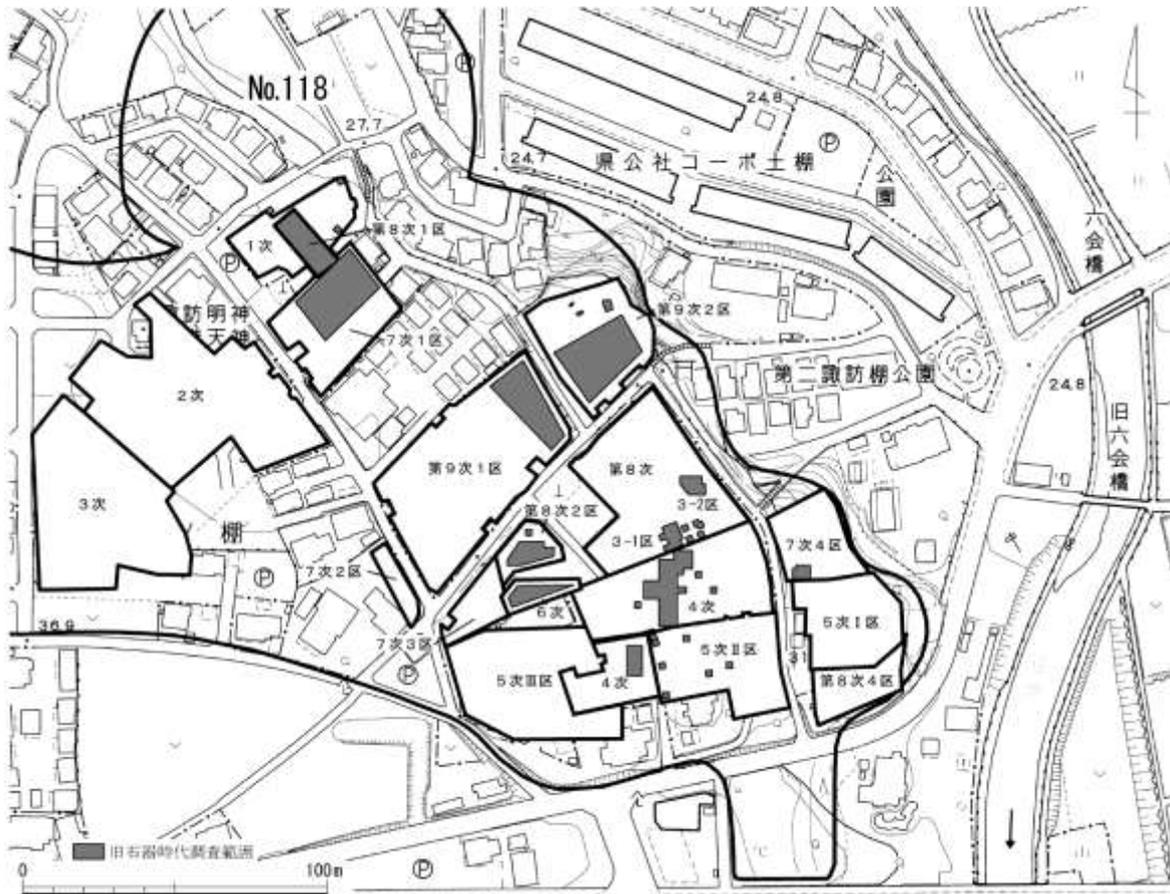
3-2区の調査は、弥生時代の調査中にY10号住居址と風倒木痕から細石刃石核原形と細石刃が出土したことから調査が行われた。生活面としてはL1S層下部に設定される。石器群の内容としては、細石刃が46点、細石刃石核が11点、細石刃石核原形が18点、細石刃石核打面再生剥片・二次加工のある剥片・使用痕のある剥片を含む剥片類が72点、ナイフ形石器が2点であり、ナイフ形石器が混入品と考えられることから、細石刃石器群としてまとめられる石器群である(第7図⑯)。この細石刃石器群の技術的特徴としては、非黒曜石を素材としたホロカ技法(安蒜 1979、鶴丸 1979)を用いた船野型細石核に荒川台技法(阿部 1993)を用いた細石核を共伴することから、「船野型+荒川台型」の細石核を用いた細石刃関連遺物のみで構成されるという特徴が見られる。

### 3. 第9次調査

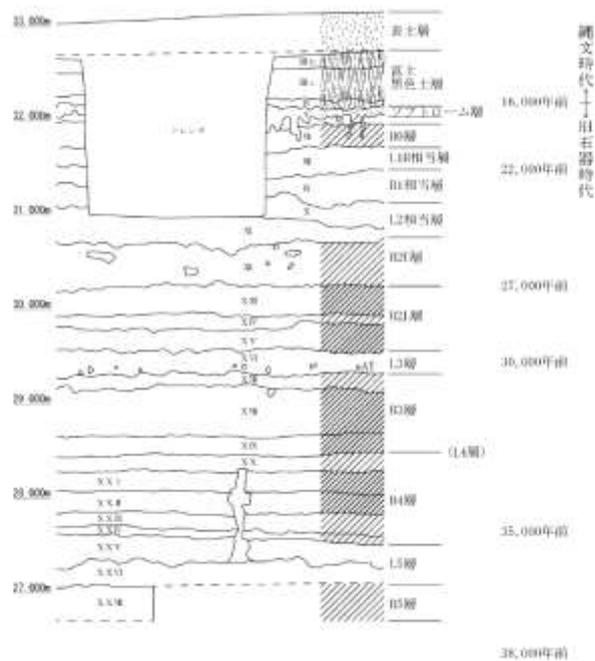
今回の発表で中心となる第9次調査では合計3,300点を超える遺物が出土し、文化層としてもこれまでの調査では最も深いB3層下部まで石器の出土が確認された。遺構としても石器ブロックが15カ所、礫群は36基が確認されている。特にL2相当層から出土した非黒曜石製石刃を素材とした砂川期のナイフ形石器石器群とB1相当層から出土した黒曜石製の尖頭器とナイフ形石器の石器群が注目される。(引用文献は紙面の都合により割愛した。)



第1図 下土棚諏訪ノ棚遺跡の位置

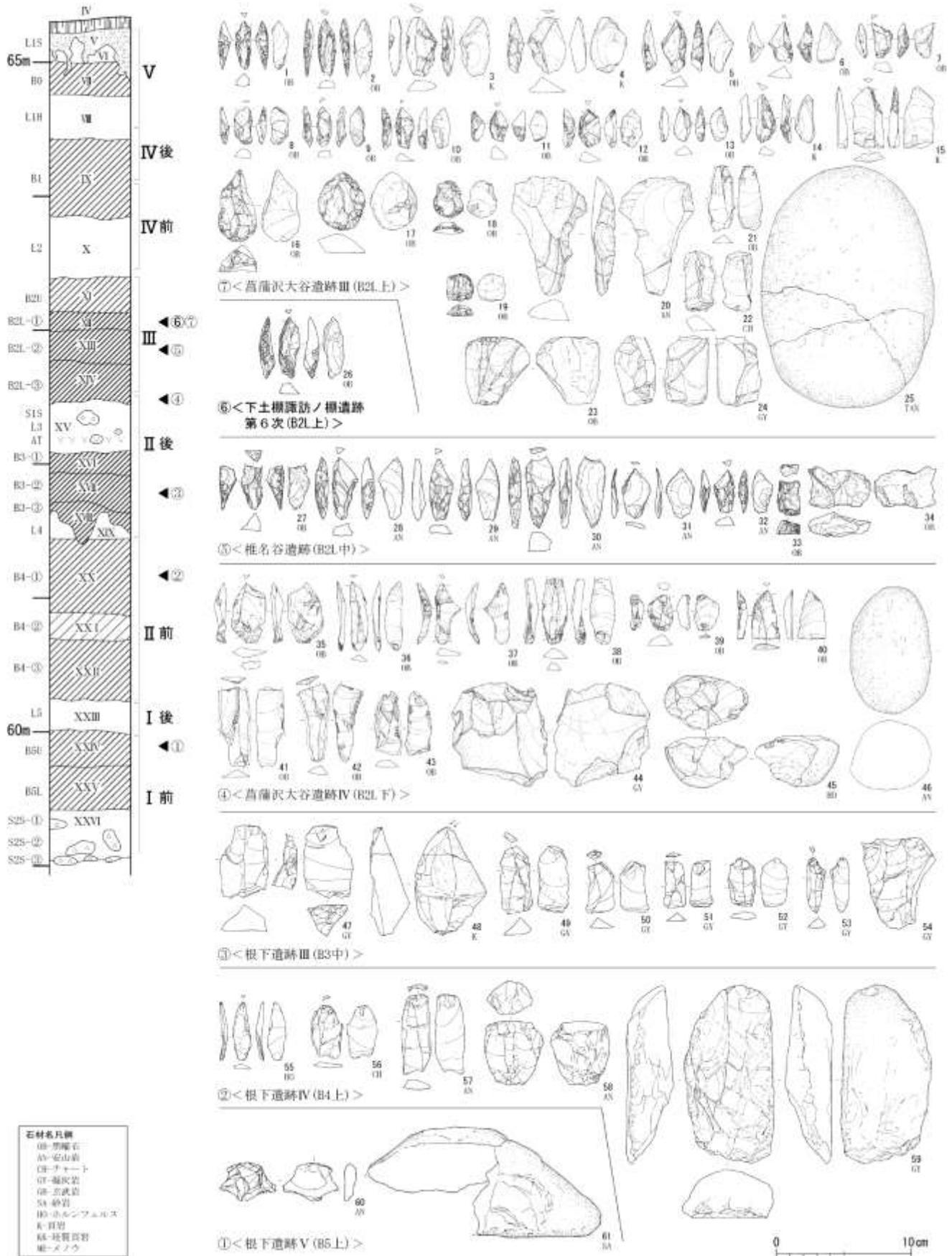


第2図 下土棚諏訪ノ棚遺跡の調査範囲と旧石器時代調査区



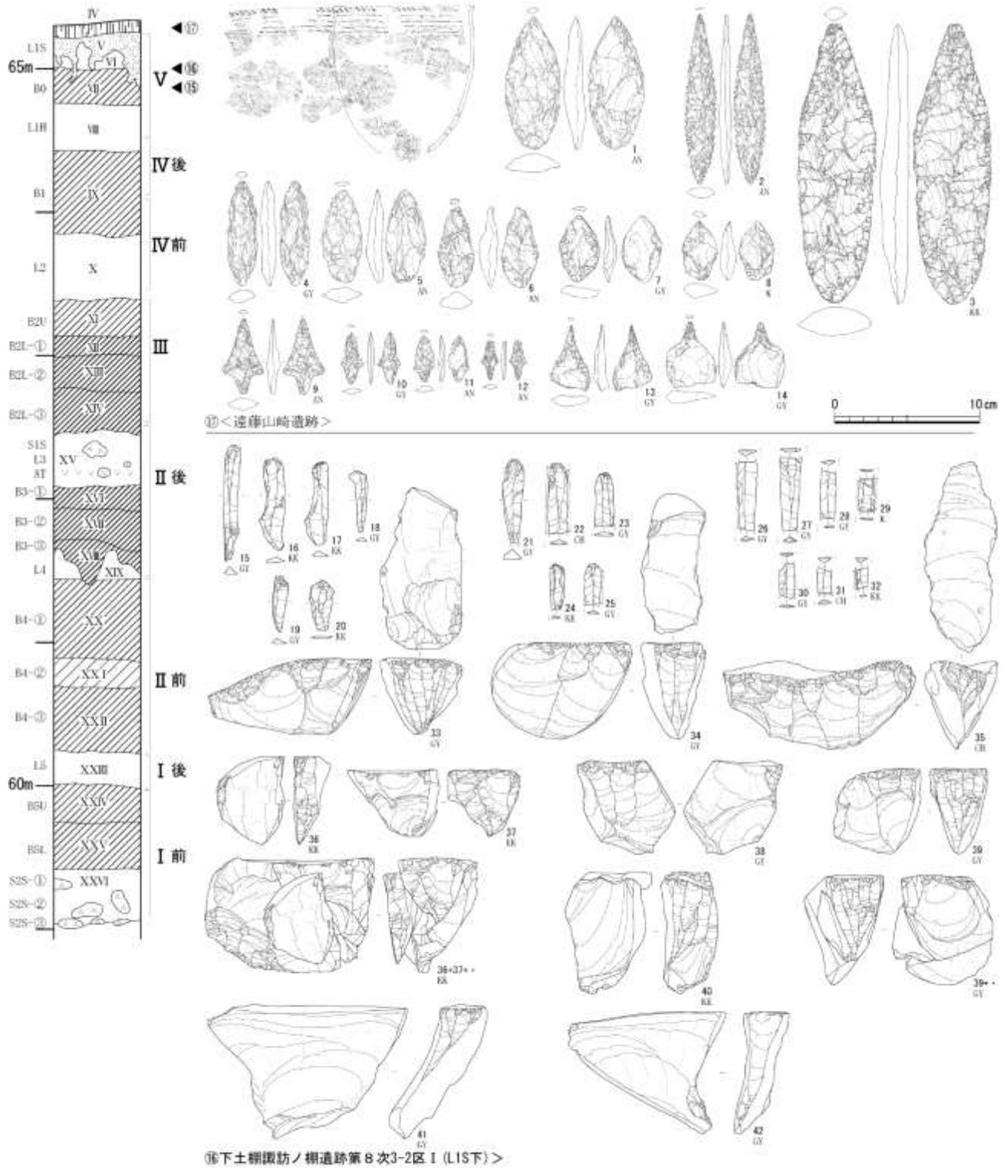
第3図 下土棚諏訪ノ棚遺跡の基本層序





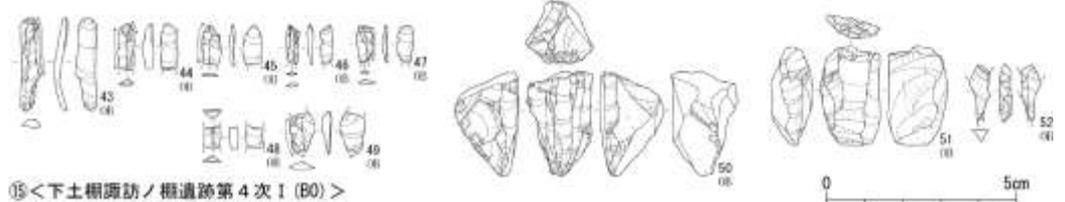
第5図 藤沢市の遺跡と主要石器 (1)





⑬ <遠藤山崎遺跡>

⑭ <下土棚諏訪ノ棚遺跡第8次3-2区 I (LIS下)>



⑮ <下土棚諏訪ノ棚遺跡第4次 I (B0)>

- 石材名凡例
- CH-黒曜石
  - AN-安山岩
  - CH-チャート
  - GY-緑閃岩
  - GE-玄武岩
  - SA-砂岩
  - HO-ホルンフェルス
  - K-頁岩
  - KK-片磐岩
  - ME-メノウ

第7図 藤沢市の遺跡と主要石器 (3)

# 藤沢で確認された砂川期の石器群について

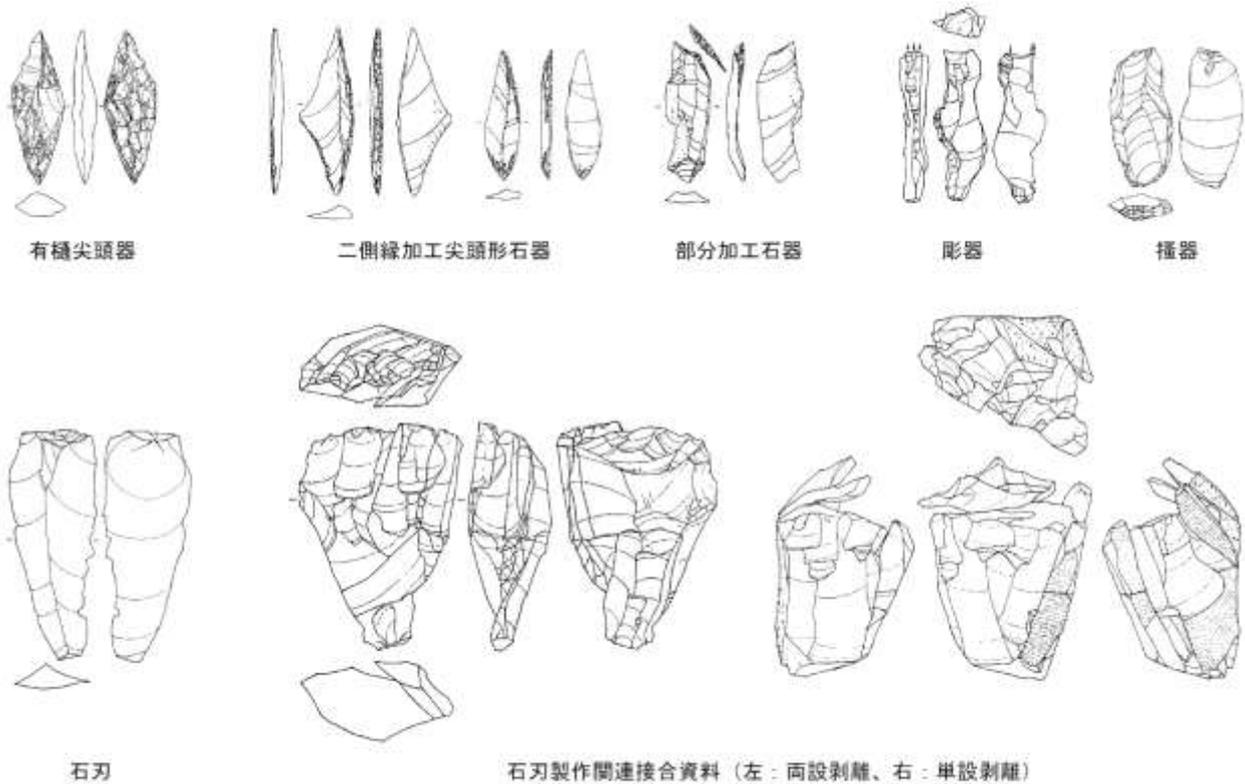
神奈川県教育委員会  
高屋敷飛鳥

## 1. はじめに

約 24,000～22,500 年前の後期旧石器時代後半期の一時期は「砂川期」と呼ばれ、南関東地方を中心に「砂川型刃器技法」（戸沢 1968）と呼ばれる発達した石刃技法により製作された石刃石器群がみられる時期である。相模野編年（矢島・鈴木 1976、鈴木・矢島 1978・1988）では第Ⅳ期前半、相模野段階編年（諏訪間 1988）では段階Ⅵの時期に相当し、層位的には主にL2層～B1層中部で出土する石器群になる。この時期は最終氷期最盛期という非常に寒冷な時期でもあるため、旧石器時代の人々は戦略的に様々な行動を取っていたと考えられる。

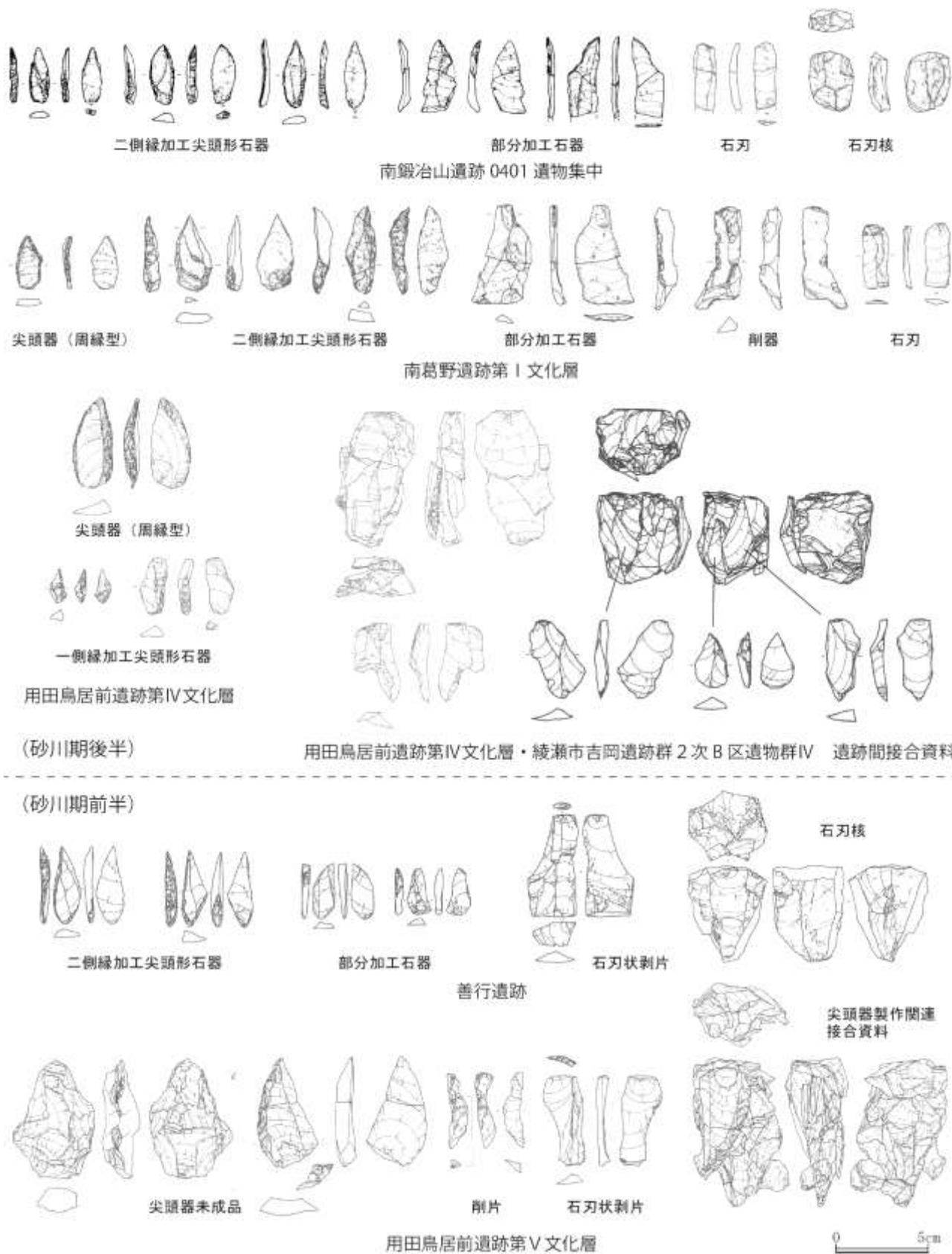
## 2. 砂川期の石器群

砂川期の石器群は、周縁型石刃技法（打面調整、稜付剥片の作出などの各種石核調整を積極的に行い、打面の周縁に沿って打点を移動させながら石刃を剥離する技法）により生産された、二側縁加工尖頭形石器（二側縁加工ナイフ形石器）と部分加工石器（部分加工ナイフ形石器）、彫器・搔器・削器などの加工具類が特徴的である（第1図）。また、先端に槌状の剥離がある



※有槌尖頭器のみ大和配水池内遺跡第Ⅴ文化層、それ以外は栗原中丸遺跡第Ⅴ文化層の資料

第1図 砂川期の石器 (S=1/3)



第2図 藤沢市内の砂川期の石器 (S=1/3)

尖頭器（有樋尖頭器）を少数伴う場合がある。石器石材は凝灰岩やチャートなどの比較的近場で採れる石材（以下、近傍石材。凝灰岩は相模川上流部、チャートは多摩川・入間川上流部に産地があるとされています）を主体とし、信州産黒曜石やメノウ・玉髓などの遠隔地石材も用いられる。

砂川期は主に二側縁加工尖頭形石器の技術形態的变化と放射性炭素年代値から、約 23,500 年前前後のより典型的な砂川期の石刃石器群がみられる砂川期前半と、約 23,000 年前前後の砂川期後半に分けられると考えられる（高屋敷 2025a）。以下では、その細分に従い、藤沢を始めとした相模野台地内の遺跡やそこから復元される行動上の特性等を述べたい。

### 3. 藤沢市内の砂川期の遺跡

藤沢市内の遺跡では、砂川期前半は善行遺跡や用田鳥居前遺跡第Ⅴ文化層などが挙げられる（第 2 図下）。今回のシンポジウムで取り上げられた下土棚諏訪ノ棚遺跡第 9 次調査の石器群も前半に属すると考えられる。藤沢では全体的に数が少なく、規模も小さいのが特徴的である（その理由は 4 で述べる）。なお、用田鳥居前遺跡第Ⅴ文化層は尖頭器が主体となる石器群である。

一方、砂川期後半は南鍛冶山遺跡 0401 遺物集中、用田鳥居前遺跡第Ⅳ文化層、南葛野遺跡第Ⅰ文化層、代官山遺跡第Ⅴ文化層、慶応湘南藤沢キャンパス内遺跡第Ⅲ文化層など多く確認される（第 2 図上）。特に南鍛冶山遺跡は石器点数 1084 点と規模が大きく、ほぼ柏峠産黒曜石で占められる点の特徴的な遺跡である。また、用田鳥居前遺跡第Ⅳ文化層の資料は、綾瀬市吉岡遺跡群第 2 次調査 B 区遺物群Ⅳの資料と遺跡間接合があったことにより、県指定重要文化財に指定されている。

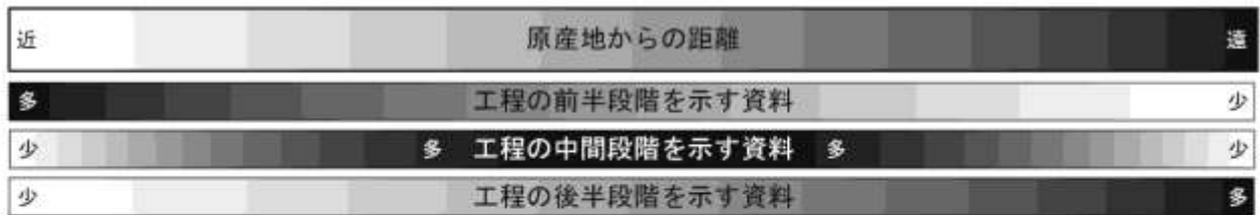
### 4. 砂川期の石器製作技術の仕組みと石材消費の方法

砂川期の相模野台地の遺跡では、原産地付近の遺跡で原石の粗割・石核調整が行われる。その後台地内の各遺跡で調整した石核から石刃を連続で剥離し、それらを素材に規格的な尖頭形石器を大量に製作する（第 3 図）。尖頭形石器に適さない石刃・剥片素材は部分加工石器や加工具に加工する。尖頭形石器などは破損率が高いため使用期間が短い石器であったと考えられ、凝灰岩やチャートなど主に近傍石材を用いて各遺跡で都度製作が行われる。対して加工具は再加工が多く行われ、信州産黒曜石や硬質頁岩など遠隔地石材も用いられることから、相対的に使用期間の長い石器であったと考えられ、複数遺跡で継続して使用されたとみられる。なお、石器群によってはこれに尖頭器が伴う。

後半になると石刃生産だけでなく縦長・不定形剥片生産も行われることが増える。尖頭形石器も形態にばらつきが出始め、前半の整然とした石器製作システムがやや崩れる状況がみられる。

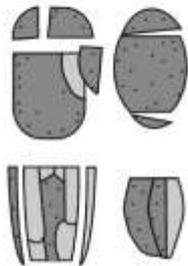
石材消費をみると、砂川期前半・後半共に清川村宮ヶ瀬遺跡群などの凝灰岩原産地付近の遺跡で凝灰岩石器製作の初期工程（一次前半）が多く行われる（第 4 図上）。凝灰岩に次いで多く消費されるチャートについては台地内で初期工程が行われませんが、台地北部～中央部にかけての境川沿いの遺跡で多く消費が確認される（第 4 図下）。これはチャートの原産地が多摩川・入間川上流部にあり、多摩丘陵を經由して相模野台地内に搬入されたためであると推測される。よって、原産地に近い遺跡ほどその石材のより前半の工程が多く行われ、原産地から離れるほど素材生産や道具加工・メンテナンスなどのより後半の工程が多く行われる傾向があるようである（第 3 図）。

また、遠隔地石材である信州産黒曜石は大規模遺跡にまとまって搬入されるが、それ以外の遺跡でも一定量搬入される場合が多く、有樋尖頭器の石材となることも多くみられる。一度の消費を抑えたり、できるだけ石材を使い切るなどの節約的な利用がみられ、入手が限られるものの優良な石材をできるだけ使いたいという製作者の意図が垣間見られる。なお、黒曜石は相対的に凝灰岩よりも二側縁加工尖頭形石器に利用される割合が高いことから、主に刺突具用に

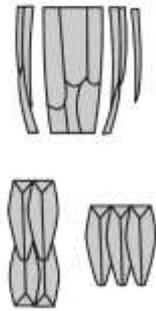


●石刃生産

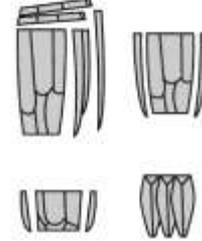
①原石粗割り・石核調整



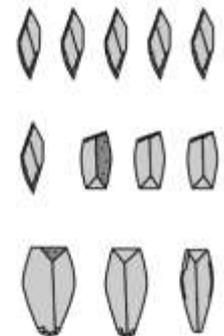
②素材剥離前半



③素材剥離後半



④二次加工



(+縦長・不定形剥片剥離)

⑤使用状況に応じて再利用・メンテナンス

※尖頭形石器：再利用・メンテナンス率低、使用期間短  
加工具：再利用・メンテナンス率高、使用期間長

(相模野台地)

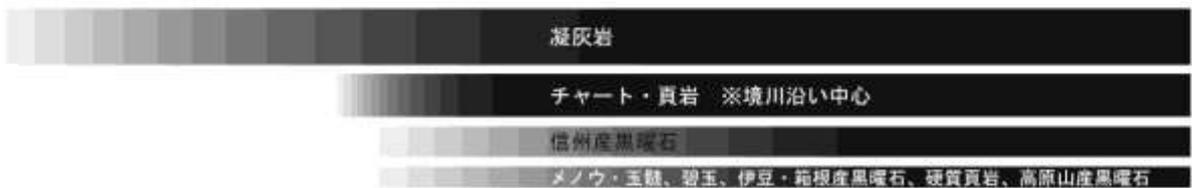


図 3 相模野台地における石刃石器群の石器製作工程と石材消費模式図

用いられたものとみられる。

メノウ・玉髓、碧玉、硬質頁岩、黒色頁岩、伊豆・箱根・高原山・神津島産黒曜石は基本的に点数が少なく、搬入が簡単な石刃・縦長剥片剥離しか行われていない。メノウ・玉髓、碧玉は主に砂川期前半の大規模遺跡で搬入・消費が行われる。

5. 相模野台地における砂川期狩猟採集民の行動パターンと移動ルート

3 の状況を踏まえ、相模野台地での行動パターンと移動ルートについて考察したい。

相模野台地の遺跡分布をみると、砂川期前半は台地北部～中央部にかけて、後半は台地南部にも進出し、台地全体に遺跡が分布する。砂川期前半は大規模な遺跡と小規模な遺跡に二極化し(島田 1998)、後半は大規模な遺跡が少ない特徴がみられる。

砂川期前半では、遺跡分布が台地北半部の境川沿いにまとまっていることから、台地北半部の境川沿い、距離にして約 20km を南北移動することが中心であったと考えられる(第 5 図左)。

宮ヶ瀬遺跡群では凝灰岩の粗割りが行われ、炉跡も確認されることから、主要石材である凝灰岩の粗割りを相模川上流部(やその支流)で集中的に行った後に、境川沿いに台地中央部へ



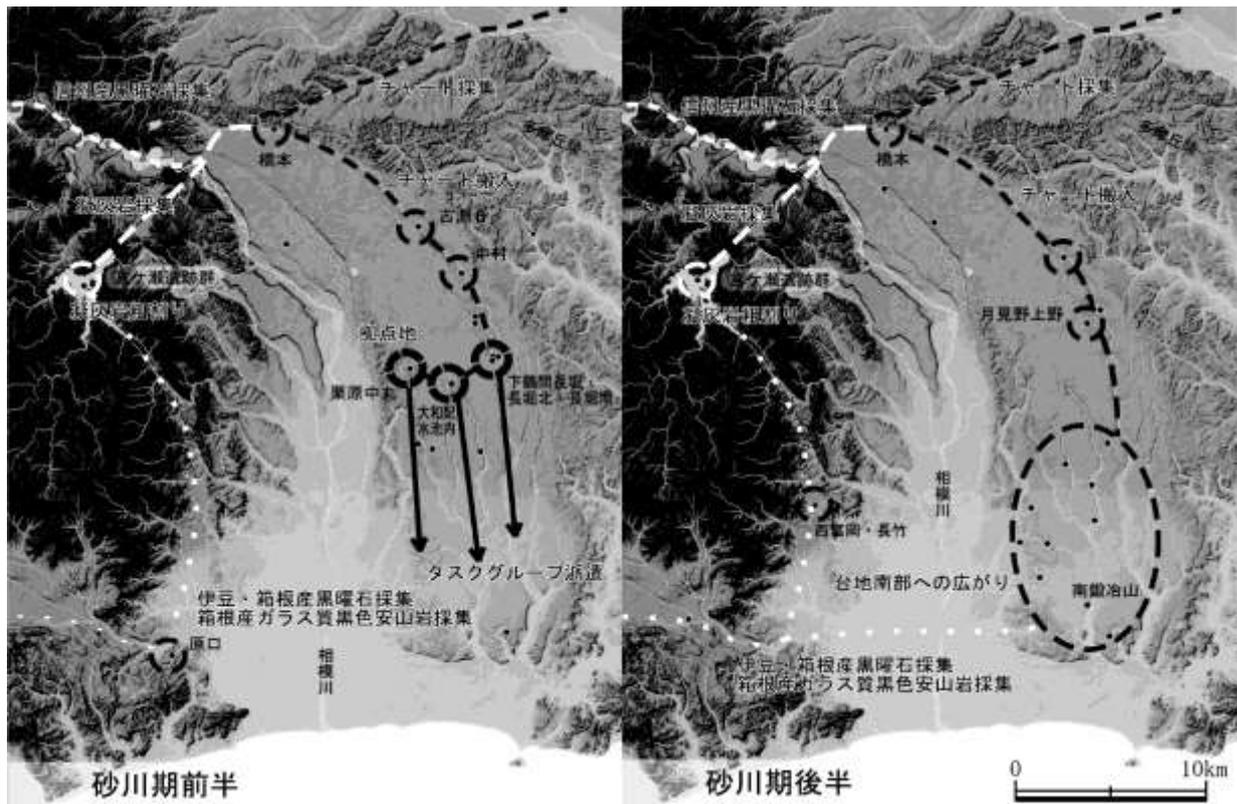


図5 相模野台地における居住形態及び移動ルート

移動するパターンが主とみられる。また、チャートも境川沿いを中心に搬入されることから、多摩川・入間川上流部からチャートを調達し、多摩丘陵を經由して境川沿いに台地中央部へ南下移動するパターンも次いで多かったと考えられる。

台地中央部には大和市下鶴間長堀遺跡や同市大和配水池内遺跡、座間市栗原中丸遺跡など規模の大きな遺跡が分布している。それらの内容をみると、石器点数 2,000 点以上、礫群 20 基以上と多数検出され、多様な石材が石器に使用され、源流部や湧水地に立地するという特徴がみられることから、繰り返しあるいは継続的な居住により資源が集積される拠点地であったと考えられる。

台地南部は小規模な遺跡が多いことから、台地中央部の拠点地から南部へ狩猟等を目的としたグループを派遣するという兵站的な遊動形態がとられていた可能性が高いと考えられる。台地中央部に分布する大和市長堀北遺跡では尖頭形石器が集中生産されており、狩猟時に備えて生産されたとみられる。

黒曜石は信州産が圧倒的に多いことから、相模川・多摩川上流部を經由して信州から調達したと予測できる。ただし武蔵野台地などの他地域と比べて搬入・消費量が少ないため、採集頻度は低かったと推測され、夏季などの一時期に採集が行われた可能性がある。

砂川期後半では、台地南部に遺跡の広がりがみられるが、それでも距離にして約 40 km であるため、遊動範囲は他の台地と比べて狭かったと考えられる（第5図右）。宮ヶ瀬遺跡群では前半から引き続き凝灰岩の粗割りが行われているため、凝灰岩の粗割りを相模川上流部で集中的に行った後に、境川沿いに台地中央部へ移動するパターンは維持されたとみられる。また、チャートも若干量は減るようだが境川沿いを中心に搬入されることから、多摩川・入間川上流部からチャートを調達し、多摩丘陵を經由して境川沿いに台地中央部へ南下移動するパターンも同様に維持されたとみられる。

一方、台地中央部では拠点地となるような大規模遺跡が見当たらなくなるものの、台地南部の南鍛冶山遺跡などで石器点数 1000 点前後のある程度の規模を有する石器群が分布するようになり、台地全体に遺跡が分布する。遺跡規模の二極化は弱まるものの、南鍛冶山遺跡や大和市月見野上野遺跡第 1 地点、伊勢原市西富岡・長竹遺跡など拠点となる遺跡は存在することから、基本的には兵站的な遊動形態がとられたと考えられる。黒曜石は引き続き信州産が多いことから、相模川・多摩川上流部を經由して信州から調達したと予測できる。特に後半には黒曜石の割合が高まることから、前半より採集頻度が高まった可能性がある。

なお、相模野台地では信州や武蔵野台地を中心に分布する男女倉型有樋尖頭器は一定量確認されるが、下総台地を中心に分布する東内野型有樋尖頭器はほとんど見当たらない。このことから、信州や武蔵野台地との結びつきは強いが、下総台地との結びつきは弱いことがわかる。

## 6. おわりに

最終氷期最盛期という寒冷な気候の中で、砂川期の旧石器人は石器製作技術を洗練させて規格的な刺突具を大量生産していた。砂川期はシカ類などの中・小型獣が主な狩猟対象獣と考えられ、冬季に群サイズが大きくなるシカ類に特化した狩猟を戦略的に行っていた可能性がある。

藤沢では、前半は遺跡数が少なく狩猟等一時的な利用にとどまったものの、後半に伊豆・箱根産黒曜石採集の拠点になると思われる遺跡が登場し、より積極的な居住や資源採集行動が取られたと考えられる。

## 引用・参考文献

神奈川県立埋蔵文化財センター 1984『栗原中丸遺跡』神奈川県立埋蔵文化財センター調査報告 3

財団法人かながわ考古学財団 2002『用田鳥居前遺跡』かながわ考古学財団調査報告 128

財団法人かながわ考古学財団 2003『吉岡遺跡群 X』かながわ考古学財団調査報告 153

島田和高 1998「中部日本南部における旧石器地域社会の一樣相」『駿台史学』102、1-49 頁

鈴木次郎・矢島國雄 1978「先土器時代の石器群とその編年」『日本考古学を学ぶ』(1)、144-169 頁

鈴木次郎・矢島國雄 1988「先土器時代の石器群とその編年」『日本考古学を学ぶ』(1)新版、154-182 頁

諏訪間順 1988「相模野台地における石器群の変遷について一層位的出土例の検討による石器群の段階的把握一」『神奈川考古』24、1-30 頁

善行遺跡発掘調査団 1994『神奈川県藤沢市善行遺跡発掘調査報告書』

高屋敷飛鳥 2025a「相模野台地における砂川期からナイフ形石器終末期にかけての石器群の様相と年代」『シンポジウム関東・東海地方の旧石器時代研究の現在 予稿集』62-67 頁

高屋敷飛鳥 2025b「相模野台地の様相」『関東地方北部の「砂川期」』岩宿フォーラム 2025/シンポジウム予稿集、58-67 頁

戸沢充則 1968「埼玉県砂川遺跡の石器文化」『考古学集刊』4-1、1-42 頁

藤沢市教育委員会 1996『南鍛冶山遺跡発掘調査報告書 第 3 巻 先土器時代』

南葛野遺跡発掘調査団 1995『神奈川県藤沢市南葛野遺跡』

矢島國雄・鈴木次郎 1976「相模野台地における先土器時代研究の現状」『神奈川考古』1、1-30 頁

大和市 No. 199 遺跡発掘調査団 2002『上草柳遺跡群大和配水池内遺跡発掘調査報告書』

## 【開催報告】

第47回相模ささら踊り大会（藤沢大会）

郷土歴史課

## 【開催報告】 第47回相模ささら踊り大会（藤沢大会）

郷土歴史課

### 1. 第47回相模ささら踊り大会

2025年（令和7年）7月9日（水）、梅雨明けの猛暑の中、藤沢市秩父宮記念体育館にて、第47回相模ささら踊り大会が開催された。

当日は鈴木市長をはじめ、神奈川県民俗芸能保存協会の平本副会長のご列席のもと、盛大に行われた。来場者数は、大会関係者等他181名、一般来場者67名の、合計248名であった。

ささら踊り大会は、神奈川県指定の無形民俗文化財である「相模のささら踊り」の伝承、普及、保存の担い手である県内7団体が一堂に会し、技術向上と親睦を深める目的で毎年開催しているものである。

今年は、本市の御所見地区を拠点に活動する葛原芸能保存会が、8年ぶりの当番となって開催された。

各保存会の演技の合間には、特別出演として、葛原芸能保存会と同じく御所見地区を拠点とする、「御所見ふれあい太鼓」による演技の披露もあった。

大会の最後は、参加者全員での合同発表として、「神奈川おどり」で締めくくられた。

### 2. ささら踊りについて

旧相模国で江戸時代に流行した、七夕踊り・小町踊りの流れを汲む、女性だけによる盆踊りである。大正末期に廃絶するも、戦後、旧相模国各地で復活した。

揃いの浴衣に帯を締めた襷掛けの女性が、長詞型または短詞型の独特な唄に合わせてピンササラを鳴らし、小太鼓を打ちながら踊るのが特徴の踊りである。

コロナ禍により二度中止されたものの、昭和52年以降、年に一度の連合公演を続けている。

（文責 松本亜美）



【葛原芸能保存会によるささら踊り】



【特別出演団体 御所見ふれあい太鼓】



【出演者全員での合同発表 神奈川おどり】

## 【開催報告】

「黒船来航―幕末・明治の浮世絵―」

藤澤浮世絵館

## 【開催報告】「黒船来航－幕末・明治の浮世絵－」

藤澤浮世絵館

会期 2025年11月12日（水）～12月14日（日）

### 開催の経緯

藤沢市藤澤浮世絵館は、藤沢市が郷土資料として収集してきた江の島や藤沢宿など地域に関連する浮世絵や資料を展示公開し、市民の郷土への愛着、文化の向上に寄与するために設立された施設である。2016年の設立以来、年に6回の展示を企画・開催しており、そのうち1回は他機関から資料を借用して展示を行っている。

「黒船来航－幕末・明治の浮世絵－」展では、国際基督教大学博物館湯浅八郎記念館、国際基督教大学（ICU）図書館、国際基督教大学名誉教授 M. ウィリアム スティール氏から資料を借用し、幕末・明治の浮世絵を紹介した。

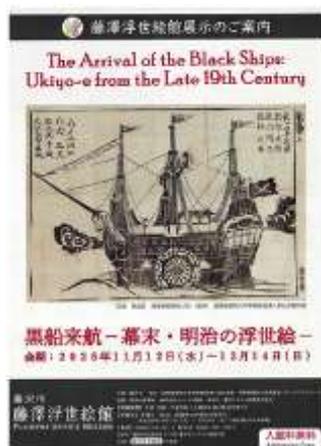
国際基督教大学博物館湯浅八郎記念館は、国際基督教大学初代学長であった湯浅八郎博士の国際基督教大学創設・育成に対する貢献を記念して、1982年6月に開館した大学博物館で、湯浅博士によって収集され、寄贈された各地の民芸品、大学構内に散在する遺跡から出土した旧石器時代から縄文時代にかけての考古遺物、その他の美術品、歴史資料、幕末・明治期の浮世絵を多数所蔵している。今回の展示では、浮世絵や瓦版など計18点を借用した。

国際基督教大学図書館は、1953年の大学発足とともに設置され、和書、洋書とも広範な分野におよぶ80万冊を超える蔵書があり、浮世絵など一部資料を国際基督教大学博物館湯浅八郎記念館に寄託している。本展示では、横浜浮世絵を中心として計9点を借用した。

国際基督教大学名誉教授 M. ウィリアム スティール氏は、日本近世・近代史を専門としている。幕末・明治期の浮世絵などを収集しており、「スティール コレクション」として、国際基督教大学博物館湯浅八郎記念館に寄託している。今回の展示では、「スティール コレクション」の中から、講演会にも関連する2点を借用した。

「黒船来航－幕末・明治の浮世絵－」展では、幕末から明治にかけての浮世絵や関連資料を用い、黒船来航から開国、明治維新、さらに文明開化へと続く時代の変化を巡る展示を行った。庶民を対象に出版された浮世絵は、当時の江戸庶民の興味、趣向、移り変わる時代の世相を鮮やかに表現しており、庶民が暮らした幕末・明治を迫体験できるように浮世絵版画以外の瓦版や版本などを展示するとともに、補足資料としてパネルや年表を作成するなどの工夫を行った。

以下、本稿では、主に本展の展示内容について述べていく。



### 展覧会チラシ

「瓦版 黒船図 海陸御固  
御役人附」(抜粋)  
国際基督教大学博物館湯浅  
八郎記念館所蔵

## 展示の構成と特色

### 展示構成

- 東海道五十三次コーナー「描かれた異国 描かれた日本」
- 藤沢宿コーナー「激動の幕末から明治維新へ」
- 江の島コーナー「幕末・明治の江の島と洋紅」
- 企画展示コーナー「新しいくらしと文化」

本展示では、江の島コーナーを除く三つのコーナーで、黒船来航から横浜開港、幕末の動乱と明治維新に至る状況、さらに明治に入ってからのからしの変化を、時代を追って紹介する展示構成を行った。

江の島コーナーでは、幕末・明治期の江の島の情景と幕末・明治に輸入された新しい絵の具、特に洋紅の使用による浮世絵の色の変化を紹介した。

### 東海道五十三次コーナー「描かれた異国 描かれた日本」

東海道五十三次コーナーでは、「描かれた異国 描かれた日本」と題して、黒船来航時の瓦版や卷子、開港した横浜を題材に描かれた横浜浮世絵を中心に展示した。

導入として、蘭学者の森島中良が蘭学知識を一般向けに解説した啓蒙書『紅毛雑話』（藤沢市所蔵）を展示し、鎖国政策下、限られていた海外との交易の中でも、オランダを通じて海外の事物への興味を江戸時代の人々が持っていたことを紹介した。

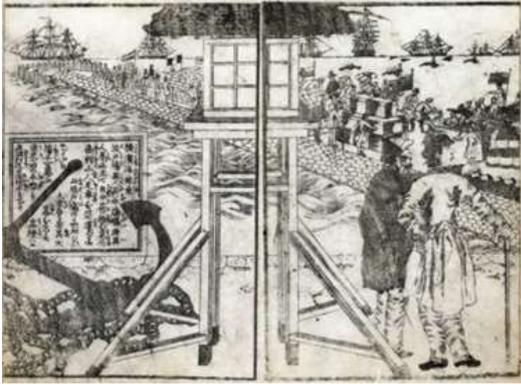
嘉永6年（1853）の黒船来航時、多くの瓦版が出版されており、その中の一枚「瓦版 黒船図 海陸御固御役人附」（国際基督教大学博物館湯浅八郎記念館所蔵）を展示した。黒船来航の知らせは、江戸時代の人々に衝撃を与え、幕府の海防を描いた御固図（おかためず）や、黒船来航時の様子を描いた黒船絵巻も多数制作されている。黒船絵巻のひとつである「相州浦賀米国船入津之図」（藤沢市所蔵）を一巻すべての場面が見られるようにケースに展示し、異国の衣服や持ち物まで細かく描かれていることを紹介した。また、多色摺りの「浦賀囲図」（藤沢市所蔵）を展示し、当時の幕府の海防政策に庶民が注目していた様子を伝えた。

安政5年（1858）に横浜が開港されると、新名所として浮世絵に描かれるようになり、様々な絵師によって、横浜絵（横浜浮世絵）が多数制作された。横浜の街の様子や外国人の風俗を紹介した作品が描かれ、当時、異国への興味が高まっていたことがうかがえる。横浜絵の一つ、外国人の風俗を描いた「仏蘭西 和蘭」（ICU図書館コレクション）、「亜墨利加国」（国際基督教大学博物館湯浅八郎記念館所蔵）など浮世絵を7点展示し、当時描かれた異国や異国の風俗を紹介した。

終わりの壁には、「描かれた日本」と題して、当時ロンドンで出版された挿絵入り週刊新聞『イラストレイテッド・ロンドン・ニュース』（ICU図書館コレクション）2点を展示した。そのうちの1点は、ペリーが出版した『日本遠征記』の挿絵が転載された「日本の特色：アメリカの日本遠征」という記事紙面を展示した。このように、日本が開国したことで、諸外国でも興味深く紹介された資料の展示を行った。



【図1】作者不詳「浦賀囲図」  
安政元年（1854）



【図2】歌川貞秀『横浜開港見聞誌』  
文久2年（1862）※抜粋加工

### 藤沢宿コーナー「激動の幕末から明治維新へ」

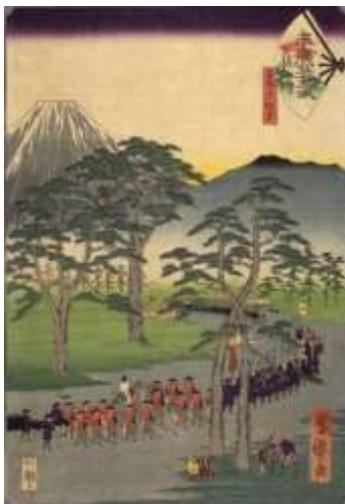
藤沢宿コーナーでは、第十四代将軍徳川家茂の上洛から、明治維新後の天皇の東幸を題材にした作品を展示した。

長州征伐に向かう家茂の三回目の上洛に合わせて出版された「末広五十三次 藤沢 南期乃松原」（藤沢市所蔵）を最初に紹介し、政情不安な幕末の特色が現れた浮世絵を展示した。

また、「嘉永年間より米相場直段并年代記書抜大新版」（ステイール コレクション）を展示し、黒船来航時から16年間の年ごとの大事件を描いた作品を紹介した。大事件を描いたコマは、桜田門外の変など政治的な事件も描かれているが、多くは自然災害や疫病などに割かれており、庶民にとっては政治的な事件より身近な災害の方が重要視されていたのを見て取れる。そしてその隣には「嘉永年間より米相場直段并年代記書抜大新版」のコマにも記載のある事件を扱った「瓦版 江戸近在大風出水焼場附」（藤沢市所蔵）を展示した。

戊辰戦争や江戸城明け渡しが起こった慶応4年（1868）頃、江戸や大坂などで数多くの諷刺画が出版されているが、版元と浮世絵師たちは、検閲をくぐり抜けるために、子どもの遊びや有名な源平合戦など、様々な形で見立てを使って表現している。本展示では、子どもの竹馬遊びに見立てられているが、実は戊辰戦争を諷刺した作者不詳「子供遊竹馬尽し」（国際基督教大学博物館湯浅八郎記念館所蔵）を展示した。当時、幕臣や新政府の要人を直接名指しできなかったため、浮世絵師は、登場人物たちの着物や柄、屋号、家紋、持ち物などで藩や人物を表していた。文様や家紋対応のパネルを展示し、当時の人々が絵に隠されたヒントから諷刺画を読み解いて楽しんでいたように、来館者にも読み解ける工夫を行った。

また、明治維新後の天皇の東幸をテーマにした作者不詳「題名不詳（明治天皇江戸上がり双六）」（藤沢市所蔵）と月岡芳年「東海道御幸之図」（藤沢市所蔵）を紹介し、江戸から明治へと移り変わっていく時代の変化を示す展示も行った。



【図3】  
歌川芳盛「末広五十三次 藤沢  
南期乃松原」慶応元年（1865）

## 江の島コーナー「幕末・明治の江の島と洋紅」

藤沢市所蔵の幕末・明治の江の島風景と白浪五人男に関連する浮世絵を展示した。

黒船来航から明治維新、さらには明治期の文明開化への流れの中、半独立したコーナー展示として組み込んだ江の島コーナーでは、幕末・明治の江の島の浮世絵を紹介した。江戸時代と変わらない情景が描かれながらも、輸入物の絵の具が使用されたことによって起こった色彩の変化が見て取れる。絵の主題にかかわらず、幕末・明治にかけて起こった色彩の変化から見られる特色を接点に、郷土史と他コーナーとのつながりを持たせる展示構成とした。

二代歌川広重「相州七里ヶ浜 江之島金亀山遠景之図」（藤沢市所蔵）を展示し、幕末・明治期に輸入されて多用されるようになった洋紅（アニリン染料）を使用した美人画を紹介した。

また、白浪五人男を描いた楊洲周延「題名不詳（白浪五人男）」（藤沢市所蔵）、歌川周重「題名不詳（白浪五人男）」（藤沢市所蔵）2点を展示した。白浪五人男の一人、弁天小僧は、江の島の岩本楼の稚児であったとされ、江の島とはゆかりの深い人物で、藤沢市は弁天小僧が描かれた浮世絵を多数所蔵している。白浪五人男は幕末・明治初期に人気を博し、その歌舞伎は繰り返し上演された。本展では、背面の地潰しが洋紅一色で摺られた歌川周重「題名不詳（白浪五人男）」を取り上げた。

そして、二代歌川国輝「江嶋大明神大祭参り常磐津女連中」（藤沢市所蔵）をケース展示し、動乱期でも、御開帳の折には江の島詣が変わらず行われていたことを紹介した。本図にも、空の表現などに洋紅や輸入絵具の使用が見られる。

さらには、週刊新聞『イラストレイテッド・ロンドン・ニュース』から「中国と日本のスケッチ（江の島洞窟）」（藤沢市所蔵）の記事を展示し、海外でも江の島が紹介されていた様子を伝える展示を行った。



【図4】歌川周重「題名不詳（白浪五人男）」 明治3年（1870）

## 企画展示コーナー「新しいくらしと文化」

企画コーナーでは、明治維新後の文明開化の様子を紹介する展示を行った。

日本初の鉄道敷設の前年（明治4年）に出版された二代菊池立祥「高輪蒸気車通行全図」（国際基督教大学博物館湯浅八郎記念館所蔵）を展示し、当時の庶民が鉄道や蒸気機関車に注目していた様子を伝えた。

中央のスクエアケースでは、藤沢市所蔵の明治初期に出版された福沢諭吉著『訓蒙窮理図解』や松山安信著・画『世界新名数』、仮名垣魯文作『格蘭氏伝倭文章』など版本を展示し、明治期に西洋の事物や人物を紹介する版本が多数出版されていたことを紹介した。

歌川国利「東京名所づくし」（国際基督教大学博物館湯浅八郎記念館所蔵）などを展示し、明

治に入ってから疑洋風建築や新しい街並みと新名所が加わった様子を紹介した。中央に設置したアクリルカバー面を傾斜させた三角形のケースには、小林幾英「上野公園の三景真図」(国際基督教大学博物館湯浅八郎記念館所蔵)と国際基督教大学博物館湯浅八郎記念館においても初出品の歌川国利「各区消防組出初之図」(国際基督教大学博物館湯浅八郎記念館所蔵)を両面に展示した。また、三代歌川広重「東京名所上野公園地内国勸業博覧会美術館之図」(国際基督教大学博物館湯浅八郎記念館所蔵)など、第一回から三回までの内国勸業博覧会の様子を紹介することで、江戸から東京へと変わりゆく街並みの変化を表す展示を行った。

日本の伝統的な道具と輸入された海外の道具が争う歌川芳藤「本朝伯来戯道具くらべ」(ステイールコレクション)や小林幾英「新板おどしき道具」(国際基督教大学博物館湯浅八郎記念館所蔵)などを展示し、明治政府による指導の下で、急速に進んだ文明開化ではあるが、反発と需要を繰り返しながら、徐々に暮らしが変化していった様子を紹介した。

また、小林清親が描いた「五本松雨月」(国際基督教大学博物館湯浅八郎記念館所蔵)と「柳原夜雨」(国際基督教大学博物館湯浅八郎記念館所蔵)を2点展示し、明治期に入って光と影を意識して洋風表現を取り入れた、新たな表現である「光線画」を紹介した。

最後に、作者不詳「新撰東海道五十三駅電信明細双六」(藤沢市所蔵)などの双六2点を展示し、双六にも文明開化の事物が描かれていることを紹介した。



【図5】 仮名垣魯文 作・歌川国政 画 『格蘭氏伝倭文賞』 明治12年(1879)



【図6】 企画コーナー展示風景

## 関連イベント

「学芸員によるみどころ解説」

展示している資料などのスライドを用いて、当館学芸員がみどころを解説する30分の講座。展示期間中に全4回行われる。各コーナーの概要と主要な作品をピックアップし、時代背景と解説を行った。藤沢宿コーナーでは、諷刺画を読み解くための文様や家紋などの説明も追加し作品理解を深められるように解説した。

日にち：2025年11月16日（日）、11月29日（土）

時間：午前11時～11時30分

午後3時～3時30分

会場：藤澤浮世絵館 多目的室

参加人数（全4回合計）：54人

## 関連講演会「幕末の浮世絵－黒船と米相場－」

日本近世・近代史を中心に研究されているM. ウィリアム スティール氏をお招きし、開催中の展示に合わせ、庶民から見た幕末・明治についてお話いただいた。借用させていただいたスィール コレクションの「嘉永年間より米相場直段并年代記書抜大新版」、歌川芳藤「本朝伯来戯道具くらべ」2点及び作者不詳「子供遊竹馬尽し」（国際基督教大学博物館湯浅八郎記念館所蔵）などの諷刺画を中心に、当時の社会情勢とともに解説していただいた。歴史とはいっても「再考」されうる複数のストーリーで成り立つというスティール氏の歴史考察への姿勢を学び、浮世絵を通して庶民から見た幕末・明治について理解を深めることができた講演会となった。

日にち：2025年12月7日（日）

時間：午後2時～3時30分

会場：藤沢市役所 本庁舎5階会議室

講師：M. ウィリアム スティール氏（国際基督教大学名誉教授）

参加人数：49人

## ワークショップ「木版画で摺る浮世絵年賀状づくり」

浮世絵や干支を題材にした当館の木版画を使用し、オリジナル年賀状づくりを行った。

日にち：11月30日（日）

時間：午前10時30分～12時30分

午後2時～4時

会場：藤澤浮世絵館 多目的室

講師：若林 豊氏（元藤沢市中学校美術科教員）

参加人数：午前12人、午後12人（計24人）

## 展示の反響と今後の展望

本展は、借用展示のため、29日間という他の展示より短い期間で実施した。評価について来館者アンケートの一部を紹介すると、「ICUの所蔵品はなかなか拝見できない作品でした。ショートスパンで企画を出し続ける力に驚いています。これからも楽しい企画を期待しております。」「文明開化は一気に進んだのではなく、「行きつ戻りつ」のような過程を経て進行したという事実の中に、「人間の本质」が感じられました。浮世絵を通して、「人間の本质」への理解が深まるような展示を、今後もお願いいたします。今回は、テーマの設定、展示作品の選択、解説文の作成と英語訳の全体にわたって、私の心を動かしてくれました。ありがとう。」「幕末から明治にかけての世相の様子を浮世絵を通じて知ることができて、大変有益で勉強になった。」といった意見が寄せられた。短い会期ではあったが、多くの来館者が訪れ、楽しんでいただけたように見受けられた。

一方で、「時代背景の説明と文字を現代の文字に読み下した読み解きパネルが増えるとうれしいです」、「照明がもう少し明るくできましたらと思います」といった意見が寄せられた。ま

た、チラシ・ポスターで使用した黒船図について、複数の来館者から文字情報についての質問を受けた。変体仮名を読み下しパネル化する対応は、今後の展覧会での課題と思われる。

本展では、藤沢市所蔵作品にはない幕末・明治の浮世絵コレクションを借用させていただき、当館だけではお見せすることのできない企画展示を行った。国際基督教博物館湯浅八郎記念館、国際基督教大学図書館、国際基督教大学名誉教授 M. ウィリアム スティール氏の協力を得るとともに、藤沢市所蔵の作品を併せて展示することで、幕末・明治の浮世絵の特徴や魅力を新たに伝える展示を開催することができた。

当館は、今後も浮世絵や郷土資料を活用し、藤沢の郷土史を紹介する展示を行っていく。それと同時に借用展示によって、藤沢市所蔵のコレクションだけでは実現できない展示を提供し、藤沢市民や市外の来館者に郷土の歴史に興味や関心を持ってもらえる機会となれば幸いである。

最後に本展の開催にあたり、ご協力を賜りました国際基督教博物館湯浅八郎記念館、国際基督教大学図書館、国際基督教大学名誉教授 M. ウィリアム スティール氏及び関係各位に、この場を借りて心から御礼を申し上げます。

(文責 中川淑子)

## 展示主要参考文献

- M. ウィリアム スティール『明治維新と近代日本の新しい見方』(東京堂出版、2019)  
国際基督教博物館湯浅八郎記念館『幕末から明治の諷刺画』(国際基督教大学博物館湯浅八郎記念館、2012)  
印刷博物館『開国 150 周年記念 西洋が伝えた日本 日本が描いた異国』(印刷博物館、2004)  
国立歴史民俗博物館『時代を映す錦絵－浮世絵師が描いた幕末・明治－』(国立歴史民俗博物館、2025)  
横浜開港資料館『ペリー来航と横浜』(横浜開港資料館、2004)  
西川武臣『ペリー来航』(中央公論新社、2016)  
松方冬子『オランダ風説書』(中央公論新社、2010)  
桜井邦朋『福沢諭吉の「科学のススメ」日本で最初の科学入門書「訓蒙窮理図解」を読む』(祥伝社、2005)  
神奈川県立歴史博物館『横浜開港 160 年横浜浮世絵』(神奈川県立歴史博物館、2019)  
公益社団法人 川崎・砂子の里資料館『斎藤文夫コレクション 横浜浮世絵』(公益社団法人 川崎・砂子の里資料館、2019)  
横田洋一編『横浜浮世絵』(株式会社有隣堂、1989)  
山本野理子「東海道中を描く錦絵の新展開－『御上洛東海道』を中心に－」(関西学院大学審査博士学位論文、2011)

# 藤沢市指定重要文化財の現状変更等（修理）

郷土歴史課

# 藤沢市指定重要文化財の現状変更等（修理）

郷土歴史課

## 1. 鶴沼皇大神宮人形山車（荻田）

### （1）文化財の概要

指 定 日 昭和63年12月16日

指 定 分 野 有形民俗文化財

所有管理者 鶴沼皇大神宮人形山車連合保存会

内 容 明治中期頃に皇大神宮の9つの氏子町内会がそれぞれ作成した人形山車。いずれも三層式で総高約8m、屋台前には精巧な彫刻が施され、上部に人形を立てる。毎年8月17日の例大祭では境内で湯立神楽が行われる中、囃子とともに人形山車9基が参集する。

### （2）修理前状況

経年劣化により山車を支える柱全体に亀裂。

### （3）修理概要

同材の杉材を用いて柱の交換修理を行う。

### （4）備考

令和7年度文化芸術振興費補助金（地域文化財総合活用推進事業（地域伝統行事・民俗芸能等））



## 2. 鶴沼皇大神宮人形山車（原）

### （1）文化財の概要

指 定 日 昭和63年12月16日

指 定 分 野 有形民俗文化財

所有管理者 鶴沼皇大神宮人形山車連合保存会

内 容

明治中期頃に皇大神宮の9つの氏子町内会がそれぞれ作成した人形山車。いずれも三層式で総高約8m、屋台前には精巧な彫刻が施され、上部に人形を立てる。毎年8月17日の例大祭では境内で湯立神楽が行われる中、囃子とともに人形山車9基が参集する。

### （2）修理前状況

- ・人形（日本武尊）の顔・手・足部に経年劣化による塗装の欠損。
- ・人形の躯体の竹組等、全体的な劣化
- ・人形の付属品の剣の鞘部の柄の損傷

### （3）修理概要

- ・人形の顔・手・足部の欠損箇所の修理
- ・人形の躯体の修理
- ・剣の鞘部の柄を金箔箔押しで復元

### （4）備考

令和7年度文化芸術振興費補助金（地域文化財総合活用推進事業（地域伝統行事・民俗芸能等））



江島御師善長坊（秋岡家）旧蔵  
版木等資料について

鈴木 良明

## 江島御師善長坊（秋岡家） 旧蔵版本等資料について

藤沢市文化財保護委員長

鈴木良明

江島御師善長坊（秋岡家）旧蔵の版本等資料一括（目録参照）は令和六年（二〇二四）江島神社に神納された。島内に居住されていた秋岡家は転出され、その旧宅は新たな所有者に引き継がれたが、残された旧蔵資料の貴重さに鑑み所蔵者はその取り扱いについて江島神社に相談のうえ同社へ神納という方策を講ぜられた。小稿はこれら資料について調査の機会を得、従来あまり知られていない「江島弁才天」信仰と「御師」の係わりについて示す資料と思われるので、ここに概要を報告するものである。

以下に写真版（反転写真）と目録を掲載するとともに資料ごとに若干の説明等を記し併せて「江島御師の消長」として概観を試みに付記した。

- 一 江島御師善長坊（秋岡家）旧蔵版本等写真（写真は反転処理・番号は目録番号と同じ）

1 奉修大辨才天般若心経如意満足祈所札版本



2 （種字）奉修江之寫弁才天長日護摩供所願成就攸札版本



3 八臂弁才天坐像・十五童子像版本



4 奉祝詞江之島大明神市杵島姫命御祈禱家内安祈攸木札



5 奉祝詞江之島大神市杵島姫命家内安全祈攸木札



6 奉祝詞江之島大神市杵島姫命家内安全祈攸木札



7 奉祀市杵島命子孫長久・五穀成就家運守護攸札版木



8 江之島神社女神坐像版木



9 女神坐像版木



10 江之嶋神社巳待御札版木





12  
人參不老散版木



11  
人參不老散版木



15  
神璽印



14  
(梵字)印



13  
蛇粕漬版木

二 江島御師善長坊（秋岡家）旧蔵版本等目録

番号	資料名	形態	発行者	寸法 タテ×ヨコ (cm)	員数	備考
1	奉修大辨才天般若心経如意満足祈所札版木	陽刻		28・0×6・0	1	墨痕
2	(種字) 奉修江之島弁才天長日護摩供所願成就攸札版木	陽刻		32・0×5・0	1	種字「ス」弁才天 虫損 墨痕
3	八臂弁才天坐像・十五童子像版木	陽刻	江嶋御師善長坊	36・2×18・5	1	墨痕
4	奉祝詞江之島大明神市杵島姫命御祈祷家内安祈攸木札	へぎ板墨書	秋岡善長	42・5×7・5	1	
5	奉祝詞江之島大神市杵島姫命家内安全祈攸木札	へぎ板墨書	秋岡善長	42・5×7・5	1	
6	奉祝詞江之島大神市杵島姫命家内安全祈攸木札	へぎ板墨書	秋岡善長	37・5×7・0	5	
7	奉祀市杵島命子孫長久・五穀成就家運守護攸札版木	陽刻		19・8×3・0	1	墨痕
8	江之島神社女神坐像版木	陽刻		34・8×13・5	1	墨痕
9	女神坐像版木	陽刻		17・0×12・0	1	墨痕
10	江之嶋神社已待御札版木	陽刻		42・5×12・5	1	墨痕
11	人參不老散版木	陽刻	江ノ嶋善長坊	7・5×9・0	1	墨痕
12	人參不老散版木	陽刻	江之嶋善長坊	9・0×9・5	1	裏面に格子状梓陽刻 墨痕
13	蛸粕漬版木	陽刻	善長坊 善右衛門	10・5×5・0	1	墨痕
14	(梵字) 印	陽刻		8・5×6・0	1	梵字「オン」 朱痕
15	神璽印	陽刻		5・5×5・2	1	朱痕

三 江島御師善長坊（秋岡家） 旧蔵版本等資料の概要（番号は目録番号と同じ）

- 1 陽刻の文字は「奉修大辨才天般若心經如意満足祈所」。弁才天を主尊として般若心經の転読祈禱を修しその証たる紙札を発行した版本。版本面は使用痕である墨の残存がある。「般若心經」を修したところから明治期の神仏分離以前に作製された版本であろう。
- 2 陽刻の文字は「種字「ス」..弁才天）奉修／江之寫／辨才天／長日護摩供所願成就攸」。弁才天を主尊として長日護摩供を修した紙札の版本。神仏分離以前の護摩供が修せられていた頃の作製。使用墨痕あり。
- 3 八臂弁才天坐像及び十五童子像の陽刻版本。版面は摩耗があつて判然としない部分もあるが、輪光の八臂弁才天坐像を奉じて、大黒天、毘沙門天、牛馬、十五童子を配し通常よく見られる構図と思われる。版下部に「江嶋御師善長坊」と発行者名を刻む。「善長坊」と号する「御師」の存在を示す。神仏分離以前の作製。使用墨痕あり。
- 4 ヘギ板に「奉祝詞／江之島／大明神／市杵島姫命御祈禱家内安全祈攸／穠岡／善長」と墨書。神仏分離後の神道による家内安全の祈禱木札。「穠岡／善長」が発行人であることから神仏分離後も活動を継続していたようである。「市杵島姫命」は神仏分離後の江島神社「中津宮」に奉祀の女神。
- 5 前号「4」とほぼ同寸のヘギ板に「奉祝詞／江之島／大神／市杵島姫命家内安全／穠岡／善長」と墨書の祝詞祈禱木札。4号は「江嶋大明神」とあるが本札は「江之島大神」とある。
- 6 「4」「5」よりやや小ぶりのヘギ板の祝詞祈禱木札五枚。墨書は「5」号と同じ。
- 7 陽刻の文字は「奉祀市杵島姫命／子孫長久／五穀成就／家運守護攸」。祈願内容の広範性が看られる。使用墨痕あり。
- 8 陽刻の女神坐像版本。女神像の奉斎の場は波頭の寄せる岩屋を想起させる。女神の脚下の左右に「蛇」を配す。上部に「江島神社」と陽刻の文字。作製は神仏分離後。使用墨痕あり。
- 9 陽刻の女神坐像版本。女神上部の左右に日月輪を配す。女神頭頂部の天冠に「鳥居」を置く。作製は神仏分離後。使用墨痕あり。
- 10 陽刻の文字「江之嶋神社巳待御札」版本。「巳待」は近世からの慣行としてあつた。使用時期は不詳ながら、作製は神仏分離以降。使用墨痕あり。
- 11 「人参不老散」の効能を説く陽刻の版本。以下に刻文を示しておく。読点や（ ）内の注は筆者が施した。作製は神仏分離以前。使用墨痕あり。

第一 虫、しよくしやう（食傷）  
くわくらん（霍乱）、下りはら（腹）  
しふりはら、何もさゆ（白湯）  
にて御用  
人 参 不 老 散  
りひよう（痢病）にハ めしの取ゆ（取湯）  
にて用、其外さんせんさん  
ご（産前産後）、さし合なし  
江ノ嶋善長坊

善長坊が御師的な活動していた頃に「人参不老散」と名付け、食傷などに効く薬用品として配布、あるいは販売したものであろう。

12 前号「11」と同じ。刻文もほぼ同様であるが、文字詰と表記に若干の相違あり。

#### 四 江島御師の消長

第一、虫、しよくしやう  
くわくらん、下りはら  
しふりはら、何もさ□<sup>(あ)</sup>  
にて御用  
人 参 不 老 散  
りひやうにハめしのとりに<sup>(あ)</sup> □

用、其外さんせんさんご  
差合なし

江ノ嶋善長坊

13 一枚板にぼぼ同文の刻文を上下二段に配す。「江ノ島名物」「匏粕漬」とあるから土産品・贈答用か販売用品に付されるために作製された版木であろう。発行者は上部に「善長坊」、下部に「善右衛門」とある。上下部で版木の発行者の違いは「善長坊」の坊号廃止と関係するのか、使い分けによるか。作製時期は神仏分離前・後。使用

墨痕あり。

江ノ島名物

江ノ島名物

匏粕漬

匏粕漬

善長坊

善右衛門

14 火炎宝珠に梵字「オン」の陽刻印。「オン」は守護梵字。「帰命」「供養」などの意。印面は朱色が残存。

15 「神璽」印の陽刻。印面は朱色が残存。

近世における「江島弁才天」信仰の拡散伸長は、周知のとおり江島本宮弁才天を祭祀する岩本院（坊）、上之宮弁才天祭祀の上之坊、下之宮弁才天祭祀の下之坊で、この三社・三坊体制を中心とした活発な活動の展開に因るところが大きいといわれる。いっぽう島内に居住したいわゆる島内「御師」たちの活動も江島弁才天信仰の拡散伸長にとつて無視することのできない存在であったと評されてきた。しかし、この「御師」たちの活動実態については必ずしも明らかではない。今時、江島神社に神納された「御師善長坊」（秋岡家）の版木類は江島弁才天御師としての経営活動や経緯の一端を示す興味深い資料である。

近世における江島弁才天「御師」について概観しておこう。

江島弁才天「御師」と表出する史料は慶安三年（一六五〇）の三坊（岩本院・上之坊・下之坊）と島民との争論文書に見える（注1）。これによれば、島民のうち一四、五人が弁才天札の配賦を望みこれを許してきたが、昨今ではこれらの内で四、五軒は旅籠を経営し、みだりに導者を宿泊させているので、三坊側は経営上困窮している」と御奉行所に訴えた。少なくともこの頃には弁才天の「札を売り初尾を取る」御師的活動を行う者たちがいたことを示す史料である。この訴訟は、評定所にのぼり島民の旅籠屋経営を原則禁じたものの、配札行為については、御師たちが弁才天へ「似合奉公可仕」とし、この実行なければ「札配停止」との条件のもと継続を許容する評決となった。

その後、宝永四年（一七〇七）に岩本院と島民との間で取り決めた江戸市中での配札行為についての一札（注2）がある。江戸市中で島民が「御師」と名乗り「御祈禱札・天女之像等」を添えての活動を原則禁止するとする一方、江戸以外の「田舎旦那場」では前々通りと約したものだ。島民のうち「田舎旦那場持」を有する者三〇数名が連署している。慶安期から約五〇数年後には江島御師の数は倍増し活発な活動をしていた状況を認めることが出来る。

明治初年の「神仏判然」令により江島弁才天信仰を維持してきた祭祀と執行体制はおおきく転換した。本宮旅所に多紀理比売命を祭神として奥津宮を、上之宮に市寸島比売命を祭神として中津宮を、下之宮に田寸津比売命を祭神とし辺津宮とそれ

ぞれ旧称を改め、これら新三社を統括して「江島神社」を設立した(神名表記は江島神社による)。廃仏を通し神祇道にての祭祀に移行したのである。これに伴って旧三社の別当たる僧侶は復飾して江島神社の神主に転じ、旧来の「御師職」は江島神社の社家として新たにとりたてられた。慶応四年(一八六七)八月の史料(注3)によると二〇名がこの時社家に取立てられた。ただ、明治四年(一八七一)正月の三社神主宛てに社家は神職名でないため「祝職」を唱えたいとの願書(注4)が提出されるが、この時には社家希望者一一名の連署であった。

神仏分離以前に「御師善長坊」の存在していたことは版木類から明らかである。そして神仏分離後は旧善長坊を秋岡家が引き継いだことも版木類からも伺えよう。

秋岡家について付言しておこう。同家旧宅は「三宝荒神」の社(異荒神とも)と接する地であった。同社は三宝荒神を主尊にして現存する。社殿内に奉安される諸神仏については詳報(注5)があるのでそれに譲るが、同社は秋岡家が祭祀管理していた。

秋岡家は江戸時代後期頃の江島の様子を描いた「江島大絵図」(注6)に下之坊地に接して「八十八」「善左衛門」「太左衛門」「元右衛門」の地が並べ描かれる。この内「八十八」が現存「三宝荒神社」に接した地であるので、版木類を伝えた秋岡家はこの「八十八」の系譜につながる。今時の江島神社神納の版木類もこの地の新所有者からの申し出によっている。

◇

江島弁才天御師は旅籠屋経営者と兼職者が多かったと思われる。天保四年(一八三三)刊の『江の島まうで浜のさざなみ』(平亭銀鷄)によれば二二軒の旅籠屋があった。前記の史料を通観すれば、御師の数ははじめ一四、五名から三〇数名(田舎且那場持ち)に増加し、江戸後期には二二軒(旅籠屋)があったということになる。

ただ、旅籠屋経営者がすべて「御師」的な活動をしてきたかは不明で、単に旅籠屋経営のみの可能性もあるので留意すべきであろうが、先にもふれたが、慶応四年の八月新政まもなくして発せられた神仏分離令により、二〇名が社家に取り立てられるようにと鎮将府伝達所宛に願書を提出している。神仏分離直前までこれらの者が「御師」をしていたと見られる。しかし、明治四年には一一名が「祝職」を鎮将府伝達所宛に望んでいる。「御師」の称号が廃せられて御師的な活動を継続する

ためには、江島神社に神勤する「祝職」としての職名を必要としたからであろうが、御師的活動者はこの間半減している。神仏分離政策が江島弁才天信仰を大きく転換させたといえよう。

以下に版木類について補足をしつつ「善長坊」について若干ふれておこう。

旧善長坊版木類を大別すれば神仏分離前とその後の時期に分かれる。版木に「善長坊」を刻するのは神仏分離以前の作製と見て差支えは無く、それ以外は神仏分離後であろう。

「1」版木の陽刻文字は「奉修大辨才天般若心經如意満足祈所」。「2」の陽刻文字は「ス」(弁才天種字)奉修/江之島/辨才天/長日護摩供所願成就攸」。ともに祈願者の依頼により弁才天を主尊に密教修法により祈禱完了の証として祈願者に紙刷にて配付するための版木である。「般若心經」の転読が行われてであろうし、「長日護摩供」には護摩が焚かれたであろう。そのいずれもが修法を伝授された僧侶などの行じたものと見るのが自然である。この点を踏まれば「善長坊」自身が護摩壇を構えた修法の伝授者であり、御祈禱済の証としての版木札を所有して発行し得たのかという疑問が生じる。しかも祈願の主尊は「弁才天」である。江島における主尊となる「弁才天」は三社(岩屋・上之宮・下之宮)に奉斎される尊像以外にはないと見て差支えなからう。つまり、「1」「2」は三坊(岩本院・上之坊・下之坊)のいずれかが修法の祈禱を行い、その証としての札の発行権を専有したと考えられる。いっぽう、「御祈禱札」「弁才天之像」の配札権は従前から御師の活動としてあった(注7)。発行権のある三坊方と配札権を認められている御師との関係は一定のルールがあったのであろうことが想起される。

「善長坊」について次のような伝承がある。「善長坊は岩本院傘下の坊で、昔は岩本院が満員の時は、講中を宿泊させた」という(注8)伝承から想像するに、嘗て岩本院と善長坊の関係は「御祈禱」札等の発行・配札と宿泊に連動した関係にあったのではない。因みに他山では「坊入」といい、祈願者(参詣者)は御師の取次にて別当坊にて祈禱を受け、その御祈札を授与されるのが一般的な慣行であった(注9)。即断は避けるが「1」「2」の版木を所蔵した「善長坊」と「岩本院」はじめ、後述のように「下之坊」や他の坊中と「御師」たちとの間にも特別な許諾の関係があったのではないかと思えるのだが、明確な資料を欠く現状にあるのですべて後

考を俟つとしておきたい。

「3」八臂弁才天坐及び十五童子像は通常みられる図像の版木である。発行者「江嶋御師善長坊」と刻すので「善長坊」自らの開版である。このような御師名を表記した同様な図像札は「江島御師／宇田川武藤太一（藤澤浮世絵館蔵）」と刻したものが確認できるので、御師各自が版行し配賦していたと思われる。このような図像は三坊はじめ御師たちも版行していたようであるので、図像構成や発行者の違い等を比較検討できれば、「三坊」と「御師」の関係をより明らかにし得るのではないかと思う。

「4」「5」「6」「7」はほぼ同寸のへぎ板に墨書の札。「江島大（明）神市杵島姫命」に祈願齋行の木札である。神仏分離後の神道による齋行であることは明白であるが、「市杵島姫命（市寸島比売命）」は中津宮の祭神であり、この祭神への祈願に「善長／龜岡」が関与していた時期があった。木札には「善長」として「坊」名が無い。このことから「御師」廃業して間もない頃にその名残をとどめ継承して活動していたと思われる。祈願内容は家内安全、子孫長久、五穀成就など広範に通ずる求めに応じていた。

「8」「9」は女神坐像の陽刻版木。江島の旧三社（岩屋・上之宮・下之宮）は神仏分離以降それぞれに奉安されていた弁才天に替わり、奥津宮（多紀理比売命）、中津宮（市寸島比売命）、辺津宮（田寸津比売命）に宗像三女神を配祀することになった。「8」は「江之島神社」と刻し波頭寄せる岩屋内奉斎の女神坐像を描き、胸前に宝珠を持ち脚下の左右には「蛇」を配する構図である。女神坐像に「宝珠」を持たせるのは「宇賀弁才天」（八臂弁才天）の象徴的持物をとどめたか。「9」は波頭を前にして奉斎の陽刻女神坐像もやはり岩屋奉斎を想起させる。頭頂の天冠に鳥居を据えて胸前で檜扇を開き、像の上端には日・月輪を配す構図である。鳥居を描くのは「宇賀弁才天」（八臂弁才天）の名残をとどめた感がある。このような女神像は持ち物など発行者により構図の異なる多種の図像をしばし散見する。今後これら女神図像や旧三社発行の弁才天図像を比較分析すれば新知見を得られよう。

「10」江之嶋神社巳待御札は、神社になっても「巳待」を行っていた。「善長坊」時代の活動が継続していた証左となる。版木の使用時期は神仏分離期以降からであるが、「巳待」は江戸期から続く重要な行事であった。江戸期に岩本院主が重要用

件で江戸に滞在していた時にも巳の日には必ず帰島している記録がある（注10）。江嶋神社で現在も四月初巳例大祭が斎行されている。

「11」「12」は「人參不老散」なる薬の効能を説いたもの（前掲の翻刻参照）。これらは「善長坊」等を刻してあるので活発な御師時代の経営活動を物語る。「御師」の配札行為にともないこのような薬用品等を土産品として携行し配付していた例は他山の御師活動にもよく見られた。「13」も江島の特産品「蛸」を土産品やあるいはまた販売用にも用いた商標印刷用の版木であろうが、経営活動の一半を示している。

「14」は梵字（オン・守護梵字）を陽刻した印。前述したように「善長坊」（秋岡家）は隣接地に「巽三宝荒神」の社が建ち、社殿内に三宝荒神像はじめ弁才天像等を現在でも奉安している。

天明六年（一七八六）下之宮末社に「荒神社」（九尺四方）、上之宮末社に「三宝荒神」（二尺五寸・三尺）のあったことが知られる（注11）。『新編相模国風土記稿』にも荒神二社の名が見える。現存の「三宝荒神社」はこのうち下之宮の「荒神社」であろうかといわれる。その根拠は当社屋根葺替時の文政三年（一八二〇）棟札に「下之坊・恭順」の銘があることにより下之坊管理下にあった証左であるとする（注12）。

また、三宝荒神像は三目三面の憤怒坐像で頭頂に三猿（後補）を載せることから庚申信仰との関係も指摘され、また「火の神」との信仰もあったかという（注13）。本印は火炎宝珠に「才」の梵字であるので「火伏」札として発行をしていた可能性もあろうか。

◇ 「15」の印文は「神璽」。多様な用途があろう。

従前、江戸期の江島御師の活動を示す史料は決して多くはない。神仏分離により資料の散逸や滅失もあったと思われるが、ここに紹介した版木類等は江島御師たちの具体的な活動を少しでも窺う資料になれば幸いと思うとともに、とくに版木類や札類、また本宮、上之宮、下之宮の「弁才天像」が多種版行されているので、それら資料の調査・収集、整理しておく必要性を感じた次第である。

最後にこの小報を執筆するにあたって、江島神社宮司相原園彦氏、同権禰宜堀寄壮氏には貴重なご教示を得たほか、五島文人氏、荒井秀規氏、藤澤浮世絵館、藤沢

市文書館のご協力をいただき、また調査・写真撮影・編集作業にあたって郷土歴史課 岸葉抄苗氏のご協力を得たことを記し御礼を申し上げておきたい。

(注)

- 1 『江の島岩本院の近世文書』(平成15年藤沢市教育委員会編)所収 31号文書。
- 2 『江の島岩本院の近世文書』(平成15年藤沢市教育委員会編)所収 127号文書。
- 3 『江の島岩本院の近世文書』(平成15年藤沢市教育委員会編)所収 326号文書。
- 4 『江の島岩本院の近世文書』(平成15年藤沢市教育委員会編)所収 410号文書。
- 5 『藤沢市文化財調査報告書第7集』南部地区(東1-2)平成4年藤沢市教育委員会編。
- 6 『江の島岩本院の近世文書』(平成15年藤沢市教育委員会編)所収トレース図前注1、2と同じ。
- 7 『江の島の民俗』平成7年藤沢市教育委員会編)。
- 8 有賀密夫「大山門町の研究」『大山信仰』(圭室文雄編 雄山閣出版 平成4年)『伊勢原市史』資料編 続大山(平成6年 伊勢原市史編集委員会編)には、「宝暦三年大山寺山法」中に坊入や祈禱の取次などに関する規定が見える。
- 9 宝暦三年十二月「杜領御寄附独礼願御朱印頂戴之次第留」『江の島岩本院の近世文書』(平成15年藤沢市教育委員会編)所収121号文書の十一月十一日条)。
- 10 『江の島岩本院の近世文書』(平成15年藤沢市教育委員会編)所収 254 255号文書。
- 11 前注5と同じ。
- 12 前注12と同じ。

藤沢市文化財調査報告書

第 61 集

(非売品)

2026 (令和8) 年3月 発行

編 集 藤沢市 生涯学習部  
郷土歴史課

印 刷 藤沢市

発 行 藤沢市